

2010年度

渥美国際交流奨学財団年報

Atsumi International Scholarship Foundation

Annual Report



渥美健夫氏遺影

渥美国際交流奨学財団は故渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志に基づき日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて、1994年4月1日に設立されました。

当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に奨学援助をいたします。

日本にやって来た留学生の皆さんが、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますようお手伝いさせていただきたいと思えます。

若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道が開かれてゆくことを願っております。

2010 年度 渥美国際交流奨学財団年報

目 次

◇理事長のことば	渥美伊都子…… 2
◇交流事業・思い出	
・現場見学会	…… 4
・蓼科旅行	…… 6
・渥美奨学生の集い 講演：法政大学・王敏教授「日本と中国 相互誤解の構造」	…… 9
・新年会	……11
・研究報告会	……13
◇ 2010 年度渥美奨学生のエッセイ	……16
◇ 2011 年度渥美奨学生の自己紹介	……30
◇ 2010 年度海外学会派遣プログラム参加報告	……43
◇ AISF ネットワーク	
・ラクーン会	……54
・日韓アジア未来フォーラム	……58
・SGRA チャイナ・フォーラム	……60
・SGRA モンゴル・プロジェクト	……64
・関口グローバル研究会 (SGRA)	……67
■渥美奨学生 2010 年度著作・論文・特許等リスト	……69
□付録	……80
・設立の趣旨について	
・2010 年度収支決算、貸借対照表	
・財団人名簿	
・奨学生名簿	
・2012 年度渥美奨学生募集概要	
・2010 年度寄附下さった方々	

「東日本大震災で感じたこと」

渥美伊都子



渥美財団は今年で設立 18 年目を迎え、昨年末には 17 期生 12 名を選考していただきました。設立当初の 11 名から始まった奨学財団でしたが、年を重ね、いつの間にか 204 名となりました。この多分野で多国籍の優秀な研究者たちをネットワークで結び、関口グローバル研究会「SGRA（セグラ）」を立ち上げてから 12 年になりました。その活動は毎年国内で 3 回、海外で 3、4 回フォーラムを開き、それをレポートにまとめて会員の皆様や内外の研究機関に送ったり、日本へ留学した方々の声をメールマガジンで広く社会に発信したりしております。このような活動ができますのも設立以来ご支援いただきました多くの方々のおかげと心より感謝申し上げます。

当財団では新制度改革の作業を進めてまいりましたが、おかげさまで 3 月 24 日に内閣府より認定を受け、4 月 1 日に登記をし、公益財団法人渥美国際交流財団となりました。事業としては従来通りの奨学支援事業と国際交流事業の二本の柱で運営することといたしました。今まで別組織として活動してきた SGRA は、渥美財団の国際交流事業と位置付けられました。理事会と評議員会は新しい顔ぶれとなり、理事には元奨学生 3 名の方にもお願いしました。

3 月 11 日午後 2 時 46 分、東北地方は大地震と大津波に襲われ多くの犠牲者と数十万人の被災者という大災害にみまわれました。引続き未だ経験したことのない原子力発電所からの放射能による汚染という大事故が起こり、それから 2 カ月過ぎた今も、先の見えない不安な日々が続いています。

この日私は帰宅し 3 階の居間で遅い昼食を済ませテレビを観ていました。突然地震速報が入り間もなく揺れ始めました。だんだん強くなり頭上のシャンデリアが大きく横に揺れているのを見て、これは普通でないと思い、ドアを開け下へ降りられるようにして様子を見ていました。手伝いの者が倒れそうなテレビを押さえていましたが、書棚も食器棚の扉も開かず物も落ちないうちに少しずつ治まってきました。テレビでは震源地は三陸沖でマグニチュード 9 と発表し、大津波警報が出たので直ちに高い所へ避難するよう呼びかけていました。間もなく沖の方から大津波が押し寄せて、みるみるうちに田畑も家も呑みこまれていく光景はただただ呆然と見ているだけでどうすることも出来ず、自然の猛威の恐ろしさを感じました。都内では電話も通じずうろろしている頃、海外に住む孫たちから「大丈夫？」というメールが入り、情報の早さに驚いたり、車の渋滞、電車の不通で帰宅できない子供や孫の心配をしたりしていました。

私の祖父母は隅田川のほとりの深川に住んでいました。大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災の時に直下型の大地震に遭い、同時に大水と大火災が起こり猫だけ抱いて何も持たず、命からがら逃げたそうです。その後しばらく麻布台に借り住まいしていましたが、土木屋であった祖父は東京中で一番安全な土地を探し、高台で地盤が良く出水の恐れのない所ということで私の今住んでいる文京区関口に決めたと聞いています。

津波の去った後の惨状を見た時に私は戦争中のこ

とを思い出しました。ある夜、空襲警報が鳴り防空壕に入り解除になったので出てみると、遠くに火の手が上がり東の空は真っ赤に燃え上がっていました。その焼け野原の光景を見た時の驚きと同じ感じでした。その後長崎や広島に原子爆弾が投下され、その折には草木も生えず人も住めないと云われていましたが、数年後には立派に復興しましたので、今回もしばらく辛抱すれば必ず復活し素晴らしい国になると信じています。

この未曾有の東日本大災害のニュースは海外に大きく報道され、世界中から支援したいと申し入れが届き、直ちに世界各国から救助犬を連れた救助隊が到着、日本の自衛隊と共に米軍は「ともだち作戦」を繰り広げ、行方不明者の捜索に取り掛かり多くの被災者が助けられました。と同時に世界中から毛布やテント、食料品、衣料品及び多額の義援金が届けられ、困っている日本を助けようという温かい気持ちが伝わり胸の熱くなるのを感じ有難いことと思いました。日本は戦後60年の努力のおかげで世界中から信頼され認められたからこそこのことで、この国境を越えた大きな支援の輪は、世界は一つ、喜びも悲しみも共に助け合うという友情をつくづく感じさせられました。

渥美奨学生や元奨学生の皆さんは全員無事で幸いでした。世界各地の元渥美奨学生の皆さんから、たくさんのお見舞いのメールやお電話をいただきました。「私は家族と共に日本で長く暮らしましたので、今回の事態を自国の出来事のように受け止めていま

す。しかし、日本は今回の大震災にも立ち向かう不屈の精神と回復力を持ち合わせていると思います」というようなメッセージに励まされました。その後、元奨学生の皆さんが様々な思いをSGRAかわらばんに投稿してくださり、それに対して各方面から反響がありました。この困難な時期に、ささやかながらも国際的なコミュニケーションの場を創ることができたのではないかと考えております。

終りに東日本大災害で犠牲になられた方々のご冥福を祈ると共に、多くの被災者の方々が一日も早く元気を取り戻され新しい生活を築かれますよう願っております。



交流事業・思い出

現場見学会

2010 年度奨学生、完成間近の羽田空港 D 滑走路建設工事現場を見学

2010 年 7 月 21 日（晴れ）、渥美国際交流奨学財団の今西常務理事を始め、嶋津事務局長、石井さんと 2010 年度の奨学生 6 人が参加して東京国際空港（羽田空港）の D 滑走路建設工事現場の見学会が行われました。

当日、りんかい線の東京テレポート駅で集合し、用意して頂いたバスで羽田総合事務所に移動しました。到着後、事務所で鹿島建設株式会社の椎野さんからパワーポイントや資料を使って、わかりやすい工事概要と概況説明を受けた後、ヘルメット、ライフジャケット、軍手を着用し、船に乗って工事現場に向いました。天気にもめぐまれ、初めての工事現場見学が空港の滑走路になるとは思わなかった奨学生の皆さんは大興奮でした。皆各自の人生の初体験を写真で記録しました。

東京国際空港は、今後さらに航空需要の増大が見込まれる中、既にその能力の限界に達しているそうです。再拡張事業の一つの D 滑走路建設工事は年間の発着能力を現在の約 30 万回から 40.7 万回に増強するために、新たに 4 本目の滑走路を建設する工事です。今後発着容量制約の解消、多様な路線網の形成などで利用者の利便性向上が図られ、さらに将来の国内航空需要に対する発着枠を確保しつつ、国際線定期便の受け入れも可能となります。本工事は鹿島を始め、日本の建設業界を代表する 15 社の建設会社が従事しています。

工事現場は、想像を絶するほどでした。従来埋め立て構造では、多摩川の通水性を確保できないために、滑走路の約 3 分の 2 は埋め立て、残りの 3 分の 1 は滑走路近くの多摩川河口の水流に配慮して、栈橋構造になっています。最初から計画して埋め立て部、接続部、栈橋部、連絡誘導路部という異なる構造を一体化した構造は、世界で初めての試みだそうです。2 年間をかけて設計し、その後 3 年間をかけ、すでに本体工事の 96% を完了し

たそうです。工事関係者の皆様の知恵のお陰で無から作った新たな滑走路を海上に創り、巨大栈橋の上で飛行機の離着陸を実現する素晴らしい工事だと感銘しました。新しくできる羽田空港 D 滑走路は、全長 3120m、滑走路長 2500m となります。最新の旅客機エアバス A380 にも対応して設計されているそうです。



興奮を抑え、待つ時間 30 分、海路で D 滑走路を一周回った後、ついに D 滑走路に足を踏み入れました。現場がとにかく広くて大きく、余

り音が煩くないことが第一印象でした。新しい発想と最新技術を、設計・施工の随所にみることができました。また、工期短縮のため、年間 365 日 24 時間体制で、安全を確保しながら施工を行っていることに驚かされました。

世界でもトップの日本の建設技術に応用する雄大な工事現場を見ることができ、渥美財団や鹿島建設に心よりお礼を申し上げたいと思います。とりわけ、炎天下、できるだけ現場を歩かず、効率的に見学できるようお気遣いくださった鹿島の椎野さんに心より感謝しております。大変貴重な経験でした。

見学会後、全員は京浜急行電鉄で品川に移動し、納涼会が行われました。今回は奨学生たちの都合がつかず、参加者が少なく、残念でしたが皆さんはフランスパンから羽田空港の将来まで様々な話題で盛り上がりました。楽しく、かつ充実した一日でした。

(文責：王 昕)



蓼科旅行

蓼科 2010 旅行記

2010年7月2日（金）

ほとんどの時間を研究室や図書館で過ごしている私にとって、緑いっぱいの自然に触れる今回の蓼科旅行は密かな楽しみであった。わくわくしながら荷造りをしていたら、トランクがすぐにいっぱいになってしまった。旅行先で論文など書けるわけがないと分かっているながら専門書やパソコンを入れてしまうのを、私達は「博論病」と呼んでいる。

朝8時半頃、新宿センタービル前は見慣れた人々が集まっていた。私達は、イヴゲニさんのフェイスブックの内容に盛り上がり、美人のフィアンセを連れてきたマティアスさんの登場に大騒ぎしながら、まだ来ていない人を待っていた。

「SUWA ガラスの里」で昼食を済ませてから向かった諏訪大社上社本宮。諏訪大社では、ちょうど今年の5月、7年に1度行われる御柱祭（注：八ヶ岳の山中から伐りだされた樅の神木を運び、社殿の周囲に4つの柱を建てる）

□諏訪大社にて



が行われたという。噂の御柱は、想像以上に大きくて、妙な威厳を感じさせられた。文化財に詳しい崔さんの面白い説明を聞きながら神社を回り、神社に行くたびにおみくじを買うという王さんにつられて私もおみくじを買った。真っ先に学業運を読んで今年の博論の運命について考えていたら、隣でも「学業運が……」、「博論が……」と騒いでいる。みんな考えることは同じようだ。

宿泊するチェルトの森は、まさに森の中に囲まれている快適なところで、東京では考えられない気持ち良い涼しさと鳥の鳴き声が聞こえる静けさで心が癒され



た。しかも、噂どおり携帯電話が繋がらない！ 文明の利器が使えないことでホッと安心感を抱くのはなぜだろう。夕食の後に研修室で行われたオリエンテーションでは、チェルトの森や八ヶ岳について説明をしてもらったのち、互いに自己紹介を行った。ルーティン化した日常生活の中では、自分の周りが世界のすべてだと思いがちだが、世の中には本当に様々な人々が、様々なライフスタイルの中で、多様な研究を行っている。しかし、人々の心を愉快にさせる笑いは世界を貫く共通点であろう。リビングに集まった人々はビールを飲みながら旅の疲れを癒し、部屋に戻ってからは、これもまた世界共通である恋愛をめぐるガールズ・トークが深夜まで続いたのであった。

7月3日（土）

朝食の時間、ミヤさんの夫ジャクさんは、手慣れた感じで子どもの食事の世話をしていた。夫婦とも研究者であるミヤさんの場合、午前パパが、午後ママが子どもの世話をするという。学業と子育てを上手に両立しているミヤさんの姿を見て、勉強だけで悲鳴を上げている自分が恥ずかしくなった。通訳の準備のため、ギップさんとミヤさんは早めに蓼科フォーラムに向かい、残りのメンバーは森の中を散策しながら自由時間を楽しんだ。湿気を含んだ美味しい空気を吸いながら、緑の中から時々現われる小屋のような別荘を見つけるのが楽しかった。李さんは、専門の漢字を使って色んなダジャレを披露してくれて、私達は腹を抱えて笑った。

第38回 SGRA フォーラムでは、東アジアの7カ国の現状についての報告が行われた。自分の研究領域ではなかなか接することができない貴重な経験だった。パネルディスカッションでは、人間の幸福を数値化することが可能なのか、そして、先進国と途上国が同じ指標で幸福を論じることが妥当なのか、をめぐる激しい議論が行われた。理系の分野でも哲学的な議論が行われていることに少し驚き、自分の研究に置き換えて考えさせられた時間であった。

懇親会では、美味しい料理をいただきながら、フォーラムの際に話さなかった議論を続ける人々、八ヶ岳について説明を聞いている人々、みんなが楽しそうにしゃべっていた。特に私のツボだったのは、午後はお食事が禁じられているチャップンさんの代わりだと言いながら、何と20皿以上を食べ尽くしたイヴゲニさん！ 雨のため花火は中止になってしまったが、集合写真を撮ることでまたみんなが楽しく盛り上がる事ができた。

□ 食事の時間



□ 第38回 SGRA フォーラム



7月4日（日）

今日はバーベキューパーティの日。朝食を済ませた後、国の自慢料理を披露する人々は少し早めにロッジに向かった。大勢の人数が同時に料理を始めたので調理道具が足りなくなり、まな板や包丁を探し回ったり、材料が見つからず戸惑ったり、慌ただしい雰囲気の中で調理が始まった。しかし、少し時間が経ったら、包丁を譲ってあげたり、調味料を借りたり、貸したりしながら、お互いを気遣い合いながら楽しく料理を進めていたのである。

バーベキューパーティは、蘆さんの子どもの誕生日祝いから始まった。そして、料理を作った各国のシェフさんが料理について紹介してくれた。中国チームの水餃子、タイチームのグリーンカレー、インドネシアチームのサテ、そして、韓国チームのチャプチェとチヂミ、そして、焼き肉とキムチ盛りだくさん。台湾のお茶を入れた漢方スープのゆで卵、日本のおでん。しかも「おでん」と書いたのぼりまであって本格的だった。私は全部が美味しそうで、どれを先に食べるかを悩んでしまった。お腹いっぱいになるまで食べてしまい、最後の焼きそばはどうしても手が出なかった。そして、皆さんの声援のおかげで、韓国チームのチャプチェとチヂミはあっという間に完売！ イェ～イ！

みんなで片付けをしてから、最後にスイカ割りをした。私はスイカ割りを見るのが初めてだったので、何が起こるかドキドキしながら応援した。李さんと子どもが目隠しをして、棒を持って、チョコチョコ歩く姿はとてもかわいくて、Supredee先生の怪力のスイングでスイカを粉々にしたのと非常に対照的で面白かった。

このように忘れられない楽しい3日間はあっという間に過ぎてしまったのである。

（文責：尹 ジンヒ）

□ BBQ



□ スイカ割り



渥美奨学生の集い

講演：「日本と中国 相互誤解の構造」王 敏教授



2010年の「渥美奨学生の集い」は11月5日（金）、渥美財団ホールで開催されました。今回の「渥美奨学生の集い」では法政大学の王敏教授から「日本と中国 相互誤解の構造」という主題で貴重な講演をいただきました。

膨大なPPT資料を使ったご講演は、大変興味深い内容でした。王先生はまず、「漢字文化（圏）」ということを強調しました。中国、日本、そして韓国が共有している「漢字」とそこから発展した「漢字文化」でこの国々は結び付いているということです。事例としてあげられたのは日本と中国の外交関係のなかにあらわれた「以德為隣」、「友愛」という、いずれも漢文古典を根源としている語彙でした（近世、日本と韓国の外交関係のなかで韓国は「為政以德」という印章を使用しました。これも「論語」からの語彙でした）。しかし王先生はそういう一般的な共通性だけにとどまらず、差異の重要性を指摘しました。常に移動する文化は移動しながら必ず変化をともなうことです。ある文化が中国から日本に伝わりながら変化し、逆に日本からの文化も中国に流入するうちに変化を生じます。「友愛」という言葉の場合も中国と日本で同じ漢字を使って書いていますが、外交の場面で各自が考えている意味は少しずつがあったことがあげられました。その他、各国の狐のイメージ（九尾の狐）の違い、



日本の昔話・歌・歴史ドラマにおける「以心伝心」のイメージなど、面白い事例がたくさんありました。

「欧米のように異質な面が多いところの方が、日本・中国・韓国相互の関係よりも、文化差による衝撃を受ける可能性はむしろ低い」という王先生の指摘も重要だと思います。ねじれた関係を克服するには、異文化という視点でとらえた文化の確認と分析が重要だし、そのためには異なることを恐れずストレートに、差異を認め合ってコミュニケーションすることが大事、ということでした。

また、従来の政治と経済の視点に集中する傾向から離れて文化の角度から見ると、もっと相互理解やコミュニケーションが必要なのは言うまでもないが、過去の覇権主義のような方式、表現が日本や韓国や中国に与えた文化的影響が軽視されてはいけない。「漢字文化圏」という表現なら、影響を及ぼし合ってきた歴史も含まれ、東アジアの文化のDNAの絆を認識できるということでした。

そして最後に、近年の日本の活発な文化伝播努力（アニメに代表される）とその国際的役割があげられました。時間が限られていたのが残念な、豊富な内容のご講演でした。

講演後、会場からは「尖閣問題で日本側にも中国側にも問題があったと思うが、もっと広い視野でものごとを見ることが大事だと思う」という1997狸、李恩民桜美林大学教授のコメントと、「最近の日中間で不幸な事件があったが、ある政治家の会議ではホットラインの必要性が指摘された。民間の次元では、もちろん中国の文化は深く、また豊富であるが、より多くの中国人が日本に直接来て経験し交流することが重要だと思う」という渥美国際交流財団評議員の明石康氏のコメントがありました。歴史専攻者として東アジアの歴史的な関係を研究している私にとっても、とても大切な講演でありました。

引き続き7時半よりは親睦会が開かれ、美味しい中華料理を味わいながら、貴重な会話の時間を過ごしました。

(文責：金 キョンテ)



2011 新年会

渥美財団 2011 年新年会

2011年1月15日(土)11時から、渥美奨学生とラクーン会員、関係者ご家族および財団スタッフの50人以上が財団ホールに集まり、新年会が行われました。今年は年を越しても特に何もせずに家で過ごした私たちにとっては、お正月を感じる良い機会でした。渥美ファミリーに感謝します。



今回の新年会では、2010年度奨学生が出身国の名物料理を手作りしました。日本ではとても珍しい素材を使った料理もたくさん登場しました。例えば、インドネシアのミヤさんが作ったバナナの葉で巻いた焼き魚、ダルウィッシュさん(2009 狸)のシリア風お味噌汁など。百聞は一見に

しかず! このような珍しい料理は、その国に行かない限り一生口にすることができないかもしれません。そのほか、中国チームの定番水餃子、韓国、トルコ、日本等、多国籍の料理を、どれも美味しくいただき、お腹も幸せもいっぱいでした。

私たちも、朝8時に財団へ行き、フランスの一般的な家庭料理を作ってみました。まずはサーモン味キッシュとベーコン味キッシュの2種類を作りました。キッシュというのは、もともとフランスのアルザス・ロレーヌ地方の料理で、タルト生地の上に卵、生クリーム、野菜と肉などを加えてグリュイエールチーズなどをたっぷりの



せオープンで焼き上げるものです。もう一つはフランス風鶏肉炒めでした。日本では珍しい組み合わせなので、この味は皆様のお口に合うかどうか少し心配でしたが、皆様とても美味しいと言いながら召し上がってくださったので、うれしかったです。

食事の後、金範洙さん（2005 狸）の楽しい進行で、一年先輩から第一期の大先輩へ、そして最後がわれわれ新人の順番で参加者の自己紹介が行われた後、恒例となった理事長のお誕生日をお祝いしました。先輩ラクーンの前振煥さん（2001 狸）の手作りのケーキをいただきながら、参加者の各国の言語で理事長にバースデーソングを歌いました。

新年会の定番ビンゴゲームでは、豪華景品も用意していただきましたので、皆とても熱心に参加しました。当たる気満々の全先輩がゲームを盛り上げました。ビンゴに当たった人たちに一年中いいことがあるような気がしました。

最後に、事務局長の嶋津さんが、留学生はあまり知らない中締めの手拍子のルールを教えてくださいました。皆、日本の文化に興味津々で、時間を忘れるほど楽しみました。もちろん新年初の手締めは大成功でした。

いろんな国の料理を美味しくいただきながら、皆さんとのコミュニケーションができてとても楽しい新年会でした。

（文責：マティアス & 侯シハイ）



2010 年度研究報告会



2011年3月5日(土)は暦の上では「啓蟄(けいちつ)」。冬ごもりしていた虫たちが目を覚ます日だそうです。好天気にも恵まれて、雲一つない青空の下に膨らんだ桜の蕾が爽やかな風に揺れて微笑んでいました。このような素敵な日に、渥美国際交流奨学財団の2010年度研究報告会が、東京都文京区関口の渥美財団ホールで午後2時より開催されました。

報告会には、本年度・来年度の奨学生、ラクーン会会員、留学生支援団体などの来賓、財団の役員・スタッフを含め、約50名の方々が出席されました。会場の入り口に立派な七段飾りの雛人形が飾られており、会場の雰囲気をもより一層和やかにしてくれました。

研究報告会は、渥美伊都子理事長のご挨拶から始まりました。理事長はご自身の雛人形にまつわるエピソードを交えながら、日本の春の風物詩の代表である雛祭りについてご紹介くださいました。

続いて研究発表に入りました。理工系5名、文系7名計12名の奨学生は、15分以内で、子供にもわかるようにやさしく説明するというルールに従って、パワーポイントを駆使しながら、それぞれの博士論文の内容を報告しました。仏教学、文化財保存学、日本語日本文学、歴史学、材料工学、国語教育学、原子核工学、知能機能システム、政治学、中国学、先端医療開発学、ジェンダー学際研究といった広い分野にわたる多彩な研究テーマをめぐって、理工系の方は絵図や写真、録画などカラフルな資料を用いて、文系の方は詳細な用例を提示しながら、発表を行いました。どうしても専門用語が使われるので消化しきれない部分が残っていますが、奨学生たちの研究に対する熱い情熱が伝わってきて、会場は熱気に包まれていました。

研究発表の後、来賓の渡辺章悟先生(東洋大学)、三林浩二先生(東京医科歯科大学)、里達雄先生(東京工業大学)の御三方からコメントを賜りました。渡辺章悟先生はご自身のインド留学の経験を踏まえながら「学問には『向上門』と『向下門』があるが、前者より後者のほうが大事で、しっかりと足元を見つめながら向上してほしい」とおっしゃいました。三林浩二先生と里達雄先生は奨学生の研究の深さや視点の新鮮さに感銘を受けると同時に、渥美財団の留学生に対する多方面への支援、サポートに感謝と敬意を表したいと述べられました。先生方は口をそろえて、奨学生にこれからも様々な分野で活躍し、各分野で中心的な役割を果たしてほしいと語られました。

報告会終了後、同ホールで親睦会が開催され、新旧奨学生、財団の役員、来賓の皆様が歓談をしながら、交流を深めました。共通語は日本語ですが、時々中国語や韓国語、ロシア語、フランス語などが耳に入ってきました。ここは国境なしの世界大家族であることを改めて感じさせられました。

3月に入り、冬のひんやりとした空気がまだ残っていますが、陽射しは確実に少しずつ春らしくなっています。

す。「本年度の奨学生はこれで終わるのではなく、これからもどこへいっても連絡を取り合いましょう」との今西淳子常務理事のお言葉を胸に、奨学生たちはこれから希望と夢を乗せてタンポポの種のように旅立とうとしています。渥美財団は暖かい光に満ちた故郷となることでしょう。

(文責：李 軍)

□ 発表テーマ

- チャイトンディー・プラチャッポン 「Lokappadīpakasara (世間灯明精要) の研究」
 王 昕 「アルコール代謝のリアルタイム評価を目的とした呼気中エタノールの二次元可視化計測システム」
 尹 ジンヒ 「韓国の経済不況下における若者の自立の困難経験に関する家族社会学的研究」
 李 賢凡 「アルミニウム複合材料の研究」
 ミヤ・ドゥイ・ロスティカ 「インドネシアの国民形成期におけるカルティニの女子教育観とその政治的役割
 —日本の明治期における津田梅子との比較を中心として—」
 マギッド, イヴゲニ 「レスキュー・ロボット・ナビゲーション」
 キャアコプチャイ・スィラッサナン 「『だろろ』に関する日本語とタイ語の対照研究—『だろろ』と『khor』」
 盧 亮 「がん治療炭素六価イオン複合加速構造単空胴線形加速器に関する研究」
 金 キョンテ 「慶長の役(丁酉再乱)における加藤清正の朝鮮上陸と小西行長の『反間計』」
 李 軍 「漢字文化を生かした漢字、語彙指導法の開発—日中比較研究を軸に—」
 ヴィグル, マティアス 「近世日本における鍼灸医学の形成とその普及—東アジア及びヨーロッパの文化交流の一例として—」
 崔 禎恩 「高麗時代に製作された青銅文化財の金属組織学的研究」

□ 研究発表の 2010 奨学生の皆さん (上段左→右へ発表順)



□ 来賓挨拶



東洋大学
渡辺章悟教授



東京医科歯科大学
三林浩二教授



東京工業大学
里 達雄教授

□ 懇親会



□ 2010 年度奨学生



2010 年度渥美奨学生のエッセイ

チャイトンディー・プラチャッポン 「タイ仏教と日本仏教の相違」 -----	17
崔 禎恩 「恋しい日本」 -----	18
キャアコプチャイ・スィラッサナン 「変わってきた。そして変わらぬ温度」 -----	19
金 キョンテ 「日本での日々」 -----	20
李 賢凡 「日本留学の感想」 -----	21
李 軍 「車内の風景 ころの風景」 -----	21
慮 亮 「日本に様々の感動」 -----	22
マギッド, イヴゲニ 「私の地震体験記」 -----	23
ミヤ・ドゥイ・ロスティカ 「福島原発の事故とインドネシアの『原発』」 -----	25
ヴィグル, マティアス 「日本に居る私から見たフランスの報道と フランス政府の福島原発事故の危機管理」 -----	26
王 昕 「地震、津波、原発危機」 -----	28
尹 ジンヒ 「東北・関東大震災の中で私にできること」 -----	29

タイ仏教と日本仏教の相違

チャイトンディー プラチャッポン
Chaitongdi Phrachatpong
東洋大学 (仏教学)

私は、タイから来た留学僧です。日本に留学して、11年目を迎えました。学部の学生の時から、博士後期課程まで仏教学を専攻してきましたので、タイ仏教と日本仏教の相違について簡単に紹介したいと思います。

釈迦牟尼世尊が悟りを開き、人々を教化し、入滅した後、さらにその教えが僧団によって、世界の各地に広められました。中国、韓国、日本などに伝播した仏教は、「北伝仏教」あるいは「大乘仏教」と言われます。

一方、スリランカ、タイ、ラオス、ビルマに伝わった仏教は「南伝仏教」あるいは「上座部仏教」と呼ばれています。タイの仏教を「小乗仏教」と呼ぶ人が相当いますが、「小乗」とは「ヒーナヤーナ (hīnayāna)」という古代インド語を漢訳したものです。これは「小さく卑しい乗り物」という意味で、自分たちの考えが優れていると自負した大乘仏教徒の命名による賤称です。しかし、現在一般にタイ人はこの呼称にこだわりません。

宗派についてですが、日本仏教は、13宗56派があるのに対し、タイでは2宗派しかありません。両宗派に属する僧侶たちは、衣のまとい方などの少しの違いがありますが、出家者としての生活の面では、ほとんど同様です。

日本仏教ではほとんどの宗派とも江戸時代頃から住職の子弟が寺院を継ぎます。明治時代にはこの世俗の実態を見て僧侶の妻帯が認められるようになりました。タイの場合は、男子は20歳になると比較的短期間ではありますが、出家するという慣行は、習慣として人々に考えられています。出家の理由としては「両親や母親のために功德を積む」というものが圧倒的に多いです。

僧侶になる為には、頭を剃り、黄衣をまとい、「お酒を飲まない、結婚しない、女性に触れてはいけない等227にのぼる戒律」を守らなければなりません。僧侶は農業を含め、一切の生産活動、経済行為を禁じられているため、国家からの給付以外はすべて托鉢によって食を得、在家の人々からの喜捨により生活していくのです。また、在家の人々は僧侶に喜捨することで自分の功德を積み、将来幸せに暮らせると信じています。そのため喜捨する側が両手を

合わせ深く礼をして感謝の態度を示すのです。日本人の友人によると、40～50年前の日本ならば、僧侶が食物を得るために托鉢に出る光景がよく見られましたが、現在ではめったに見られないように感じられます。また、タイには日本のような檀家制度はありません。寺院は私有物ではなく、全て国の管轄下にあります。つまり、国有物であるということです。

さて、タイと日本の仏教学の学問的な面では、どのような違いがあるのか。タイでは、古代インド語であるパーリ語の経典のみ使用していますが、日本では、パーリ聖典のみならず漢訳聖典やサンスクリット経典などの様々な言語で書かれた文献を研究材料として仏教研究を深めて、多くの優れた研究成果を出しています。そのため、日本は学問的には世界一とも言われています。これは、私が日本に留学した理由でもあります。

このように、母国の仏教と日本仏教とではかなりの違いがあります。特に実践的な面では、日本仏教はまだ不十分な点がありますが、学問的な面では、日本の仏教学はタイの仏教学を遥かに超えていると実感しています。従って、帰国後、実践と知識を持つ僧侶として、日本で学んだことを生かし、タイの仏教学を向上させ、説法や著作活動などを通して人々を精神面からも支え、社会が平和になっていくためにも貢献したいと思います。そして、日本を含め各国の仏教が、お釈迦様の時代と同じように人々の光となるよう願ってやみません。



恋しい日本

チェ ジョンウン
崔 禎恩

東京藝術大学・博士（文化財保存学）
韓国国立民俗博物館研究員（在ソウル）

2005年、日本語で自己紹介もできなかった私が日本に来た。準備期間も短く、知り合いもいなかった日本は正直怖かった。看板を見ると目が回る、複雑な電車の路線を見ると胸が詰まる感じがした。コンビニに行くとお会計してくれる店員さんの話が長くて泣きそうだった。電車では駅員さんが何かをずっと話していたが、事故だったのか電車が入ってくると言ったのか分からなくて焦ったことも多かった。それから、6年が経った。今は、韓国にいても肩をぶつかると“すみませんー”と言ってしまふ。また、マクドナルド、イメージ、パソコンやキムチまで、外来語をカタカナで読んではしまうことも多い。6年という長いようで短い期間で何が私をこんなに日本色に染めてしまったのだろう。日本語学校の先生が授業中に、日本語が話せるように



草津温泉の喜美乃湯にて

なったら、日本の色々な場所を旅すると日本のもっとももっといい面をたくさん発見できると言っていた。その影響であろうか、日本人の友達ができるやいなや旅行に行った。そこで、日本の温泉に出会った。私は、すっかり温泉の魅力にはまってしまった。

日本で始めて行った温泉は北アルプスの南安曇地区にある温泉だった。友達の誘いで雪形を見に行った帰りに寄った所だった。登山口にある温泉で、バリア（囲い）のない露天風呂が大変印象的だった。初めての露天風呂でバリアのない場所はちょっと勇気が必要だったが、温泉に入ると涼しい山の風が吹いてすっかりはまってしまった。山住まいのアリや蝶々などもすぐ横を歩いたり飛んで来たりして、何時間もいられる気がした。

そこから、箱根温泉、熱海温泉、水上温泉、草津温泉、鳴子温泉、登別温泉など温泉を旅した。どこに行っても自分なりの温泉の楽しみ方は単純で、余り知られてない地元の小さな温泉に行くことである。大きくて有名な温泉宿に入るのも大変いいと思うが、地元の人しか入らない温泉に入るのも楽しい。一箇所でもいいので、そのような場所に入ると地元で馴染んだ気がしてとてもうれしい。草津温泉にもそのような温泉が多くて、喜美乃湯の場合、お店の裏に隠れて探すのが大変だった。さらに、内から掛ける鍵がなくて、困った。しかし、誰もいない熱い温泉に入ると鍵なんか忘れてしまふ。

温泉に負けないぐらい好きなのは日本の美味である。私は日本に来て、体重が約8kg増えた。一人暮らしに慣れてないせいもあるが日本のスイーツや食べ物のおいしさのせいもある。コンビニのスイーツにはまり、毎日のようにチーズケーキを食べた覚えがある。美食家ではないので、詳しくは分からないが、日本のスイーツには日本独特の繊細な味があると思う。甘すぎず、丁度いい加減が守られている。100年間続くカステラのように、伝統深い味はどこも真似できない味である。

日本人のこだわりが作り出した食べ物といえば、ラーメンもある。元々は中国の料理であるが、日本人が日本に合うラーメンに発展させ、韓国では日本食として定着している。6年前の韓国では、日本のラーメンは珍しく、まだ食べたことのない料理だった。韓国にもおいしい麺料理が多いが、韓国の麺とは違う味がある。豚骨、鶏、カツオなどで取ったダシを元に様々な味を加えてお店なりの味を作る、各々のお店のこだわりが

ラーメンの魅力だと感じた。お料理へのこだわりは、お寿司、天ぷら、おうどんなどの料理からも感じられることが多く、大好きな日本の美味である。

6年が経ち、もう帰国してしまった今から考えると、私は、始めは日本で学問を学ぶために、次は日本の美味を味わうために、三つ目は日本の温泉に入るために、最後は日本の大好きな人たちに出会えるために運命的に日本に来たと思う。日本は私の大好きな温泉、美味そして恩人たちのいるとても大切な場所である。これからは好きな日本を韓国の好きな皆に伝えていきたい。



抹茶シュークリーム

変わってきた。そして変わらぬ温度

キャアコブチャイ スイラッサナン
Kiatkobchai Siratsanan
学習院大学（日本語日文学）

タイトルを読むと、このエッセイが地球温暖化について語られるものだと思われる方がいらっしゃるのではないのでしょうか。実は、私が言っている「温度」とは、勝手ながら私にしか通用しない「温度」かもしれません。その「温度」は私の中にある日本のイメージによる温度です。

■前

私はキティちゃんを通じて日本という国をはじめて

知りました。子供の頃は日本というと可愛い物がいっぱいあるとしか記憶になかったのですが、いつか行ってみたいトップ5に入っていました。日本の社会を知り始めたのは大学の時でした。ドラマに映っていた日本人（特に、東京人）は歩くのが早くて真面目でよく働くという良い印象がありました。一方、忙しすぎて人のことに無関心で冷たい国民だというイメージも強かったのです。留学が決まった、その時は複雑な気持ちでした。小さい頃から憧れていた日本に留学できるという嬉しさと、冷たさに対する恐怖が混ざっていました。

■今

知っているつもりでいましたが、私は本当の日本を知りませんでした。日本人が冷たいというイメージはただの先入観でしかなかったです。確かに、私の国、タイは世話好きな人が多いので、それに比べれば日本人があまり人のことに関心を持たない冷たい人間だと思われるのは無理もない気がしますが、私はそうは思いません。といっても決して世話好きが悪いことだと思っているわけではありません。それも思いやりの一つの形だと思います。思いやりはいろんな形で表現できます。そっとしてあげるのも思いやりの一つの形なのではないでしょうか。自分がやってあげたいという気持ちを抑えてでも相手の気持ちを優先する優しさ、私はそれを日本人から学びました。私にとってはそれがほどよい温もりです。

■これから

このほどよい温もりは外から眺めるだけでは感じられませんでした。そして、熱すぎると沸騰してしまい、冷たすぎると冷めてしまうので、変わらぬほどよい温もりを保つには同じ温度で接することが大事だと、いろんな人と接しながら学びました。

日本での日々

キム
金 キョンテ
高麗大学（東京大学）（歴史学）

日本と韓国は違う国です。あたりまえな話ですが、たまにそれを忘れてしまいます。他国で生活するのは初めてだった私が、「ちょっと長い旅行」程度に思って生活を始めたところが、渡日初期の失敗だったかも知れません。

「お互いに違った所を認めない共同体化は望ましくない」と考えていた私としては恥ずかしいことでした。当然、小さい差異一つ一つが、大きく感じられてきました。銀行では口座を作ってくれない、自転車は買ったが、駐輪場がない（空きが出るまで1年半待ちなさい、と話す管理人おじさんの平然な顔に衝撃）。駐輪をすると1ヶ月の駐輪料が自転車価格を軽く超える（ネットで買った自転車は2,500円、駅前駐輪場は1日100円）。しかしそれが日本ですよ。1ヶ月くらい過ぎた



柴又帝釈天

らずいぶん慣れました！

さて、「生活」ですので、旅行に来たら滅多に行かないところを探していくのも、私には意味深い事でした。先に申し上げたように初めての外国生活なので、路上ののんびりした猫も新鮮に感じられるくらいでしたので。

本郷から東京ドームに行く途中、道に迷ってしまっ

て寄った「菊坂」。本郷はもともと文人の里で有名らしいのですが（例えば、夏目漱石の小説にも出た東京大学構内の三四郎池はひとりで弁当を食べたりする綺麗な場所ですが……寂しいですねー）、最近では5千円札の肖像となった樋口一葉ゆかりの場所ということで、人々の関心を集めています。彼女が住んでいた昔のままのような下宿、お金を借りた質屋、隠れている可愛い坂坂、古い銭湯。そして 樋口一葉を愛する女社長が運営するカフェのあんみつは美味でした。

私は現在、亀有という所に住んでいますが、近くに柴又があります。はい、「私、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯をつかい……」のその寅さんの柴又です。参道とお寺の風情に一目ぼれ、今は「男はつらいよ」シリーズにすっかりはまっています。一編一編が人間の喜怒哀楽。いつも笑いながら、泣きながら、鑑賞しています。時には柴又で買ってきた草団子やせんべいを食べながら……。

神田神保町の古書店巡りも楽しみのひとつです。ちょっとおかしいかもしれませんが、私は憂鬱になったら、書店に行きます。いろんな本を見るだけでいい気分になります。古本はまた違った味があります。また、きれいな古本もいいんですが、私は経てきた主人の痕跡が残っている本のほうが好きです。神保町の本屋はだいたい老舗で、敷居も高く、主人の愛想ない表情も少し怖いんですが（また、値段が結構高いのであまり買えないんですが）、その落ち着いた雰囲気、いつまでも変わらないそんな雰囲気が好きです。それを感じながら、充分見物したうえで、三省堂に行って本を買います。（笑）

この6ヶ月、私の日本は本当に美しいものでした。今、大きな自然災害で苦しんでいますが、すぐに、日本に美しい春が戻ると信じています。

この6ヶ月、勉強の面においても、人生の面においても、大きな転換点になりました。残った6ヶ月、これからどういう変化が待っているかまだ分かりませんが、きっと素晴らしいものではないかと考えています。期待しています。

日本留学の感想

イ ヒョンボム
李 賢凡東京工業大学・博士（材料工学）
東京工業大学ポスドク研究員

私は2010年東京工業大学理工学研究科材料工学専攻の博士学位を貰った李賢凡と申します。今から3年前、2008年度、韓国の全北大学で修士を終えてすぐ東京工業大学の博士課程に入学しました。その時、日本に来る飛行機の中でひらがなを勉強した事を思い出します。日本に住んでいる知り合いも無いし、日本語も出来ないし、しかも日本に来るのも初めてだったので、本当に不安でした。しかし、他の国より日本と韓国は相当近いし、日本語と韓国語の文法が同じなので短期間で日本語を話せるようになりました。特に、会話の問題以上に、研究室の皆さんが質問に対して優しく説明してくれたので、生活もどんどん良くなりました。私が今まで日本で会った皆様は全て優しい方でした。博士課程3年の間いろいろな国で発表もしましたが、優しさは日本が最高でした。私の研究発表に対しても、日本の国内会議の発表が一番緊張しました。その理由もやっぱり日本国内にいらっしゃる研究者たちが金属材料に関して他の国より高い関心を持っているからだと思います。この事から考えると、なぜ日本が世界最高の技術を持っているのかがはっきりわかります。材料を本当の気持ちで愛している研究者たちがいる限り、未来の日本の技術は明るいと思いました。私の指導教官となっていた里先生からもすごくいい感銘を受けました。人の大きさは体の大きさを評価するのではなく心の広さで評価するのです。心使いの力を博士3年間ずっと学びました。日本に留学したのは今思っても非常に良かったと思います。今までずっと見守ってくれた渥美財団の皆様といい思い出を残してくれた16期奨学生たちの皆様へ感謝を申し上げます。

車内の風景 こころの風景

リ ジュン
李 軍早稲田大学（国語教育学）
早稲田大学教育・総合科学学術院助手

私は小さいころから日本語が好きで、中学一年生の時から二十年近くも日本語を勉強してきた。日本に来た当時はまったく知らない国に来たのではなく、久々に故郷に里帰りしたといった懐かしさを覚えていた。それでも、びっくりしたことが多々あった。最初びっくりしたのは電車やバスが定刻どおりに来ること、電車の中で「これから先揺れますので、ご注意ください」というアナウンスが流れてくること、「駆け込み乗車」という言葉が存在していること……。

福岡に四年、東京に四年。この八年間、毎日とってもいいほど電車や地下鉄に乗っている私は、電車の中では様々な発見があって、日本人のこころの風景をこっそりと覗くことができた。

◇風景（一）「はなす」

上京したばかりの時、なぜ東京の人はみんな朝から電車の中で寝てしまうのかと不思議に思っていた。そのうちに東京のリズムが地方と全然違うということが分かってきて、変に思わなくなったが、熟睡した人とその隣の人の様子を観察するのが面白かった。眠った人の中には、いびきをかいたり口を開いたりした人もいれば、横に倒れそうで倒れない人もいて様々である。それに対して、その隣に座った人は避けて避けて嫌そうな表情で我慢する人もいれば、嫌がって立ち去っていく人もいる。しかし、どんなにひどい状況であっても、心の中でどんなに嫌がっていても、みんな決して口に出さないし、注意もしないでいる。

私は日中漢字文化の繋がりや大和言葉の特質を研究しているが、このような風景を見るたびに「はなす」という和語の意味合いを思い起こす。「話す」「離す」は異なる漢字が当てられているため、別の言葉として認識されている。しかし、「はなす」という和語の持つ「ものがある事物の中またはその事物の周辺から遠ざかっていく」という根源的な意味合いがそれぞれの言葉の

中に共通しており、日本語の国字である「咄（はなし）」も、「心事を口の外に出す」という意味合いに由来すると考えられる。日本人が物事に対してストレートに自分の意見を言わず、「～よいのではないのでしょうか」「私的には～と思いますけれど」といった曖昧な表現を好んでいるのは、おそらく、直接に「話」してしまったら、みんなから敬遠されてしまう、つまり「離」れてしまうことを恐れているのではないだろうか。

◇風景（二）雨のしづく

日本では、雨が降ったときに、みんな車中できちんと濡れた傘を束ねて持つようになっている。ある雨の日、一人の若い女性がたくさんの荷物を抱え込んで乗車してきて、私と隣に座っている中年の女性の前に立つとすぐに携帯を取り出していじり始めた。片手でたくさんの荷物を持っているせいか、自分の傘からゆっくりと雨水が落ちてくることに気づいていない様子であった。その傘の位置はちょうど私と隣の女性の間にあったので、電車の揺れ具合によって、雨水がどちらに落ちてくるか把握できない。私も隣の女性も必死に避けようとしていた。一粒一粒……雨に降られても別にかまわないのに、なぜこんなに気になるのであろうか。幸い、私たちの巧みな水滴回避術によってほとんどの雨水が地面に落ちて、被害はなかったが、電車を降りたときに肩も凝ったし、気持ち的にもすごく疲れた。これも「話」してはダメなのであろうか。

◇風景（三）ごみ実験

日本の電車はとても清潔で乗り心地がよい。たまにごみを捨てたりする不心得者もいるが、いつもきれいに保たれている。ある日、向かい側の座席に丸めた紙のごみが置かれていた。私が乗った時は空席が多かったが、徐々に込んできて、最後にそのごみのある座席だけが残っていた。結論から言うと、少し躊躇して去っていった人が八人、ごみを避けて座った人が二人、最後の人はそのごみを自分のポケットにしまって座っていた。何人もの乗客がその座席の前に現れたり去っていたりしていたが、ただ一人もごみを地面に捨てなかった。日本人は自分のやりたいことを我慢してまで、周りを配慮し、できるだけほかの人に迷惑をかけないようにしていることがよく分かった。

私が最初に日本語に魅了されたのは日本語の美しく

て優しい響きであった。だが、本格的に日本語を大好きになったのは日本語の魂に気付いた時だったかもしれない。「言霊」という日本語があるが、「言霊」は文字通り「ことば」に宿っている「たましい（魂）」のことである。美しい日本語は、それを受け入れる人の気持ちをよく考え、理解し、その心を癒し温める力を持っている。一方、不快な言葉を使うと、相手にその言葉の良くない魂が飛んでいくのではないかという配慮で、「しょうがない、我慢するか」「暗黙了解」という日本人ならではのルールがあるようである。どうしてはつきりと言わないの、ともどかしい時もあるが、これこそ日本、日本人、日本語の魅力かもしれない。こういう考え方に馴染んでくると、車内の風景も、ぽかぽかと地面の生き物たちを照らす春の日射しによって、みんなが暖かく優しい光に包まれているように見えてくる。

日本に様々の感動

る りょう
慮 亮

東京工業大学・博士（原子核工学）
理化学研究所外国人特別研究員

日本に来てあつと言う間に12年間に過ぎました。この間に日本語の勉強を始め、そして学部での学生生活、更に博士研究活動を行うと共に渥美国際交流奨学財団との歩みまで、様々なことに感動してきました。

YMCA 日本語学校で日本語を勉強し始めた時、先生方の優しさに感動しました。友達もいない、言葉も通じない初めての異国生活にどきどきしましたが、温かく応援してくれ、いつも丁寧に教えてくださったのは学校の先生です。私たちが一日も早く日本の生活に慣れるために、先生たちは日本語のみならず社会ルールや、生活習慣なども色々教えてくださいました。私たちの成長と引き換えに、先生たちはさぞ疲れが溜まったことでしょう。

日本語学校を卒業して福岡教育大学に入学した後、専攻の先生方に優しく指導された事にも感動しました。

特に苦手な化学薬品名を何度も丁寧に教えてくださった化学の先生方、留学生生活を心配してくださった先生方、また教育実習に行った時、学習指導案を丁寧にチェックしてくれた先生方、そして卒業研究の時、共に徹夜で実験してくれた指導教官の大後先生に深く感謝しています。先生方のご指導のおかげで、私は大きく成長できました。

また、東京工業大学に入って以来、研究活動はもちろん生活のことも心配して頂いた指導教官の服部先生にも感謝しています。私が研究上の問題に直面した際には、ご多忙にも関わらず多くの時間を割いて相談に乗って頂きました。服部先生から学んだ研究に対する姿勢、情熱や執念は、今後の私の研究者人生において大きな糧になると確信しており、心より服部先生に感動し深く感謝致します。

そして昨年4月から、生活サポートのみならず国際コミュニケーションを含む諸般の活動に携わらせて頂いた渥美国際交流奨学財団に感動しました。渥美国際交流奨学財団は異国文化の交流はもちろん、SGRAフォーラムの開催によりエネルギー問題や宗教問題などの普通の学生生活では触れられない話題を取り込んで、私の視野を大きく広げてくれました。渥美国際交流奨学財団との一年間の歩みは、社会知識の大きな収穫があった一年で、これからの社会活動には大きく役立つと思い、感謝と感動の気持ちで一杯です。

最も感動したのは日本の社会システムです。この前、長女の育児で知り合った日本人の友達に、食事に招待されました。友達の家に居た時、友達の子供がたくさんのおもちゃを持ってきて長女に「どうぞ、どうぞ」と言いながら譲ってくれました。私は子供の口から「どうぞ」を聞いたとたん、日本の教育システムにショックを受けて感動しました。中国の場合は、子供が「パパ、ママ」が話せると、すぐ数字の一からを教え、礼儀などは教えません。その時子供から教わった「どうぞ」は単なる言葉ではなく、普通の社会教育の違いも教えてくれました。

これからも、きっと多くの日本人や沢山の事に感動することと思いい、これからの人生を楽しく期待しています。

私の地震体験記

マギッド イヴゲニ
Magid Evgeni

筑波大学（知能機能システム）

私は茨城県つくば市に住んでいます。2011年3月11日（金）は、朝から千葉県習志野市の幕張ゼミハウスに、チューターとして、日本人の後輩が英語で発表するのを手伝うアルバイトに行きました。昼食を終えて、先生、3人の留学生チューター、20人の日本人学生と一緒に、ブルガリア人の有名な先生の発表を聞いた時、午後2時46分にマグニチュード9.0の地震が起きました。最初はあまり強くない地震だと思い、教室の2重のドアと窓を開けて、発表を続けようと思いました。しかし、だんだん地震が強くなったので、皆で外に飛び出しました。その時には、窓がひとつ壊れただけだったので、まだ何も心配することはありませんでした。

地震の後、参加者は外に集まっていました。ゼミハウスのスタッフからベンチ、椅子、ブランケット、お茶とスナックをもらって、みんな嬉しそうでした。しかし、小さな余震がずっと続き、ニュースも見られないし、なかなか携帯電話が通じず、つくば市にいる彼女のターニャと連絡もできず、心配でした。2時間ぐらい待った後、フランス人のチューターと一緒に2人でつくば市まで歩いて帰ると決めました。地図がないので、コンパスに頼って、午後5時ごろ、習志野市からつくば市の方向をめざして出発しました。

歩くにつれて、周りの状況から、広範囲にわたる地震被害が分かるようになりました。なぜかという、停電していたり、地下鉄が止まっていたり、ひどい交通渋滞だったり、家に歩いて帰る人がたくさんいたり、コンビニのお弁当と飲み物が売り切れてしまっていたり、携帯電話が繋がらなかつたりしていたからです。そして、船橋のガスリンスタンドで、仙台の津波のニュースをテレビで見た時には、本当に怖かったです。

午後11時ごろになって、やっと友達とターニャに電話ができました。友達に頼んでFacebookで私の家族に

連絡してもらいました。地震のとき、ターニャは筑波大学の宿舎の4階で勉強していました。地震の後、宿舎の事務所のスタッフに誘導されて、他の留学生と一緒に安全な避難所に移りました。

つくばの方向に歩きながら、警察官やいろいろな人に道を聞きました。そして、コンビニで会った日本人が車でつくばまで送ってくれました。

午前3時ごろ、つくば市に着きました。避難所に行ってターニャと会いましたが、私のアパートに残っている猫ちゃんのタシャのことがとても心配だったので、二人で一緒にアパートに行くことにしました。部屋に入ってショックを受けました。壁と天井にはたくさんのヒビ、キッチンでは冷蔵庫が動いていて、冷蔵庫上の電子レンジは落ちて、食器が割れて、部屋の中は、整理棚や、服や、本などがめちゃくちゃになっていました。

そして、あちこちに猫ちゃんの血の跡があったのです。そこらじゅう探して、名前を呼んでも反応がないので、もうダメだと思いました。10分後、とても低い声で猫ちゃんが「ニャ〜〜」と答えました。猫ちゃんは後足にけがをしていましたが無事でした。

少し落ち着いてから、大切な書類、ノートパソコン、ブランケット、水と食料をかばんに詰めて、ターニャと猫ちゃんと一緒に避難所に行きました。留学生が100人ぐらい集まって、2日間一緒に住みました。避難所の水道が止まってしまいましたので、学生宿舎の洗面所を使うために、1時間に1回シャトルバスが出ていました。学生宿舎では、無線のインターネットを使えたので、ニュースを調べたり、skypeで家族と話したりすることができました。

3月12日(土)の朝、食べる物を買うためにスーパーに行ったのですが、たくさんの店が閉まっていて、開いているところも、ペットボトルの水はなく、お弁当類もあまりありませんでした。避難所では日本人のスタッフのおかげで、留学生は毎日一人に飲料水1リットルとおにぎり2つをもらいました。避難所にいたときに留学生と話しましたが、皆、地震が起きた後、日本人に手伝ってもらったそうで、日本人に対して感謝の気持ちを持っていました。

このように、習志野市を出発した時には「小さなア

ドベンチャー」と思っていたのですが、途中から「ホラー映画」になってしまいました。

3月13日(日)の夜、留学生は避難所から学生宿舎とアパートに帰りました。私が住んでいたアパートは、建物自体の被害がひどくて住みにくかったし、結婚式のスタッフのアルバイトは6月まで中止で収入がなくなってしまうし、ロシアにいる両親が福島第一原発のことをとても心配したので、6月までロシアの実家に帰ることにしました。その晩、猫ちゃんを獣医に連れて行って治療を受けました。そして、猫を海外に連れていく許可の書類を作ってもらいました。猫ちゃんとはもう10年以上一緒に住んでいるので家族の一員です。その書類がもらえなかったら、猫ちゃんなしで一人でロシアに帰ることはなかったと思います。

3月14日(月)、航空券を買った後、再入国許可をもらうために東京の入国管理局に行きました。またショックでした。普段、入国管理局は午前9時から午後4時まで開いているのですが、帰国する留学生の数がものすごく多かったので、入国管理局は留学生のために遅くまで仕事を続けました。私の許可書は午後8時ごろにもらえましたが、まだ千人以上の留学生が待っていました。彼らは何時まで業務を続けていたのでしょうか。このような地震災害がロシアとか他の国でおこったら、職員は外国人のお客様のことなどよく考えてくれることはなく、朝まで仕事を続ける人はないと思いました。

3月16日の飛行機に遅れないように、3月15日にターニャと猫ちゃんと一緒にタクシーで成田空港へ行きました。バスのチケットは3月18日まで売り切れと聞いたからです。3月15日の昼から3月16日の夜の出発まで、ずっと成田空港のロビーで待っていました。空港のスタッフからブランケットと飲み水をもらい、いろいろお世話になりました。

成田にいた時、この地震災害についていろいろなことを考えました。他の国でこのような災害が起きたら、その国の市民の態度と行動はどのようになるかと自問しました。アメリカでハリケーンや地震で大きな被害が出ると、被災地では必ず窃盗や略奪という醜い犯罪行為が起きます。キルギス、チュニジア、エジプトの

革命のときにも、略奪が多かったのです。

日本人はとても特別な国民で、祖父母の時代のソビエト社会主義共和国連邦の人々と共通点がたくさんあると思います。自然災害がおこっても法律を守り、大変なときにはお互いによく助けあって、心はとても優しいけれども魂が強いです。お世話していただいた留学生は皆、本当に心からありがたい気持ちを抱いたと思います。

私は、このようにすばらしい民族である日本人と一緒に住みたいと希望しています。世界中の人々が、日本が早く復旧するようにお祈りしています。福島第一原発事故について心配している家族は、留学と就職活動のために日本へ帰ることを反対していますが、私は5月中旬日本に帰ることを決めました。

頑張れ、日本！一緒に頑張りましょう！

福島原発の事故とインドネシアの「原発」

ミヤ ドウイ ロスティカ
Mya Dwi Rostika
国士舘大学（政治学）

2011年3月11日、東北大地震が発生しました。その直後、数多くのメールがインドネシアにいる家族や友達から届きました。日本で発生した地震、大津波、そしてとりわけ福島の原子力発電所の事故が大々的にインドネシアのマスメディアに取り上げられたこともあって、「地震と津波の被害はどうだった」、「放射性物質は大丈夫なの」、「しばらくインドネシアに帰った方がいいよ」という内容のメールがたくさん届きました。

実はインドネシアも、地震と津波の被害にあっているのです。2004年にスマトラでの大津波と2006年にジョグジャカルタで発生した地震を経験しています。その災害から立ち直るのに5年以上の年月がかかっています。そのこともあって日本で発生した地震と津波

は、マスメディアに大きく取り上げられたのでしょうか。津波の被害だけでなく、津波に伴う福島の原発事故が、インドネシアの人々に衝撃を与えています。インドネシアには原子力発電所はないにもかかわらず、福島の原発事故についてなぜインドネシア人がそこまで心配しているのでしょうか。それは、インドネシアでも原子力発電所の建設計画が進んでいるからです。福島原発の事故により、インドネシア国民の原子力発電所建設計画に対する反対の声は、いっそう多くなりました。たくさんの原子力の専門家がいて原子力発電所に対する技術において優れている日本においてさえも、このような事故が発生し、事故の悪化を食い止めるのに悪戦苦闘しているからです。

インドネシアにおける原子力発電所の建設計画は、1972年に始まりました。当時のスハルト政権は、「原発の開発のための準備委員会」を設立し、1975年にインドネシア政府が開催した学会においてジャワ島の14地域が「原発の開発」の地として提案されました。海外の研究者の協力を得て調査研究が行われ、14ヶ所のうち5ヶ所は原子力発電所建設が可能であるということが明確となりました。その5ヶ所の中に、北部海岸ジェパラがあります。ジェパラというのは、私にとっては因縁のある地域で、私が研究しているカルティニ(R.A.Kartini)というインドネシアで初めての女子学校を設立した女性の出身地なのです。そのためにジェパラには調査研究のために度々訪れているのですが、その時に、この「原子力発電所の開発計画」についての市民の反応などを間近で見てきました。地元の人たちは、基本的には反対の立場です。放射能に対する恐怖があるからです。

特に1979年3月に起きたアメリカのスリーマイル島原子力発電所の事故や、1986年4月に旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所の事故は、インドネシア国民、特に原子力発電所の建設予定地のジェパラ市民の反対運動の大きな原因となりました。1998年スハルト政権が終わり、この計画は延期になりました。新政権になってまたこの計画を進めようとしたのですが、政治的自由を得たインドネシア国民の反対運動はさらに盛んになりました。ジェパラ市役所によれば「中央政府の決定待ち」というのが現状です。

反対運動があるにもかかわらずインドネシア政府が原子力発電所の建設にこだわっているのはなぜなのでしょう。一つには、電力需要の問題があります。インドネシアのエネルギーの需要は毎年3%から4%増加しています。エネルギーの需要は、2025年には2000年の2倍になるといわれています。そういうエネルギー需要を満たすために、原子力発電所を計画しているというのが、政府の公式見解です。

しかし、原子力発電所の建設が、それだけの理由でなされているようには思えません。二つ目の理由は、インドネシアが新しい国であるということからきていると思います。インドネシアは多民族国家であり、国民統合に苦しんでいます。政府は様々なシンボルや手段を使い国民を統合させようとしています。たとえばスカルノ政権においては、インドネシア語を母国語とし、バティックをインドネシアの国民の衣装として決めました。スハルト政権においては、経済の発展を受けて様々な国家のシンボルになるミュージアムなどの公共建造物などを作ってきました。このようなシンボルとなるような公共建造物は、国民に「我々意識」をもたらすものなのです。原子力発電所も、発展途上国であるインドネシアが一步でも先進国に近づくための手段でありシンボルなのです。電子力発電所は、単なる電力需要をもたらす手段というだけでなく、国民に誇りと愛国心を芽生えさせるものなのです。

私の主人は「原発の開発計画と市民の参加」というテーマで論文を書こうとしていて、東京電力の柏崎原子力発電所に現地調査のため何度も行っていました。そこで、「インドネシアでも原子力発電所を造ることが可能ですか」という質問をぶつけたのに対して、担当者の方の回答は、可能かどうかという直接的なものではなく、「事故を起こさないために重要な役割を担うのは、その原子力発電所を管理する人材」だというものでした。

インドネシアでは原子力科学についての研究は国立大学で行われているのですが、専門家の数はまだ極端に少ないのです。専門家のほとんどは日本の大学に留学してインドネシアに戻ってきた人たちです。原子力発電所が建設され稼働し始めたときに、その少ない人数で果たして十分に安全管理ができるのか不安です。

優秀な原子力の専門家・技術者がこれだけ多い日本においてさえも、福島原発事故を終わらせることができなくて悩んでいます。原子力の技術者や専門家がまだとても少ないインドネシアにおいて、このような事故が起きた場合にどう対応できるのか、想像するだけで怖くなります。現在のインドネシアの政府が、そういう事故が起きたときに、ちゃんと国民の安全を守り、ちゃんと対応できるかどうか疑問なのです。

インドネシアには原発はまだ必要とされていないし、現在のインドネシアにとっては、専門家の人数や力量から言ってもまだ早いどころか、はっきり言って無理だと思われます。

日本に居る私から見たフランスの報道と フランス政府の福島原発事故の危機管理

ヴィグル マティアス
Vigouroux Mathias

二松学舎大学（中国学）

北里研究所東洋医学総合研究所医学史研究所
無給研究員、二松学舎大学非常勤助手

3月11日（金）午後2時46分、私は人生で初めてマグニチュード9.0を記録する地震を体験しました。その時、私は家で勉強していましたが、激しく揺れたのでビルが崩れ落ちないように祈りながら、机の下に避難しました。幸いにも棚から本が落ちた以外には何も被害はなく、地震に負けない優れた日本の建築技術に本当に感心しました。その後、今回の地震はどうも普通ではないと思いながら、すぐに妻に連絡してみましたが、電話がつながらなかったのでもとても不安でした。1時間半後、職場の周りの公園に避難していた彼女の無事を確認しようやく安心できました。また、日本の大震災は必ずすぐにフランスの朝のニュースに出ると思ったので、両親に連絡して安心させました。両親と話しながら、テレビで東北地方の町が津波で水没する恐ろしい映像を見ました。

金曜日、思った通り、フランスの全てのニュース番組は日本の大震災をとりあげました。地震と津波の映像の他には、被災して一番苦しんでいる東北地方の日本人より、当時東京にいたフランス人の留学生、日本の会社で働いているフランス人などを、生中継でインタビューしました。土曜日と日曜日、福島第一原発1号機で水素爆発が発生した後、福島原発の危機は一日中、フランスのテレビのブレイキング・ニュースになりました。しかし、フランスの報道は、現地の状況を詳しく知らないようで、フランスの原子力の専門家は「チェルノブイリ原子力発電所のような事故ではない」と最初から説明したにもかかわらず、福島原発の危機についてチェルノブイリと類似的な、あるいは正しくない情報ばかりを流しました。

来年フランスでは大統領選挙がありますから、フランスのエコロジー党は政治的な目的で、日本の原発の事故を利用して、パリなど大都市部で急速に原発抗議運動をしているようにも見えました。その頃日本では何千人もの人々が死亡して、行方不明の人も1万人以上あって、避難していた人は食料や水などの必需品がなかったということを知っていたのに、フランスのメディアあるいはフランスの政党の一部は、被災者を無視して福島原発の危機とそのフランスにおける影響の方に重点を置いていたことは、情けない行動だと思いました。また、Facebookにも炉心が爆発する可能性あり、現地の作業員はあと2週間の命しかない、東京人を安心させるために日本政府が本当のことを隠しているというような噂が走りはじめました。このように「カタストロフ」の方に重点を置いた報道の結果、フランスの家族と友達から「日本政府からの情報を信じちゃダメ」「早く逃げろ」というような忠告ばかりが一日に何回も来ました。

一方、日曜日にフランス大使館が「放射線物質を含んだ風が東京に飛んできている可能性が高いので、直ちにフランスに帰国するか東京から離れた方がいい」という勧告を出した後、関東地方にいるフランス人は皆パニックになってしまいました。私の友達のうち何人かも、帰国を願う人のために政府が用意した特別便に乗ってフランスに帰りました。その頃、いつも会見で「不明」「確認中」を繰り返す東京電力の担当者から詳しい情報を得られないにもかかわらず、日本のメディア、日本の政府、また周りの日本人の友達を見ても、

皆この危機に対して慌てないで静かでした。このような情報の混乱と相違を見た私たちはどうすればいいか、全く迷いました。フランスか妻の母国の中国に帰ろうと思いましたが、一旦日本から離れると、私たちの将来にもかなり影響があるので、結局簡単に逃げられませんでした。とりあえず、フランス大使館の勧告に従って、水曜日に東京から離れて名古屋に行きました。

そこで、海外のメディアを無視して、もう一度冷静に原子力の専門家の分析をはじめ福島原発についての科学的な根拠に基づく情報を集めていろいろ読みました。理系ではない私は苦労しましたが、読めば読むほど東京で放射能率が通常より少し高くても全く体に影響がないし、日本政府は事実を隠していないことが分かりました。しかも読んだ報告の中には、イギリス政府の科学顧問長の報告のように、科学的な根拠に基づかないフランス政府の避難勧告を批判した声もありましたので、自分の考えを改めて土曜日に東京に戻りました。この原稿を書いている時点では、その危機がまだ終わっていませんし、放射性物質が付いた野菜などのニュースも出たので、これを食べ続けると将来体に影響があるかどうかという不安感は今でも続いています。が、今後は慌てて行動するより、情報源をよく選んで冷静に考えることにしました。

では、なぜフランス政府は福島原発の危機にこのように対応したのでしょうか。実は、チェルノブイリ原子力発電所事故が起きた時、放射能物質を含んだ風はフランスの国境には届かないと言って放射能の本当のレベルをはっきり言わなかったなど、当時のフランス政府が厳しく批判されたことがありました。また、科学的な根拠に基づいていませんが、チェルノブイリの放射能によってフランスの甲状腺癌の患者数が増えたというフランス国民の疑いが今でもあります。ですから、チェルノブイリの事故以来、フランスの政治家とフランス国民の間では原子力発電は論争的となる厄介な問題で、福島原発のような危機があると、フランスの政府はいつも最悪のシナリオを考えて念のため万全の対策を取るのです。しかも、今回、フランスのメディアが、福島原発から放射線物質を含む風がヨーロッパにも来るようなことを言ってフランス社会に不安感を広めたので、フランス政府がいち早く万全の対策を取らなかったら、フランス国民が許さなかったと思

ます。

この危機管理を見た私は、フランスのメディアの態度は不相当で本当に情けないと思います。なぜなら、フランスのメディアは、本当に苦しんでいる東北地方の日本人より、放射線を浴びる可能性があるかもしれないフランス人ばかりに注意を引きつけました。今でも、行方不明者の数が段々上がって、厳しい寒さで亡くなっていく被災者も増えて、まだちゃんと水や食料が届かない避難所もあるのに、リビアの危機によって福島原発の問題以外、日本の大震災の現場はフランスのメディアから姿を消しました。それにもかかわらず、インターネットでは日本人に同情を示す多くのフランス人が見られます。フランスでも東北地方の日本人のためさまざまな募金活動が始まりました。私も、日本が大震災から早く復興するように祈ります。

地震、津波、原発危機

—2011年3月11日

おう しん
王 昕

東京医科歯科大学・博士（先端医療開発学）
東京都立産業技術研究センター研究員

2011年3月11日（金曜日）に日本東北沖を震源とするM9クラスの地震が発生した。阪神淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震の約1000倍のエネルギーを解放した。

地震発生当時、私は東京都千代田区にある研究室にいた。揺れが段々強くなり、私たちは屋外に避難した。研究所と研究室では物的な被害はあったが、人的な被害はなかった。地震の直後、電車が運休となったため、徒歩で帰宅する人が多くいた。私が所属する研究室の8名が帰宅せず、一晩を研究室で過ごし、土曜日の朝に全員が帰路につき、かなり時間がかかった人もいるが帰宅できた。

地震による津波の被害をニュースで見た。東北関東の被災地の様子、余震が報道されると同時に、福島原子力発電所のことで不安をかき立てられた。福島第

一原子力発電所は世界的にみても規模の大きい原子力発電所の一つである。福島第一の最大の問題は、三つの原子炉と二つの使用済み燃料貯蔵プールという「五つの異常事態」が、状況が不明のまま、同時に進行していることだ。深刻だが、今の段階で悪化を止めれば大量放出は避けられる。地震から1週間がたった現在、政府も危機感を深め、さまざまな放水活動が展開されるようになった。これまでは事業者である東京電力にまかせる形が強かったが、やっと社会の力を集める形がとられつつある。

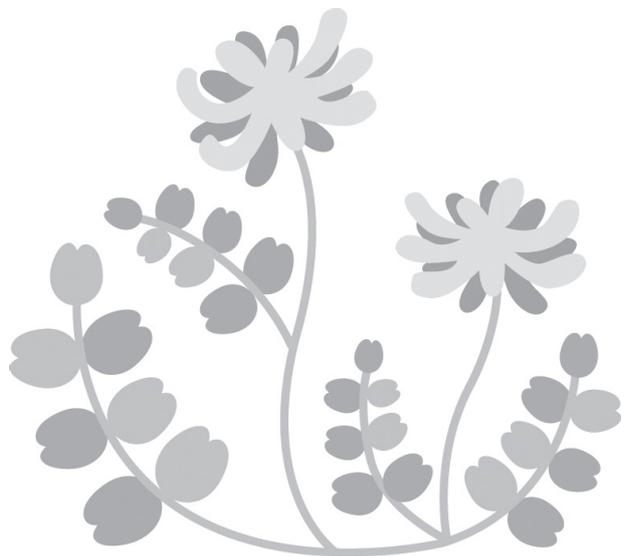
日本は今回の地震、津波、原発危機の災害から立ち直ることに時間が掛かりそうだと私は思っている。これからの日本、そしてアジア、世界はどうなるのだろうか？

まず、日本国内総生産量（GDP）が短期内に災害によって大幅に減少し、世界三番目に大きい経済体と最も大きい債務国である日本の経済の低迷は、必ず世界の経済に影響を与える。

次に、放射性物質の影響による福島第一原発周辺の大気、土壌、水への汚染は長年にわたって影響するだろう。

最後に、原発危機の影響で世界各国は原子エネルギーを一時停止して計画することも検討し、原子力発電所の建設を中止することで、短期間に必ず大きな世界的エネルギー資源の供給不足になるだろう。これから、エネルギー危機は恐らく世界的にみても、最も急迫したテーマの一つになる。

今日の日に来る事をそれぞれに精一杯やり抜こう、一刻も早い復興を願うばかりだ。



東北・関東大震災の中で私にできること

ユン
尹 ジンヒ

お茶の水女子大学（ジェンダー学際研究）

2011年3月11日に日本の東北・関東地方に発生した巨大地震は、人間の想像を絶するものであった。私は家に帰ろうとして地下鉄に乗る直前に地震に遭遇した。しかし、地震の影響で電車の運行が全て停止したため、家には徒歩で帰らざるを得なかった。数時間を歩きながら自然の前にある人間の無力さを痛感した。

被災地から遠く離れた場所で自分ができていることに悩む中、次々と浮かび上がる様々な問題は、研究者としての自分の役目を再び考えさせるきっかけになった。膨大な人数の被災者に対する救援活動や被災地域の復興について考えるべきなのは言うまでもない。しかし、メディアやインターネットにあふれる不確実な情報などによって、被災していない人々の中にも様々な混乱が起きているのである。放射能について正しい知識を持っていないまま被爆への恐怖だけが膨らむことで、人々は水や生活用品を買い溜めたり、放射能の危険から離れているにもかかわらず、一部地域の野菜を拒否するなど極端な行動に繋がるケースもあるだろう。

このように二次的に発生する混乱や様々な問題に対して、研究者として正しい情報をより多くの人に発信することで少しでも役に立つことが出来るのではないだろうか。特に、この悲劇的な事件による反省が短期的なものに終わらないように、各研究分野で絶えず努力すべきだろう。

逆説的だが、若者の自立を研究している私は、こうした震災の中の日本社会にある種の希望を見いだすことができると考えている。現在の若者は、経済的な問題や家族関係、そして、閉塞的な社会状況の中でいかに生きるのかということに答えを出せずにいる。しかし、この危機的な状況の中で多くの人達が「いかに生きる」のかではなく、「ただ生きる」ということ、それ自体の価値を改めて認識し、そのために多くの人々が力を合わせ、支え合おうとしているのである。それゆえ、この震災は自立できない若者にとっても自身の生を問いつけ直す機会になるだろう。なぜなら、人はお互いに支

え合うことによって、その生きる意味を見いだすことが出来るのであり、そのことは、個人として埋没してしまっている若者たちの生を、人との絆の中に位置づけ直す契機になるかもしれないからだ。

東北・関東大震災の中で私にできることは、そのように苦しんでいる人達を支えたいと思う若者たちの真摯な気持ちを少しでも実りあるものにできるよう手助けをすることで、若者の自立を実現できるような社会の構築に寄与することである。



2010 年度渥美奨学生の自己紹介

- 鄭 淳一「古代日韓関係を取り持った民衆レベルの交流を現代に生かす」 ---- 31
- ホー ヴァン ゴック「スピリットの国への留学」 ---- 32
- 姜 文熙「今の私、そしてこれからの私」 ---- 33
- 金 銀恵「世界都市東京の研究から未来へ」 ---- 34
- 金 崇培「日韓関係と私」 ---- 35
- 李 孝庭「私が日本に留学したきっかけ」 ---- 36
- 李 彦銘「日中関係研究の出発点」 ---- 37
- 娜荷芽「きらめきの彼方へ」 ---- 38
- 朴 准儀「駄馬の人、進化の人」 ---- 39
- 彭 浩「日本史研究の道へ」 ---- 40
- 朴 文英「わたしの日本留学」 ---- 41
- 謝 惠貞「東アジアの国際交流の第一線に立つ」 ---- 42

古代日韓関係を取り持った民衆レベルの交流を現代に生かす

ジョン スニール
鄭 淳一

出身国：韓国

在籍大学：早稲田大学大学院文学研究科 アジア地域文化学専攻

博士論文テーマ：平安初期の国際交流と新羅海賊



私の研究テーマは、平安時代初期における国際交流が持つ特質を新羅・新羅人との関連性のなかで究明することである。当時の日韓関係を振り返ることで、現在の日韓関係をさらに深く理解できるようになるのではないかと考えるわけである。現在、政治レベルでは様々な問題を抱えている日本と韓国であるが、映画・音楽などの文化を介在した市民レベルでの交流が活発になっているのは知られている通りである。平安時代初期も新羅と日本とは、表向きは反目し合っていたが、交易などを通じた民衆レベルの交流は現在と同様に活発に行われていたのである。私が研究テーマを決める際にも、日韓の民衆レベルの交流の歴史をひもとけば、現在の日韓関係のさらなる改善に役立つのではないかとこの考えが一つのモチーフになった。

中学時代から将来は歴史を勉強したいと思っていた私は、高校卒業後、高麗大学の歴史教育科に入学した。最初は韓国の近現代史が主な関心分野であったが、早稲田大学で留学していた経験を持つ金鉉球先生（韓国での指導教官）に出会ったことをきっかけに、日本古代史に深い関心を持つようになった。当時は、日本史の基礎知識が全然なかったので、「韓国で一般的に言われているように、古代日本が文化的にそれほど低い段階にあったとは言いがたい。それなりに優れた文化を持っていたと言える側面もある」という金先生のお話が衝撃的であった。今まで教わってきた日本の姿とは別な姿が分かり、実際に日本はどのような歴史や文化を持っていたのか学びたいと思った。高校までは「古代日本の政治・文化の水準はさほど高くない」「文化はほとんど朝鮮半島から流れていった」と教わり、また私自身もそう思い込んだ。高麗大学の金先生に学んだ「客観的な視点で歴史を見る」という態度が、それまでの認識を大きく変えることとなったのである。日韓関係の新たな側面を知り、自分自身の観点でもっと研究をしようと決意。そのまま高麗大

学大学院の史学科へと進学し、さらに日韓の歴史についての考察を深めていった。研究を進めるうちに「日本古代史を研究するなら、やはり日本でやりたい」と思うようになり、日本への留学を志した。韓国においての日本史研究は、1980年代～90年代を経つつ飛躍的に発展したが、各種の史料・史跡への接近性、参考文献の充実度、研究者のネットワークなどを考慮すれば、依然として劣悪な条件であったのである。

留学先として早稲田大学を選んだきっかけは、高麗大学の学部課程在籍中に開かれた日中韓国際シンポジウム（2004年11月）で、同大学文学学術院の新川登亀男先生（現在の指導教官）に出会ったことであった。歴史的な伝統や開放的な学問的風土という側面でも、早稲田大学はたくさんのメリットを持っていると感じ、2008年4月に大学院文学研究科の新川研究室に入ったわけである。現在、私が所属する「アジア地域文化学コース」の環境は、国家間の交流史を研究するうえで、非常に有益で効果的である。日本史専門の先生だけではなく、中国史、東洋哲学、美術史、考古学を専門とする先生方が集団指導体制をとっており、文字通り「アジア」という大きな枠組みのなかで研究することができるからである。

早稲田で研究を進めて3年くらい経ったが、大学からもらった「早稲田大学アジア特別奨学金」のおかげで非常に安定的な生活ができ、比較的いい研究成果を出すこともできたと思う。今年4月からは渥美財団のご支援のもとで1年を過ごすことになっている。「恩返し」とどまらず、「恩送り」もできる一人になるため、黙々と歩んでいきたい。

スピリットの国への留学

ホー ヴァン ゴック
HO Van Ngoc

出身国：ベトナム

在籍大学：千葉大学大学院工学研究科 建築都市科学専攻

博士論文テーマ：都市空間に適応する駅空間の評価構造と空間ボリュームに関する研究



子供の頃、私にとって、日本のイメージは父が毎日乗っている HONDA のバイクによるものだけだった。そのバイクは家族にとって最も貴重なものだったので、それが日本の製品だと知った時、衝撃を受けた。その後、勉強すればするほど、私の日本のイメージはそのバイクだけではなくっていった。それは同じアジアの国であるだけでなく、過去に残酷な戦争を経験し、精神的、物質的な損失を乗り越えて、アメリカと並ぶほどに科学技術の研究開発が進んでいることである。日本は母国ベトナムと同じアジアの国だが、発展のレベルが断然違うのはなぜか？ 過去に残酷な戦争を経験した日本では、ひどく破壊された街が、どのようにして今のような綺麗な街になったのか。資源が少なく地震が多発しているが、どのようにして経済の先進国になれたのか。なぜ日本は現代的資本主義社会の中で、伝統的価値観や礼儀正しさが守られるのか。そのような疑問の答えを探したいと思い、私はハノイ建築大学のデザイン建築学科を卒業してから日本留学を決めた。

将来にベトナムの発展の力になりたいという夢を抱いている私は、来日してから、勉学に熱心に取り込んできた。例え辛くても、目標に向かって精一杯努力していきたいと考えている。お陰で、困難を乗り越えて今のように成長してきた。私は明るい性格で、ベトナム人の友達だけではなく、日本人と世界各国から来た留学生など、大勢の友達がいる。困ったときに何度も皆さんに励まされ、助けてもらった。私にとって友達とは計り知れない大切な存在である。

現在、私は「都市空間に適応する駅空間の評価構造と空間ボリュームに関する研究」について博士研究課題として取り組んでいる。この研究は、鉄道システムが比較的発展している日本の都市部の駅舎を研究対象として、駅舎と都市空間の関係性や評価構造を探り、都市の公共空間として、また顔としての駅空間の適性・規模を数量

的に明らかにする。その研究成果を応用することにより、ベトナムの鉄道システムの建築計画や都市計画などに効率的かつ具体的に役立つ知見を得ることを目的とし、建築設計・都市計画の点から現代の社会・経済の問題点の解決策を見出したいと思う。

今年の4月から私は在日8年目に入った。これまでの7年以上を経て、私は日本の生活で様々なことを体験し、日本の先生から社会や文化や技術など多方面の知識を教えて頂いたが、日本国に意味のある国際交流としての貢献がなかなか出来ていない。そのような気持ちを私が指導教授に話すと「留学生の君たちが日本とベトナムとのいい架け橋になったら、それは日本国にとって大変貴重な貢献じゃないですか？」ということを教えられた。その意味が理解でき、私は博士号を取得したらベトナムに帰り、博士論文を作成することで体得できた知識を活かし、日本新幹線方式を採用する南北高速鉄道の計画をはじめ、インフラ整備の推進に貢献したいと考えている。温暖化や悲惨な交通事故の急増など、発展途上にあるベトナムの社会的問題を、建築・都市環境づくりによって、解決したいと思う。また、日本で体験したことや学んだことをベトナムの若い世代に伝え、人材育成の力になりたい。言語能力や異文化理解などを活かし、ベトナムと世界各国との国際交流活動に積極的に貢献し、架け橋になることが私たち留学生の義務だと意識している。

今の私、そしてこれからの私

カン ムンヒ
姜 文熙

出身国：韓国

在籍大学：日本社会事業大学大学院社会福祉研究科 社会福祉学専攻

博士論文テーマ：認知症介護専門職の職業能力評価ツール開発に関する研究



私が留学し本格的に福祉・介護を勉強しようと決心したのは、父の病気をきっかけに高齢者の福祉・介護問題が他人事ではなく自らの事であることに気づいたからである。特に留学先として日本を選んだ理由は、日本の福祉・介護は、まずアジア諸国の中でリーダー的存在としてとても魅力的であり、また韓国にとって非常に活用しやすい見本となっていると思ったからである。日本は韓国と類似性の高い社会・文化的背景を持っている。そして、アジアのどの国より先に超高齢化社会に突入し、介護保険・年金等の保障制度を始め、様々な対策を模索・実施しながら発展している。しかし、年金問題や介護保険など日本の超高齢化社会に備えた対策は必ずしも良い成果を出しているとは言い切れず、様々な試行錯誤を経験しながら発展している状況である。以上のことを踏まえて、試行錯誤や課題を含めての日本の経験、そして発展過程を学ぶことこそが韓国の介護の発展に最も役立つ重要なものだと考え、日本を自分の最適な留学先として選んだ。

現在、私は日本の福祉・介護分野で歴史と伝統を誇る日本社会事業大学大学院に進学し、認知症介護における専門性を持つ人材の育成・確保に関する研究活動をしている。介護における現象や政策の成果を科学的に追求する研究姿勢や方法を学んでいる。具体的には修士論文のテーマに引き続き、博士論文として介護施設で働く認知症介護職の実践能力向上やキャリア形成の動機付けに役立つ「認知症介護専門職の自己能力評価尺度開発」に関する研究に取り組んでいる。今年度は三井住友海上福祉財団の研究助成を受け、その基礎研究であるインタビュー調査を実施し、その成果を介護福祉学会で発表した。そして自分の博士論文に関わる研究以外にも、昨年度から独立法人福祉医療機構の助成を受けて行われている「認知症高齢者の家族と医療の連携促進事業」にも事務局のスタッフとして参加させていただき、認知症高齢

者の適切な薬物療法のための医療・介護職と家族介護者間の情報交流ツール開発に関する研究を行い、その成果を認知症ケア学会などで発表している。このような研究活動と同時に、介護施設や認知症介護研究・研修機関でスタッフとして関わりながら、認知症介護およびその人材育成に関する実践を積み重ねていただいている。

このような日本での学びを終えた後は、韓国の自分の出身校に戻り、介護を学問として成立させるための研究活動を続けていく事を希望している。その第一歩として、博士課程での研究成果を踏まえた上で、まだ言語化されていない認知症介護技術を整理する作業をしたい。同時に、大学教育のみならず、介護現場の現任者教育にも力を入れて、実践の中で気づきを大切にする介護人材育成に尽力していきたい。更に自分の外国語能力を活かして、日本・韓国・中国、東北アジアの介護福祉および認知症介護の発展のため努めていきたい。自分が日本で学んだことや気付いたことなど韓国と中国に伝えたり、日本・韓国・中国同士の研究成果を含む情報交換などに、自分の日本語、中国語を活かすことを望んでいる。

世界都市東京の研究から未来へ

キム ウンヘ
金 銀恵



出身国：韓国

在籍大学：ソウル大学 / 東京大学社会科学研究所 都市社会学専攻

博士論文テーマ：世界都市東京と臨海副都心に関する研究：世界化する景観の生産と消費

日本研究を始めた理由

私が修士課程だった時代は、韓国で日本文化がまだ開放されていなかったもので、日本映画を一番早く見られる場所は、釜山映画祭でした。90年代半ばの韓国の都市では、都市発展を模索する多様なイベントやお祭りなどが始動し、その過程で日本の都市政策や事例がよく紹介されました。この釜山映画祭が日本「福岡アジアウィーク」をモデルにしたことが、私の日本映画への興味が、日本の都市研究に転換していく切っ掛けになりました。

2001年に4ヶ月間、日本国際交流基金・関西国際センターで、世界から集まった大学院生と日本語を勉強しました。修士論文のための資料収集や関連機関への訪問など貴重な経験は、視野を広げる契機になりました。帰国してから「釜山・全州国際映画祭」と都市発展の関係について研究した修士論文に、日本の都市発展の事例を付録として入れました。修士課程を卒業して以降、放送関係機関や映画団体などの仕事では、メディア産業だけではなく、都市開発の領域でも日本の大きな影響力が感じられました。

現在の研究現況

博士課程の研究領域は、修士論文のテーマを拡張し、都市発展を目指す文化戦略へと進めました。社会学、日本研究、そして都市・文化研究についての授業や勉強会などに参加しながら研究し続けました。そして、博士課程修了後、2007年10月から11ヶ月間、日韓文化交流基金・招聘フェロシップとして一橋大学大学院・社会学研究科で研究を続けました。都市研究ゼミナールや関連機関の訪問、そして見学や参与観察などを通じて、理論的・実践的にも成長できる期間でした。

まず、日本都市での経験を個別な事例だけではなく、より巨視的観点から「産業リストラクチャリング」の世界的過程の中での東京の構造転換過程を「世界都市論」

にまとめました。又、「生産と再生産の空間としての都市」とは、生産活動と関連する特定の技術的な組合が、その都市での支配的な社会的関係や消費パターン、労働過程などと照応します。そして、社会的・制度的に結合されるシステムを作ることこそ、都市政治が発生する時点であると学びました。

この一年間は、得られた二つの理論的な拡張を、一つの研究テーマとしてまとめる一年間でした。このような理論的な研究関心と、今までの活動と経験を活かせる博士論文テーマとして、「臨海副都心の再開発過程」を決めました。臨海副都心が生産される政策過程に焦点を与えた政治経済学的な理論的成果や政策的分析などの先行研究を忠実にふまえ、メディアや観光などを通じて消費されるメカニズムがいかにか再現されるのか、その文化的過程をみせる研究が必要な時点だと思いました。

博士号取得後の進路希望

2008年12月に東京で開かれた「国際社会学会都市・地域の発展の社会学会議 (ISA-RC21)」で、このテーマについて発表しました。同じレベルの世界都市であるロンドン、ニューヨークの研究者をはじめ、ヨーロッパのポルトガルや東南アジアなどの研究者らまで、発表について質問と関心を示しました。世界都市東京、臨海副都心の約30年間の軌跡を辿り続けて、未来の都市開発への示唆も与える論文になるように努力したいと思います。博士号取得後には、他の文化圏へのPost-doc過程で研究しながら、この論文を効果的に活用できる多様な方法（英語論文やebook出版など）を模索する一方、都市再開発への政策提案できる実践的研究者になりたいと思います。

日韓関係と私

キム スウンベ
金 崇培

出身国：韓国

在籍大学：延世大学／慶應義塾大学大学院法学部政治学科 国際政治学専攻

博士論文テーマ：サンフランシスコ平和体制の求心力と持続性—日韓関係を中心に



在日韓国人4世として日本で生まれ育った私はおそらく自然に日韓関係に興味を持った人間の一人であると思います。日本で生を受け、日本での教育課程において大学卒業までの二十数年間を振り返れば、日本の文化や習慣、生活様式そして学問的影響を強く受けました。

大学では法律を専攻していました。これは法治国家で生きていくうえで、社会に存在している規範というものを法を通して考える必要があるためでした。特にゼミでは憲法を専攻し、国家の組織や統治の基本原則を学ぶことができました。ですが、その憲法の成立過程や当時の国際状況などを学んでいく過程で、国際政治学に興味を抱くようになりました。また、私自身が在日韓国人であるという現実が、国際関係学の中で特に日韓関係という方向性に進んだ大きな要因の一つであります。在日韓国人として日本社会で生きていくためには、ある程度、韓国社会に対する理解が必要だとも思いました。

多くの方がご承知のように日本と韓国は地政学的に一番近い国でありながら、相互の認識は難しいものがありました。過去2000年という広範囲における時代の中で両国は公式的、非公式的交流を行ってきました。しかし、20世紀初頭に起きた両国の葛藤問題は依然として現在にも残っています。これらの問題に対して一國史観的な考え方よりも二國史観的に物事をみる必要があるのではないかという考えは以前から持っていました。その様な考えのもと、まずは韓国へ語学留学し、のちに自分の専攻である政治学、日韓関係を学ぼうと考えました。言語を学ぶことが一番の目的ではなく、それをツールとして韓国文献や資料を自分の目で直接確認することが学問をするうえで重要なことでもありました。現在は韓国において韓国の国内政治を直接感じながら、日韓関係を学んでいます。ですが、韓国の国際政治学または外交史など、やはり日本という存在を抜きにしては成立しません。過去に対する歴史の評価は常に葛藤と反目がありますが、

それでも韓国は日本との関係性を無視することはできません。

私は韓国国籍でありながら、韓国人と同様な権利と義務が存在せず、同時に日本人と同様な権利がありません。しかしながらこれらが常に否定的なものとして私に影響を与えたわけでもありません。むしろこのような位置にいる人間だからこそ、よく考え、学ばなければいけないという信念と、そしてできることならば自分が吸収したことを伝え教えていきたいという願望が生じました。ある問題に対して、なぜそのようなことになったのか、原因、背景を把握し、そして自分の考えによって、国家間関係が協力的であり発展的になる方向へと答えを探さなくてはならないと思っています。

博士取得後の進路として今現在は日本に帰国することを念頭に置いています。可能であるならば国際政治学、地域研究に関する研究職に携わりたいと思っています。日韓関係、そして韓国政治を学んだものとして、自分自身のため、そして微力ながらも日本社会へ還元することができれば、それが現在の私の希望であります。

私が日本に留学したきっかけ

イ ヒョジョン
李 孝庭

出身国：韓国

在籍大学：国際基督教大学大学院比較文化研究科 比較文化専攻

博士論文テーマ：19 世紀末における日朝相互認識—来日朝鮮使節団の記録を中心に—



私は現在国際基督教大学大学院の比較文化研究科の博士課程 4 年生です。博士論文では、19 世紀末における日韓交流について（特に朝鮮使節団の漢文使行録の分析を通じて）研究を行っています。日本での留学生活は、今年で 6 年目です。勿論、最初から日本に興味を持ったわけではありません。韓国の出身大学（延世大学）に日本学の専攻もなかったし、韓国の学界雰囲気というのも西欧中心だったので、日本という国に対して深く考える機会はなかったのが事実です。正直、大学院に進んで行くとしても、日本への留学は一度も考えたことはありませんでした。

しかし、大学 4 年生の時に大学間の交流プログラムで日本の東京外国語大学を訪問する機会がありました。いつも反日的な民族感情による悪い噂ばかりを聞き、日本についていいイメージなんか一つもなかったのですが、初めて経験した日本は想像よりもいい所でした。社会・環境的な要因もありましたが、それより外国人の私が道に迷うことが心配で、目的地まで送ってくれた街のお婆さんの優しさ、言葉が通じなくても、心をこめて一生懸命 body language で話そうとした日本人の友だちの思いやりは、日本に対する私の考えを変え、もっと日本を知りたいという気持ちにさせました。たった 1 ヶ月の日本体験が私の人生を変えたのです。そして、その時まで続いてきた両国の誤解とその原因自体にも興味を持ち、また、その現状を自分の力で少しずつ解きたいと思い始め、「日韓交流と相互認識」というテーマで日本留学を決めました。

私は博士取得後にはポスドクコース (post doctoral course) を申し込み、欧米で 1、2 年の研究活動をした後、韓国に帰って大学レベルの教育機関で講義・研究などの活動を行うつもりです。私が研究する分野はアジア学に属していますが、「外から見るアジア学」という面では、より客観的な分析が可能かもしれないし、また、多様な

方法論から対象研究に接することができると思いますので、欧米の留学は将来の研究に大きく役に立つと思います。また、世界に散在されている関連資料を発掘し、以降の研究に利用したいのです。その後は前述したとおり、帰国し、日本をはじめとする諸外国で行ってきた研究活動と学んできた学問・知識が後学に繋がるように努力するつもりです。

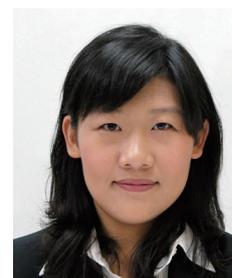
日中関係研究の出発点

リ イェンミン
李 彦銘

出身国：中国

在籍大学：慶應義塾大学大学院法学研究科 政治学専攻

博士論文テーマ：1970年代以降日中関係における経済界の立場と役割
—対外政策の国内基礎とその形成



私は1995年に天津外国語学校の日本語科に入学し、それをきっかけに以降6年間日本語を勉強し続けた。私が厳しい受験競争を経て入学した天津外国語学校は特別な歴史を持つ学校だった。1964年に当時の周恩来総理と陳毅外交部長の指示の下、中国の外交事業を推進するために外国語が堪能な人材を育てるという目的で、全国で7つの外国語学校が設立された。その一つが私の母校であった。このような背景があることを知って、私の日本留学の夢と外交事業への関心は入学してから益々強くなった。今振り返ると、それが現在に至る私の出発点でもあった。

2001年に私は中国全国普通高等学校入学試験で、天津市文科第1位という成績を修め、北京大学に入学した。日本留学への願望と外交事業への関心を踏まえて考慮した末に、国際関係学院の国際政治専攻に入学した。国際関係学院は交換留学の機会が比較的多く、またそれまでに習得した日本語を勉強や仕事に活かすことができると考えたからであった。

2004年の4月によく念願がかない、交換留学生として1年間新潟大学法学部で勉強することができた。これが私にとって初めての「日本体験」となった。だが、ちょうどその年から日中関係がどん底に陥りはじめ、アジアカップをめぐる騒動の影響や、日本側の過剰な報道を肌で感じた。この体験はかねてから外交事業に関わる仕事に就き、実務で日中関係を促進したいと思っていた私にとって、心を大きく揺さぶる出来事となった。現状に左右されやすい実務に携わるのではなく、より深くかつ客観的に認識したいと考え始め、学問的な研究のほうで自分の関心を満たし、また自分の理解を社会に対し強く発信できると思うようになった。日中関係を研究テーマとして大学院へ進学することを決め、そしてもう一度留学しようと決心した。

北京大学を卒業する直前、幸運なことに日本の岡崎嘉平太国際奨学財団から留学希望者の募集があった。その

選考に合格し、さらに慶應義塾大学の選考を通過して、2006年に再び来日した。国分良成教授の指導のもとで、『経済界の立場と役割—日中国交正常化への道』をテーマに修士論文を完成させた。慶應義塾という優れた教育環境に恵まれて、卒業する時にはすっかり研究の世界に引き込まれていた私は、指導教授の支持を得て2008年に博士課程に進学した。このとき私は、修士論文のテーマを更に深めた博士論文を書き上げるとともに、研究者・教育者として生きる道を決心した。

学位取得後私は中国の大学に戻って教職に就き、以下の三つの役割わりを果たしたいと考えている。第一に研究者として、日本で習得した理解と研究方法を生かし、中国における日中関係の研究を少しでも改善したい。また日中関係・東アジア研究という地域研究の色彩が強い領域を国際関係論と融合させることを試み、学際的な研究を進め、日中関係の事例を取りいれながら、更なる理論構築を目指したい。

第二に教育者として、専門的な知識を教えるだけでなく、学生の「自律的思考」能力を養うことが重要だと考えている。今変革期にある中国においてこのことを伝えることはなおさら必要であるとも思う。

第三に社会におけるコミュニケーターとして、語学力とコミュニケーション能力を活かし、日中の間だけにとどまらず多様な分野での意見交換・意思疎通の促進に力を注ぎたい。合同プロジェクトの設立などを通じて日中の相互理解と交流を深めることにも助力できればと思う。

この三つのことは将来の課題と努力の目標であり、また私が大学の教職に就きたいという将来の計画を立てた理由でもある。

きらめきの彼方へ

ナヒヤ
娜荷芽

出身国：中国（内モンゴル）

在学大学：東京大学大学院総合文化研究科 地域文化専攻

博士論文テーマ：内モンゴルにおける「興蒙」志向と1930～40年代の近代教育



私は多民族・多文化地域である中国の内モンゴル自治区で、モンゴル語と中国語のバイリンガルとして育ちました。私が通っていた地元の中学校の外国語の科目が日本語でしたので、中国で修士課程を修了するまで私は日本語を習得してきました。そのため、中学校時代、姉妹校だった金沢市の中学生とペンフレンドになり、手紙を交わしていました。日本からの手紙は、イラストも多く、面白いお話もたくさん盛り込まれ、私にいつも新鮮な刺激を与えてくださったので、その手紙を私は今も保存しています。また、父は研究の関係で、1980年代より日本人の研究者と交流を重ねてきました。それにより、私は、日本は、経済と科学が発達しているだけでなく、アジア諸国の古い文献資料も多く所蔵し、アジアの歴史や文化の研究がたいへん優れていることを知りました。

私が日本への留学を決めたのは、日本語を学び、日本との交流をめざしていたこと以外に、もう一つの重要な目的がありました。それは私がそれまでに修士課程で進めていた研究でさらに成果を収め、日本で博士学位を取得するためでした。

20世紀初頭に、日本との関係が深かった内モンゴルでは、日本人教師を招聘したことにより近代教育の幕が開かれました。こうした近現代世界における文化的関係にたいへん関心を持っていた私は日本で歴史学を専攻し、教育近代化過程を中心に研究を進めてきました。この研究には、日本、中国、モンゴルの歴史と文化がバックグラウンドになります。そして、日本に留学し、視野を広げることによって、私はこれまでになかった「失敗」と「喜び」を経験してきました。一つの論文を発表するために書いた十数部にものぼる下書き原稿を見るたびに、失敗とは限りのない階段のように思われます。また、自分の研究成果をまとめた論文を学術雑誌に投稿し、それが採用された時、暖かな無限の喜びを、胸いっぱい感じました。

これまで、中国及びその周辺地域を研究領域とする研究会の幹事、国際シンポジウムの通訳などの経験を介して、数多くの方と交流ができました。もし日本に留学していなければ、東アジアの近現代史および日本、モンゴル、中国の関係に対する理解は一面的なものになっていたと思われます。

博士号取得後は、留学生活でおさめた成果をもとに、大学や研究機関で研究活動を続けたいと考えています。また、現在は大学の非常勤講師を務めているため、若者に自分が得た知識と学ぶことの大切さを教えることの重要性を再認識しました。さらに、将来は専門領域に限った活動のみならず、講演や新聞記事等によって、日本留学で得た知見を一般社会に発信してゆきたい、そして光の彼方へ向かって歩んで行きたい！

駄馬の人、進化の人

パク ジュンイ
朴 准儀



出身国：韓国

在籍大学：ボストン大学／東京大学社会科学研究所 国際政治経済専攻

博士論文テーマ：北東アジアの阻害されてきた法制化とその根源：

金融危機以降の地域金融協力における日本の政治経済ダイナミクス

はじめに

私はアメリカのボストン大学政治学大学院研究科の博士課程4年目の韓国からの留学生で、朴准儀と申します。現在、東京大学の社会科学研究所と日本国財務省財務総合政策研究所の客員研究員として現地研究を行っています。博士論文の研究テーマは、東アジアの地域経済統合に関する政治経済ダイナミクスで、主に地域貿易、金融、そして投資の三つの分野の繋がりを研究しています。時代としては、1997～98年のアジア金融危機以後から2008～10年のグローバル金融危機の時期までの地域経済の統合に関する東アジアの国々の政策と動向を分析しています。

専門分野の関連の履歴（経験と研究）

私は国際政治学を専攻し、国際と地域政治経済、安保、制度、そして法制に関する仕事と研究を通じ、国際政治経済の研究者としての道を目指してきました。1982年、韓国のソウルで生まれ、北米とヨーロッパ、そしてアジアの国々で暮らし、経験と研究を重ねて来ました。韓国の政府官僚であった父の仕事で1991～93年にはアメリカのロサンゼルスに行き、英語とフランス語を習い始め、帰国し大学入学後2002年にはスイスのジュネーブとフランスで語学研修を行いました。国際的なジュネーブでの経験の影響で国際機構への進路を決め、2005年夏、大学院に進学後修士課程を並行しながら、国連のジュネーブ事務局で経済論文プログラムに参加し、続いて2005～06年には韓国政府の支援でニューヨークの国連本部事務局下の安全保障理事会制裁委員会でインターンとして働き、2007年に国連経済制裁の効率性関連の修士論文を高麗大学政治外交学大学院研究科に提出しました。ヨーロッパの地域主義に関する勉強や国連での経験により、国際世界での地域ブロックと国家の役割に興味を持ち、地域政治経済と国家の経済利益に関する研究を続けることにしました。大学在学中の2002年

から中国語を、そして大学院在学中の2005年から日本語を勉強したことを生かし、研究中心をアジア地域研究に移し、2006～07年には高麗大学に設置されているアジア・太平洋安全協力委員会で研究員として働き、2007年に韓国のフルブライト奨学生として選ばれ、アメリカで博士コースワークを終了してから講義と研究を行いました。日本での研究を決めた理由は各国の政治と経済の精密な分析の為に現地研究の必要性を感じたからです。来年は中国の北京大学や世界政治経済研究所で現地研究を続けることになっています。博士号取得後には、まずアメリカで博士後課程で博士論文の出版作業をする予定です。出版後は教授職を取り、講義と研究を行いながら学者として活躍したいと思います。日本、中国、韓国等の東アジア地域の研究を続ける中で、機会があれば定期的に短期現地研究を行い、変化して行くアジア地域の政治経済を分析したいです。

終わりに

東京で暮らしを始めた2010年8月の以下の日記が、私の研究と人生の方向への気持ちを表しています。

東京にくるまえ、お母さんから、“あなたも随分駄馬 がついているね。”といわれた。※

いいえ、そうでもない。

どこかでずっとずっと暮らしたいけれど、この世界中は変化して行く。その変化についていく為に、私は頑張っているだけ。

もしも、地球が回り続けなかったとしたら、私は今、ここにいる理由がなくなるかも知れない。

でも、地球は今も回転していて、いつ止まるのか分からない。

そのときに書いた日記には、タイトルとして‘駄馬の人’と書いてありましたが、今日はそのタイトルを‘進化の人’と修正し、最後の部分にこの文章を付けてみます。

その回転に適応して進化するのが私が望む私の姿。

※駄馬(煞) がついている”とは、韓国語の表現で“流浪の星回りにつかれる”という意味。一つの場所にいられず、あちこちを回る状態を表す。

日本史研究の道へ

ほう こう
彭 浩

出身国：中国

在籍大学：東京大学大学院人文社会系研究科 日本文化研究専攻

博士論文テーマ：近世日清通商関係の研究



彭浩と申します。孔子の故郷としてよく知られている古都曲阜に生まれ育ち、そのためか、幼いころからずっと歴史に興味を持っております。大学時代、歴史学部に入り、歴史研究者を目指す道を歩み始めました。そして、比較的身近な中国史や近現代史よりも、未知の部分が多く持っている外国史、そして前近代史に関心を持っています。また、偶然の機会ともいえるのが、学部3年、卒業論文のテーマを考える時、テレビの映画チャンネルで、黒沢明監督の特集として、映画「影武者」と「乱」が連続に放送されたことです。戦国武士が戦場で鉄砲を使っていたシーンと、織田信長が赤ワインを飲んでいたシーンを見てから、前近代の日本へのイメージが大きく変わりました。それをきっかけに、「西洋要素と織田信長の統一事業」というタイトルの卒業論文を書き、その後大学院に入っても、前近代日本史の研究を続けました。

専門が日本史なので、日本の史料を収集し、日本語の史料を解読する技能を身につける必要があります。しかし、中国にはこうした勉強のできる環境がないので、日本留学を決心しました。中国ですでに修士号を取得したため、大学院の入学を申請する時、最初は直接博士課程に入りたいと思いましたが、くずし字で書かれた近世の文書を見て呆然として、修士課程をやり直すことにしました。そして日本留学中、単なる日本史の知識と研究の技能だけでなく、研究室の先生と先輩から、史料を忠実に解釈する態度と、先行研究をまとめたうえで研究の位置付けを明らかにするという研究の規範も学んでいます。こうした態度と研究の規範が、功利主義が盛んになっている現在の中国の学术界で、最も欠けているものだと痛感し、これらの日本で学んだことを、いつか中国の学術進歩とつなげることができればいいと考えています。

こうした考えに基づいて、博士号取得後の計画を立てました。すなわち、日本で学んだことを中国に持ち帰り、

中国の史学研究のレベルを高め、さらに学術国際交流を推進することを主な目標とします。具体的には、まず、出身の復旦大学のような、歴史研究レベルの比較的高い大学または研究機関で、教師または研究員の職位に就き、日本史の研究を続け、一人前の歴史研究者になります。日本史の講義を行いながら、現地の日本史研究の資源（史料・書籍・学術雑誌など）を集め、同じ考え方を持つ学者とともに研究グループを作り、定期的に研究会を開き、学術雑誌を創刊します。そして、史学研究の重要性を社会へ訴え、史学に対する国民の関心を高める一方、政府・企業財団などに財政的支援を求め、中国で最も優れた日本史学研究室を創設します。さらにこれを拠点とし、優秀な学生を日本の大学に送ることと、日本人の学者を中国に招聘することなどを通じて、中国の日本史研究レベルを高めます。同時に、史料のデータベースを作り、日本の研究機関と協力し、史料の共同使用と共同研究を行います。最後に、日中間のみならず、世界各国の研究機関との学術的交流を深め、日本史研究の国際化を進めます。いま、「任重くして道遠し」という言葉を励みとし、志を叶える重要な一歩として博士論文の完成に努力しています。

わたしの日本留学

ばく ぶんえい
朴 文英

出身国：中国

在籍大学：東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科 脳神経病態学専攻

博士論文テーマ：中枢神経系への siRNA デリバリー



私は中国の朝鮮族で朴文英と申します。現在は東京医科歯科大学大学院博士課程の3年生です。

2006年にハルビン医科大学を卒業し、よりよい研究環境の中で研究を行うために日本に参りました。ハルビンは「氷城」と呼ばれ、冬になるとすごくきれいな都市です。

中国で、脳科学は前世紀から今世紀にかけて各領域で大きく進歩し、臨床でもCT、MRI、PETを始めとする診断学を中心に長足の進歩がみられています。しかしながら、さまざまな精神・神経疾患の克服とその予防や治療という面ではまだまだ不十分なのが現状です。医学部の時、臨床研修で、筋萎縮性側索硬化症になった患者さんが治療できない現実を知っているながら病気に苦しんでいる様子を直接見て、治療の不十分な現状をしみじみ感じました。その時、治療法がなくて死亡を待たざるを得ないこのような患者さんたちを守らなければならないという医者としての責任感が生まれ、留学して研究を行いたいという思いが生まれました。その時、周囲には日本に留学して戻ってきた医者たちが多く、日本の基礎研究及び臨床研究に関する情報をいろいろ得られるようになり、興味を持ち、ぜひ日本に留学したいと思いました。世界をリードしている日本で研究に携わり、最先端の技術を学び、研究、教育、臨床の経験を積み、若手医師や研究者を指導できる実力を身に付け、今後は人々と力を合わせて筋萎縮性側索硬化症のような神経難病の治療法を開発したいと思いました。

現在は中枢神経系への siRNA デリバリーについて研究を行っております。神経難病の遺伝子治療につながる研究です。

自分の性格をひと言で言うと、競争心が強くて好奇心が旺盛なのが特徴です。

昨日来たばかりのように思われますが、日本に来てあっという間にもう4年経ちました。日本の美しさや人々

の優しさにはいつも感動させられます。私の日本留學生活の始まりは大阪からでした。そこの日本語専門学校で半年ぐらい楽しい留學生生活を過ごし、東京に来ました。わずか半年でしたが、大阪を離れる時はもう自分の故郷のように感じられ、東京に行くバスの窓から最後に大阪の風景を見た時はもう涙でいっぱいでした。

東京に来てもう3年半になり、東京なりの魅力を感じ、東京についてももう完全に好きになりました。

留學生生活といえば、自分の国では決して体験できないいろいろなことが体験でき、異国文化も味わえるいいチャンスだと思います。つらい時も楽しい時も結構ありますが、これらは全部これからの人生にとって宝ものになって自分を強くし、支えてくれると思います。だから、留學生生活を楽しみながら研究を行っていきたいと思っています。

博士号取得後は帰国し、日本で学んだ知識と経験を生かして研究を続けながら、基礎研究と臨床間の橋渡し役となり、最終的には医療現場でより高いレベルの診療を提供したいと思っています。将来は母国の中国で研究、教育、臨床に従事し、中国のみならず、国際的に貢献したいと考えています。

中国では医療基礎研究活動が活発ではないのが現状です。医療事業発展のためには全世界の医療関係者が一緒に頑張らなければなりません。中国の医療関係者たちに日本研究者たちの研究に対する熱い思いや研究状況を伝えて中国の人々の研究に対する熱意を高め、より多くの人々が研究行列に参加するように宣伝したいと思います。

日本留学で築いた関係を礎に、日本と中国が共同で研究や教育を行える基盤を作り、日本で出会った人々の優しさを中国の人々に伝えて今後とも日中両国の医学の交流を通じて日中友好に力を尽したいと思っています。

東アジアの国際交流の第一線に立つ

しゃ けいてい
謝 恵貞

出身国：台湾

在籍大学：東京大学大学院人文社会系研究科 アジア文化研究専攻

博士論文テーマ：日本統治期台湾人による新感覚派の受容—戦略としての横光利一受容—



台湾では 1987 年に戒厳令が解除されると、族群（エスニック・グループ）問題がしだいに表面化し、近年はますますその問題が白熱化し、大変注目されている。台湾は、漢民族系の閩南系本省人、客家系本省人、戦後国民党と共に大陸から台湾に渡った外省人、そして先住民から構成される多重族群社会であり、族群政策に対する意見の対立によって、族群の間での衝突が時折引き起こされている。このような社会環境において成長してきた私にとって、族群問題への考え方の差異による衝突、摩擦は、常に考えずにはいられない問題となっていた。

また、私の祖父は日本統治時代に生まれ、私によく昔の話の話を聞かせてくれた。それゆえ私は、いつも日本統治時代の台湾の状況に思いを馳せるのである。そして、常に現在の台湾の状況と日本統治時代の台湾の事情を照らし合わせて考えるのである。こうして、私は植民地統治時代の台湾に生きていた人々の心理状態と、避けられぬ衝突から生じた苦痛を描く日本統治期の台湾文学に目を向けるようになった。このような経緯により、私は日本留学を目指し、帰国後は植民地時代の文献の整理や研究に従事することにより、台湾人として台湾研究に力を注ぐことを志すに至ったのだ。

最初は当時植民統治側の日本作家、佐藤春夫の台湾旅行作品を読み、彼の植民地台湾の人々への眼差しに興味を持ち、その眼差しの背後にある思想を大学卒業論文にまとめ、東京大学文学部藤井省三教授に修士入学の内諾を頂いた。東京大学人文社会系研究科に入学してからは、豊富な図書資料を利用し、日本台湾学会、横光利一研究会、東京台湾文学研究会で植民地研究の専門家たちとの交流を深めながら、戦前台湾人作家の東京留学中における日本作家との交流について更に関心を深めた。修士論文は、「日本統治期台湾人日本語作家巫永福小説における横光利一の受容と変容」と題して研究成果を纏めた。

また、来日当初から、慈濟という台湾のボランティア

団体で、在日台湾人二世と知り合い、彼らの言語をめぐる日本社会との葛藤に衝撃を受けた。その後、在日台湾人二世作家、温又柔さんのすばる文学賞受賞が決まり、台湾の大手文芸誌『聯合文学』の駐日記者をほぼボランティアの形で務める私は、温又柔さんにインタビューをし、彼女の胸中を在日台湾人二世や台湾の読者に発信することに挑戦した。

博士号取得後、2～5年ほど日本の大学で専門職に就き、研究者以外にも、出版業界や編集者、詩人・小説家など多方面における人びととの繋がりを強くしていきたい。その後、台湾に戻り、大学で教鞭をとりながら、人間の心の営為とも言われている文学の研究を通して、族群や階級差別の問題解決に貢献し、海外から学者・文学者を招聘し、国際シンポジウムを開催し、国際理解を深め、更に学生の視野を開拓させていきたいと強く希望している。

2010 年度

海外学会派遣プログラム参加報告

ダルウィッシュ ホサム「World Congress for Middle Eastern Studies 2010
中東学会世界大会（於：スペイン、バルセロナ）」----- 44

プアン、キムチャイヤラシー「イタリアでの国際学会の参加報告」----- 47

ネメフジャルガル「モンゴル民族文化基金・第 20 回学術交流会参加報告」-----49

高 熙卓「ハワイでの国際学会参加報告」-----51

World Congress for Middle Eastern Studies 2010

中東学会世界大会（於：スペイン、バルセロナ）

ダルウィツシュ ホ サ ム

Darwisheh, Housam

博士（地域文化研究）東京外国語大学

日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所

2009 年度奨学生

1. 概要

中東学会世界大会（World Congress for Middle Eastern Studies; WOCMES）は4年ごとに開催される中東研究の最大規模の学会である。2002年のドイツ・マインツ大学開催、2006年のヨルダン・アンマン開催に続き、第3回目の今大会はスペイン・バルセロナで開催された。

今大会は、ヨーロッパ地中海研究所（European Institute of the Mediterranean; IEMed）及びバルセロナ自治大学（Autonomous University of Barcelona; UAB）が主催者となり、カタルーニャ州政府の後援の元、1週間にわたって同大学のキャンパスで開催された。1989年に設立されたヨーロッパ地中海研究所は、カタルーニャ州政府、スペイン外務省及びバルセロナ市議会から成るコンソーシアムで、地中海地域の国々の間で、文化的・社会的な相互理解を促進し、平和・安定・繁栄・異文化間の対話を目指す活動を行っている。地中海地域の大学、企業、各種組織や著名人が顧問を務め、セミナーや研究プロジェクト、データベースの構築、出版等を行っている。

スペインのカタルーニャ地方は、地理的にも歴史的にも中東・地中海地域とのつながりが強く、バルセロナ自治大学をはじめ、他の大学や研究機関では中東地域に関する調査・研究が盛んに行われている。今回の大会がバルセロナで開催されたことは、非常に有意義なことだったのであろう。

大会期間中は、学術セッションだけではなく、ブックフェア、映画祭、ポスターセッション、企画展示、野外コンサートなども開催された。ブックフェア会場では、主催者のヨーロッパ地中海研究所、British Society for Middle Eastern Studies (BRISMES)、American University in Cairo Press、Cambridge University Press、Lynee

Rienner Publishers 等の33の出版社がブースを設けて出版物を展示販売した。また、映画祭は、Association of Independent Producers of the Mediterranean (APIMED) とヨーロッパ地中海研究所の企画によるもので、中東・北アフリカ地域で制作された最新の映画とドキュメンタリーが合計20作品上映された。



上映作品の例：Hatem Ali 氏監督による『The Long Night』（2009年、シリア）

（出典：WOCMES 大会プログラム）

2. 出席者

本大会には、72 国から 2,500 名以上が参加し、500 以上の学術セッションが開催された。学術セッションは、芸術、文化、言語、ジェンダー、宗教、経済、歴史、政治、環境等の19のテーマに分類され、私は政治に分類されたセッションでプレゼンテーションをした。政治関連のセッションでは、日本の他、アラブ首長国連邦、イタリア、エジプト、オーストリア、オーストラリア、オランダ、

カナダ、スペイン、ドイツ、トルコ、ノルウェー、マレーシア、フランス、英国、米国の大学及び研究機関からのパネルが参加した。

3. 学会プログラムの概要

□ 1 日目 (7月18日)

参加登録、映画祭、展示会、ブックフェア

□ 2 日目 (7月19日)

(1) 開会式：ヨルダン・ハシミテ王国ハッサン王子による開会の辞、レセプション

(2) 特別セッション：

* Middle East Politics through 'Post-Democratization' Lenses - 1/2"

* Practical, Theoretical and Methodological Challenges of Field Research in the Middle East

(3) ラウンドテーブル

* Métropolisation et enjeux urbains au Maghreb

* Objet de la recherche - Chercheur d' objet

(4) 他 5 6 セッションを開催

(5) 映画祭、展示会、ブックフェア、コンサート

□ 3 日目 (7月20日)

(1) 特別セッション

* Special Session: Knowledge under Control. Religious and Political Censorship in Islamic Societies - 2/4: The Pre-Modern Period

* Promoting Research on the Middle East: Cornerstone of the Alliance of Civilizations

* China-Middle East Relations: Emerging Cross-Regional Nexus?

* Reconceptualising Gender in the Middle East - 2/3: Gendered Responses to Structural Transformations in the Middle East

(2) ラウンドテーブル

* The Egyptian Political Scene: Coordinated Efforts to Promote Change

* Recent Trends in Western Impediments to Understanding the Middle East

* Al-Azhar Contributions to Contemporary Pedagogy of Islam

* Filming Words. For Whom and Why Film People Who Live Elsewhere, Who Come From Elsewhere?

(3) 他 76 セッションを開催

(4) 映画祭、展示会、ブックフェア、WOCMES 表彰式

□ 4 日目 (7月21日)

(1) 特別セッション

* Ending the Iraqi State

* The Global Financial Crisis and the Arab World: Impact, Challenges and Chances - 1/2

* Rethinking the Mediterranean: New Perspectives on Interaction Between 'Us' and 'Them' - 1/3: Theoretical Aspects

* Arab and Islamic Humor

(2) ラウンドテーブル

* Permissible Criticism: Law in the Service of Silencing Critical Voices

* Civility and Secularity in the Mediterranean Post-Colony

* Re-Configuring the Boundaries of Middle East Studies: Producing Decolonizing Knowledge about Arab and Muslim Communities and Diasporas

(3) 他 105 セッションを開催

(4) 映画祭、展示会、ブックフェア、コンサート

□ 5 日目 (7月22日)

(1) 特別セッション

* Migration from and towards MENA Region

* Media and Political Contestation in the Contemporary Arab World

* Cultural Turn in Iran' s June 2009 Post-Election Uprising

(2) ラウンドテーブル

* The Macroeconomy in the Mediterranean Sea. North and South Bank

* Iraqi Education Seven Years after Regime Change

* The Engagement of Middle Eastern Youth: New Media and other Opportunities for Empowerment

* Horn of Africa: Social Crisis and Geo-Strategic Dimension

(3) 他 113 セッションを開催

(4) 映画祭、展示会、ブックフェア

□ 6 日目 (7月23日)

(1) 特別セッション

* Methodes, approches et themes des recherches actuelles sur les arts visuels au Moyen-Orient et au

Maghreb - 1/2: Regards historiques

* Globalization of Higher Education in the Arab World - 1/2: Challenges and Chances

* Islamist and Leftist Movements in Arab and Muslim Communities: Irreconcilable Differences?

(2) ラウンドテーブル

* Media Coverage, War and Islamophobia

(3) 他 86 セッションを開催

(4) 映画祭、展示会、ブックフェア

4. 参加セッションの概要

7月23日に”Institutions: Tools for Rulers, or to Change the Rules of the Game? Transformation of the Relationship between Ruling Elites and the Opposition through Institutions”と題されたセッションでプレゼンテーションを行った。

本セッションでは、4名の報告者でパネルを作り、プレゼンテーションと討論を行った。私のプレゼンテーション“The Impact of Changing Electoral Institutions on the Party System and Determinants of Electoral Competition in Egypt (1984 - 2005)”は、近代エジプトにおける選挙制度と政党の相互作用を分析したもので、プレゼンテーションの主眼は、ムバーラク政権下において、諸政党に対する選挙制度の影響と、政党間で争う際の優劣を決定する要因であった。特に、ムスリム同胞団の選挙参加のダイナミクスと、それが政党間の争いにいかに影響を及ぼしたかという点を中心に分析を行った。ムスリム同胞団は、エジプトにおける社会・政治的集団

の中で最も影響力の強い集団であり、中東及びアラブ世界において、最も支持を集めるイスラーム運動である。この影響力の強さから、ムスリム同胞団に関心を寄せる研究者は多く、セッションには40名弱の聴衆が集まり、多くの質問やコメントが寄せられた。各教室で同時に多くのセッションが開かれており、セッションによっては聴衆が数名しか集まらないこともある中、多くの人に報告を聞いてもらえたのは幸いだった。政治、宗教、歴史等の分野で著名な中東研究者も来場し、有益なコメントをもらうことができ、非常に収穫の多いセッションとなった。

5. 所感

中東学会世界大会(WOCMES)は4年に一度の大きな大会で、多くの企画・報告・展示が行われ、全てに参加することは不可能だったが、自分の研究テーマと関連のあるセッションにはなるべく多く参加するようにした。本大会に参加して一番の収穫は、ネットワークを広げられたことである。また、若手研究者だけでなく、世界中から集まった著名な学者や教授の報告を聞くことができたことも非常に有益だった。

地中海の都市バルセロナは、多様な価値観や文化が入り交じり、太陽の光と活気にあふれた都市である。そのたたずまいは、シリアの旧市街を彷彿とさせる。このような都市で今大会を開催したことで、議論がさらに広がり、活性化されたのではないかと思う。



イタリアでの国際学会の参加報告

フアン キムチャイヤラシー
Phuong, Kimchhayarasy
博士（物性工学） 宇都宮大学
（在カンボジア）
2008 年度奨学生

2010年9月12日の夜にプノンペンを出発し、タイ経由で約13時間のフライトで、9月13日の朝にイタリアのローマ市外にあるレオナルド・ダ・ヴィンチ国際空港に着きました。しかし、旅の目的の場所はローマではなく、ローマから約400キロ離れたリミニ市というところでした。イタリアの町の風景などを見たいという目的で、ローマからリミニまで、電車かバスで移動することを決めました。空港に着いた後、空港からリミニまで発する電車があると聞いたので、電車のチケットを購入しました。ローマ駅から3回乗り換えて、5時間ぐらいの移動で夜の7時頃にリミニ駅に着き、リミニ駅からタクシーで約10分で何とか無事にホテルに辿り着きました。

今回、私が参加したのは9月14日から18日までリミニで開催された“14th International Biotechnology Symposium and Exhibition, Biotechnology for the Sustainability of Human Society”という学会でした。環境系、医学と薬学系、植物と森林学系、工業系、バイオエネルギー系、食品系、システム生物学系のバイオテクノロジー分野の9セッションに分類されました。この学会には世界各地から1600人以上の70カ国の参加者がいて、それぞれ85件は招待講演、330件は口頭発表、1100件はポスター発表の形で発表されました。私の研究発表は環境系のバイオテクノロジーに属し、15日の午前中に発表することになって、“Role of *Acinetobacter johnsonii* S35 in Floc-formation in Activated Sludge Process”という演題の口頭発表をしました。今回は博士論文の一部として、未発表の研究成果でした。

翌日14日の午後に学会の開会式が始まり、その後、多数の名誉教授による最先端のバイオ技術の理論と応用の面などの招待講演の発表が行われました。そして15

日から17日までそれぞれ別々の分野で口頭発表と大きなホールでポスター発表、18日はヨーロッパの研究者達を中心に将来の環境におけるバイオ技術の重要性というワークショップ、討論会が行われました。近年の資源の枯渇・環境汚染の問題の解決、例のない新病気への対策などにこういった分子生物学の理論と技術があらゆる学問に取り込まれ、またバイオマスなどの様々な再生可能エネルギーの利用に向けた研究の進んでいるものが感じられます。さらに、バイオ技術を用いた広範囲の応用への試みと優れた研究がなされていることも実感し、この刺激を受けて、今後の研究にぜひ生かしたいと思っています。

18日に学会が終わった後、リミニ市内の紀元前27年に造られたアウグストの門、古代ローマ時代に造られた2000年の歴史を持つティベリオ橋や海浜などを観光しました。翌日、リミニを後にし、電車でローマに戻りました。せっかくの機会にイタリアに来ましたので、ローマ市内の名所、ローマ帝国時代の建物、博物館などを見物しました。

今回のイタリアの旅を経て視野を広げることができたとともに、イタリアという国、古代ローマ帝国時代の遺跡見学と歴史、ヨーロッパの生活と文化などに少しでも触れることができ、良い思い出として残りました。しかし、思いもよらない出来事がありました。それは約1時間半電車が遅刻したせいで、帰りの便に乗り遅れたことです。そのため、空港近辺のホテルにさらに2泊延長し、チケットが変更できるのか、または、新しいチケットを買わなければいけないのかと航空会社に必死にやり取りをしました。運が良かったことに、買ったチケットの種類が帰りの日を変更できるもので、変更手数料を支払うことで解決でき、何よりもほっとしました。そのとき、

ビザ期限の関係でカンボジアに戻れないかもしれないと本気で心配しました。私にとって飛行機に乗り遅れたことは初めての経験で、こんな痛い目に合ったことは忘れ難い思い出となりました。

最後に学会参加のご支援を誠にありがとうございます。渥美国際交流奨学財団に心より感謝しております。

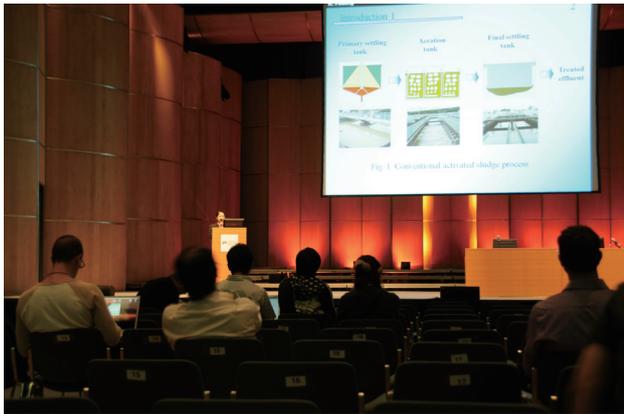


写真 1 : 口頭発表



写真 2 : 学会会場の前



写真 3 : ティベリオ橋 (リミニ市)



写真 4 : コロッセオ (ローマ)

モンゴル民族文化基金・第20回学術交流会参加報告

ネメフジャルガル
Nemekhjargal

博士（経済学）亜細亜大学

内モンゴル大学モンゴル学研究センター（在フフホト）

2008年度奨学生

1. 北海道

2010年12月14日、飛行機は新千歳空港の滑走路に着陸し、ゆっくりとターミナルへ移動した。1年8カ月ぶりの日本であった。2003年3月に羊牧場を視察するため北海道を訪れたときからは、およそ8年ぶりの札幌。北海道の冬空は若干淀んでいたが、飛行機を降りたとたん、懐かしい海の匂いがする空気を肺一杯吸って、もう日本にいるなど実感した。新千歳空港の入国には何人も中国語を話すスタッフが忙しそうに走りまわって、中国からの観光客に何かを説明していた。ある人気映画のロケ地になったきっかけで、北海道は中国人観光客に人気の高い観光先となり、留学経験者の僕らもよく北海道に関する質問を受けるようになっていた。日本では北海道というと寒いという人が多いが、私にとっては一番苦手の梅雨期がないうえ自然が広々としていて、食べ物も美味しく、もっとも生活に快適な土地だという感じが強い。空港の出口にフフホトで知り合った藤原さんが出迎

えてくれた。彼の実家は牧場を経営しており、私を案内してくれると約束していた。千歳から電車で帯広に向かい、さらに帯広から車で十勝川温泉郷に行き泊まった。久しぶりに温泉に浸かって美味しいビールを飲んだ。しかし日本で口蹄疫が発生したせいで、牧場の中に入ることができず、15日の視察は車の中からの見学と関係者への質問で終わった。それは若干残念だったが、肉用牛牧場に関するいろいろなことを理解することができ、帰りに池田ワインの工場を視察し、25年貯蔵したブランデーを味わい、満足して東京に向かった。

2. 学術交流会

モンゴル民族文化基金は在日中国出身のモンゴル人による組織で、モンゴル語教育支援のほか毎年2回学術交流会を開催している。私は第2期、第3期理事会の理事に選ばれたことがあり、会計部長も務めていた。学術交流会では2回も発表をしたことがある。2009年帰国してから基金の活動に直接参加できなくなったが、仲間たちとメールでの連絡を維持していた。そして11月に第20回学術交流会の知らせが届き、帰国してからの研究成果をみなさんに報告するつもりで今回の旅を計画した。学術部長の呉人徳司先生に招へい保証書を出してもらって、財団に海外出張助成金を申請し、北海道の藤原さんにも連絡をいれた。

学術交流会は、12月19日の13時から日本橋の近くの株式会社ジャパンラーニングの会議室で開かれた。第一部は言語研究、歴史研究などの発表で、第二部は内モンゴルの牧畜地域問題をテーマに3人の発表があった。現役牧畜民のボヤ





棄物の投下などが牧畜生産に大きな影響を与えているうえ、牧草地の徴用による「失地牧民」が誕生し、彼らの将来生活も注目される。もっとも大きな問題は、開発企業が現地から従業員を採用する意欲が低く、牧畜生産が困難になった牧畜民たちは新しい産業へ転換できていない。一方外地からの移民が急速に増え、もともと脆弱な環境へのダメージも増加しつつある。中国では最近、一人当たり可処分所得と一人当たり GDP の比を「GDP 含金量」と呼び、富の分配の平等や否かを測る重要な基準の一つになっている。2009 年の日本の同指標は約 73% であったのに対し、中国は約 40%、中国の中で内モンゴル自治区はワーストの 25%、地下資源開発によって経済が急成長した新バルガ右旗とフブトシャル旗ではせいぜい 10% である。いうまでもなく、開発の恩恵を受けているのが 90% の富を分かち合った企業と政府で、住民に分配されている部分がわずか 10% と理解することが可能である。今後牧畜地域は、開発のあり方と富の分配を大きく見直す必要がある。

3. 東京

僕の滞在した 12 月下旬はちょうど忘年会のシーズンだったので、東京の友人たちと数回の忘年会に参加して、帰国してからの話で花を咲かせ、楽しく交流することができた。クリスマスの東京はいつもと同じく賑やかで、活気に溢れているように見えた。新宿駅周辺は若者であふれ、喫茶店も、映画館も、居酒屋も、デパートも人混みになっていた。いつも愛用していた紀伊国屋書店新宿本店に行って本を数冊買ったが、人の多さで息苦しくなり、あわてて新宿を後にした。一方、居酒屋やデパートなどで従業員の数や昔より遥かに少なく、物価も若干安くなっていて、不景気を感じさせるところもあった。僕の大好きな作家村上春樹の小説「ノルウェーの森」が映画化され、ちょうど放映されていた。新宿の映画館はクリスマスの日には満席になっていたため、次の日に立川まで行ってようやく映画を見ることができた。映画の内容はともかく、1960 年代末の日本の雰囲気はどう見ても 21 世紀初期の中国の雰囲気と似ているような気がした。留学生時代に通っていた美味しいラーメン屋さんを 2 軒まわり、懐かしいとんこつラーメンも食べた。亜細亜大学や日本国際農林水産研究センターの先生方と共同研究の話をして、28 日に帰国した。非常に充実した旅になった。

ンアルビジホさんは自己の経験に基づき、牧畜経済に存在している様々な問題を指摘された。特に牧畜民はただ家畜の飼育段階にしか参加できず、付加価値はほとんど仲買人や企業に吸収されていることが牧畜民の所得増加を厳しく制限していると指摘した。千葉大学のナムラ氏は移民村での調査に基づき「生態移民」政策の牧畜地域にもたらした問題、移民たちの直面している問題を分析した。

私は「内モンゴルの牧畜地域における地下資源開発と地方経済」というテーマで報告をした。内モンゴル大学モンゴル学センターの研究プロジェクト「内モンゴル草原地帯における地下資源開発と社会・経済・生態環境に対する影響の評価」の一部である。近年内モンゴル自治区の経済成長が著しく、8 年連続成長率中国一を記録した。特に工業基盤が脆弱だった草原地帯では、地下資源開発による経済規模の急速な拡大と財政収入の著しい増加がみられた。このような現象の背景には中国の経済成長による資源需要の拡大と地方政府の経済成長への渴望があったのである。地下資源開発は牧畜社会に急激な変化をもたらし、生態環境にも影響が出始めた。地下水の低下、粉塵と騒音、牧草地への物理的破壊、工業廃

ハワイでの国際学会参加報告

こう びたく
高 熙卓

博士（総合文化）東京大学
延世大学政治外交学科研究教授（在ソウル）
2000 年度奨学生

滑走路に向かう飛行機の窓から目に入ったハワイの薄緑色の海は、水絵の具で塗られている風景画のようだった。まるで久しぶりの帰郷の道で眺めていた故郷濟州島の晩春の海を見るかのようにだった。着陸態勢に入った飛行機のなかで、私は静かに目をつぶり、昔の懐かしい顔を思い浮かべた。

私は、ハワイのホノルル・コンベンションセンターで2011年3月31日から4月3日にかけて行なわれた、Joint Conference of the Association for Asian Studies(AAS) & International Convention of Asian Scholars(ICAS)による共同国際学術会議に参加してきた。その会議は、AASの創立70周年を記念してICASと共同で開催された会議ということもあって、公式セッションやラウンド・テーブルの数が760余り設けられ、しかも公式参加者だけで4,000人を超えるアジア研究者が、アメリカはもとより世界各地からハワイに集まった大規模なものであった。

会議場となったホノルル・コンベンションセンターは、ハワイの未来に向けた地元の人々の意気込みが感じられる建造物だった。世界的に知られるワイキキ・ビーチからそれほど遠くない距離にあって、従来の都心の真ん中の硬い、四角いコンベンションセンターとはひと味違う、あえていえばシドニーのオペラハウスを連想させる外観は異邦人の目を引き留める何かをもっていた。玄関ロビーに入ると、自然とハイテック、芸術品などの組み合わせを誇るかのように、カラス張りの天井高い室内に植えられた椰子の木が異彩を放っていた。二階につながるエスカレーターに乗って上がると、47個所にも至る会議室がずらりとお客を迎えていた。

大会最終日に設けられた592番セッションで私は、江戸時代に対話的な公共性探求の道を開こうとした、ある



儒学者のライフ・ワークに秘められた歴史的・現代的意味について、“Why did the Confucian Ito Jinsai (伊藤仁斎) insist ‘Tennka Koukyou no Michi (天下公共之道)’ in Tokugawa Japan?”というタイトルで発表を行った。拙い英会話力のため、こちらの議論の趣旨がうまく伝達できたかどうか、あるいは私への質問に十分に答えられたかどうか心もとない。だが、短い時間のなか、フランス、アメリカ、カナダ、中国などから参加した先生たちと議論し、また交流し合う約束ができたのはひとつの収穫だった。

いよいよ会議から開放された私は知人とともに、以前から勧められていたホノルル・アカデミー・オブ・アーツに向かった。30ほどあるギャラリーには世界各国から集められたさまざまな美術品が展示されていた。ゴッホやピカソなど巨匠の作品以外にも、油絵をはじめとする東洋美術や陶器のコレクションも多い。しかもテーマごとに作られた中庭やレストランも良かった。この芸術博物館は、1927年クック女史から5万点にも上る家門代々所蔵の芸術作品の寄贈を受けて設立されたという。彼女の寄贈の弁は、「数多くの国と人種からなるハワイ

の子供たちが芸術の恵みを受けられぬまま生きている。彼らが自らの根っことなる文化はもとより隣人の文化についても目を開く羅針盤になってほしい」とある。その言葉が私の心に響く。

そして昔の原始林の痕跡を残す山道を通って風の山といわれる、ヌウアヌ・パリ展望台へ行った。高い所から見えるハワイの風景も別品だったが、さすがに島の風は私の体のなかに眠っていた故郷の風を目覚めさせた。少し寒気を感じた私たちは市内に戻って、沖縄風の居酒屋に入って熱かんを頼んだ。明るい声で迎えてくれた店員さんの顔が何ともいえない感情を引き起こす。その夜はお酒をたくさん飲んでしまった。

翌日、帰国の途のはずなのに、足元が重かったことを覚えている。昨日のお酒のせいとしながら、空港行きのバスに乗った。あのきれいな海と風、原始林の残る山、そして数々のお顔を今も忘れられない。



最後になりましたが、渥美国際交流奨学財団の海外学会派遣助成のおかげで、こうした貴重な思い出ができました。この場を借りて理事長をはじめとして関係者皆様に深く御礼を申し上げます。



AISF ネットワーク

- ラクーン会 54

- 第 10 回日韓アジア未来フォーラム 58
「1300 年前の東アジア地域交流」

- 第 5 回 SGRA チャイナ・フォーラム
「中国の環境問題と日中民間協力」
 - 第一部 パネルディスカッション in フフホト60
～地下資源開発を中心に～
 - 第二部 講演：高見邦雄 in 北京62
～北京の水問題を中心に～

- 第 3 回 SGRA モンゴル・プロジェクト64
ウランバートル国際シンポジウム
「日本・モンゴルの過去と現在—20 世紀を中心に」

- 関口グローバル研究会 (SGRA)67

2010 年度ラクーン会レポート

■韓国ラクーン会 in ソウル (2010 年春)

2010 年 4 月 17 日土曜日の夕方 6 時、ソウルの鍾路区にある「甘村」というお店で韓国ラクーン会 (KSR) が開かれました。今回のお店はスンドゥブ (韓国風おぼろ豆腐) の専門店です。再開発のため裏通りから表側に移転した老舗で、大統領や米国大使なども常連です。新しく移ったお店は教保文庫という大型書店の隣に位置しているので初めての方でもアクセスしやすいところです。昔は本屋さんといえば教保文庫で、よく行ったのですが、最近本店以外のお店もでき、またネットで買うとなぜか割引された値段で買えるので、直接書店に行くことが減ってしまいました。なので、こんなところにこんなビルがいつできたのって感じでした。日本ではネットで買っても消費税に送料まで取られるのですが、送料の要らない韓国のこのシステム、私は大変重宝しております。

今回は渥美財団常務理事の今西淳子さん、南基正さん (KSR 会長、96 狸) 李香哲さん (97 狸) 金宰晟さん (98 狸) 高熙卓さん (00 狸) 韓京子 (KSR 幹事補佐、05 狸) 李垠庚さん (07 狸) 崔恩碩さん (09 狸) の 8 名が集まりました。崔恩碩さんは 15 期奨学生で、ソウル面接枠で選抜されて 1 年間留学し、帰国してから国民大学で博士号を取得した新メンバーです。という会話をしながらどうも見慣れた顔だなと思っていたら「留学同期ですよ」と言われ、どおりでと納得 (我ながら失礼な話です)。日本の大学で同じ建物にいました。なのに、どうしてその間会えなかったのでしょうか。世の中狭いようで広く、広いようで狭いものです。

いつものことではあるのですが、この日も学会や海外出張、会議、さらに結婚式などが重なり、あまり多くは集まれなくて残念でした。でも、いろいろと行事が重なったにもかかわらず、遅れてもかけつけてくださったみなさまのおかげで、意外と集まったという気はいたします。

スンドゥブというこの料理、意外と家庭ではこの味が



でないんです。スンドゥブチゲのもとを買って味付けしていてもです。それにこのスンドゥブというお豆腐は四角い容器ではなく「パピコ」のアイスチューブみたいな容器 (アイスのチューブより何倍も太い) に入っています。それを包丁で真ん中を切るのですが、包丁の切れが悪いと歯磨き粉のような細い豆腐になってしまったり、鍋に「ドボン」と入って飛び散ったりで大変です。ただ私の要領が悪いだけなのかもしれませんが……。

今回は、秋、渥美奨学生 (ソウル面接枠) の面接の頃になると思います。

それでは、また、紅葉の季節に。

(文責：韓 京子)

■ミニ・ラクーン会 in 北陸

平成 22 年 5 月 1 日、大型連休の最初の日の北陸で、富山・金沢巡りの特別ラクーン会がありました。参加者は渥美財団常務理事の今西淳子さん、1999 年度狸の李鋼哲さんと奥さん、同じく 1999 年度狸の周海燕さん、2003 年度狸の朴貞姫 (筆者) の計 5 人でした。周海燕さんが去年の 4 月に「たてやまクリニック」という名前の立派なマイクリニックを開設したということで、第一目的地は富山でした。今西さんは高岡市 (娘さんの漆展示会参加のついでに) からバスで富山空港へ、李鋼哲さん (北陸大学教授) と筆者の朴貞姫 (北京語言大学教授、4 月から 1 年間北陸大学で交換教授として勤務) は金沢



から車で富山空港へ、そして李さんの奥さんは中国の大連から飛行機で富山空港へ。このようにして集まった一行4人は、周海燕さんのクリニックへ。着いたのは午後1時でした。

立山連峰の素晴らしい景色を眺めることのできる周海燕さんのクリニックはとても立派でした。そのクリニックを見学しながら、彼女の努力と勇気と実力に感銘を受け、同じラクーンとして誇りに感じました。クリニックの見学が終わってから、一行は周さんの案内で眺めのいい蕎麦屋さんで美味しい昼食を済ませ、第二目的地の「砺波チューリップフェア」へと車を走らせました。残念なことに周海燕さんは同行できませんでした。

一行4人は、花香り、水清く、風さわやかな町の「砺波チューリップフェア」で、500種類ものチューリップをたっぷり楽しみました。それから、チューリップの余韻を車に乗せて第三目的地である北陸大学へと移動しました。李鋼哲さんの住まいは北陸大学のすぐ隣。去年の11月に入居したばかりの立派な新築一戸建て。そこで休憩をとり、目的地の大学のキャンパスへ移動。山の上の、桜の木に囲まれているキャンパスは、とても穏やかな雰囲気でした。北陸大学は規模の小さい大学ではありますが、毎年100人も超える優秀な人材を東大、京大や早稲田などの国公私立大学大学院あるいは海外の大学へ送っていると、自負心に満ちた口調で語る李鋼哲さん。私たちは李さんの研究室で、朝鮮半島や中国の方角へ沈む夕日を背景に記念写真を撮って、キャンパスを離れました。

最後の目的地は金沢市にある「漁匠庵」という日本料理店。本格的ラクーン会はここから始まったのです。話題はいろいろ。日本の政治・社会、特に鳩山政権、中国の上海万博、東アジアの主要3カ国、日中韓の歴史と現在と将来などなど……。一番心に残ったのは、気の置けない仲間同士の間の「十人十色」的議論でした。議論は

11時まで続き、なかなか終わる気配を見せなかったのですが、今西さんの乗る終電が待ってくれなかったため、名残を惜しみながら幕を下ろしました。

とてもハードなスケジュールでしたが、本当に楽しく、充実した一日でした。懐かしい人と会え、美しい自然が満喫でき、言いたい放題にものが言え、飲みたい放題にお酒が飲めるラクーン会、このようなラクーン会ほど心が安らげる集いはこの世の中にまたとないのではないのでしょうか。この場を借りて改めて渥美財団に感謝の意を表します。

(文責：朴 貞姫)

■ラクーン会 in ボストン 2010

2010年5月14日、マサチューセッツ工科大学 (MIT) の近く、Kendall Squareにあるロブスターチェーンレストラン Legal Seafood でボストンラクーン会が開催されました。東京からニューヨーク経由でわざわざボストンに飛んで来た今西淳子さんと、4匹の狸(王岳鵬 1997 狸、朴榮濬 2002 狸、孟子敏 2004 狸、王健歡ケビン 2005 狸) や家族が集まりました。唐揚げイカとクラムチャウダーとロブスターが当夜のメニューでした。

ロブスターを楽しみながら、狸たちはアジアの大学の最新ランキングについて話しました。つい最近に公表された Quacquarelli Symonds 2010 のアジアの大学ランキングによると東京大学は5番目で、香港の3つの大学とシンガポールの大学の後という驚愕すべき結果となっています。このランキングは、研究が60%、教育の質が20%、国際性が10%、卒業生の雇用者の評価が10%という基準です。

外国人の教授が少ない日本の大学には不利ですが、その評価は僅か2.5%だけなのに、東大は香港の大学に負けてしまいました。理由は大学の研究の質です。大学相互の良い評価、出版数の多さ、文献の引用の多さがポイントを得ます。香港では、大学教授は研究ばかりして教育に無関心すぎるということがよく批判されていますが、大学教授たちは職位を確保して生き残るために論文をたくさん出版しなければなりません。そして、香港の一人当たりの国内総生産 (GDP) が日本より安くでも、大学教授の給料は香港の方が日本より高いのです (2008年のGDP: 米 = 48,000ドル、日 = 38,000ドル、港 = 30,000ドル、韓 19,000ドル、中 = 3,000ドル)。全てのことには何がしかのコストが伴うということですね。

孟先輩からおもしろい中国の言葉が出ました。海帰(海



亀＝カメ、卒業してから母国へ帰った留学生)、海待（海帯＝海草、卒業してから母国へ帰ったが失業中の留学生）、海留（海流、卒業してからも海外に滞在する留学生）という3つの言葉で、中国人の学生たちの間で流行っているそうです。中国経済が大発展したために多くの中国人留学生在が卒業後国へ帰って就職します。しかしながら、アメリカで仕事を探せないで国へ帰っても失業している人もいます。この状況は、留学すべきかどうか進路を選択する学生たちにも影響しています。中国出身の留学生の中には、良い成績で奨学金を貰っている学生もいますが、親に学費や生活費を負担してもらっている学生も多いです。

孟先輩や朴先輩はサバティカル休暇が終わると日本や韓国へ帰る予定ですので、ボストンにいる狸の数は来年はだいぶ減るでしょう。

実は、当夜、ラクーン二世会が同時に行われました。初めて会った2匹の狸の子、ジュリーちゃんとジェウオン君は、とても楽しく遊んでいました。ずっと前からの友達のような様子でした。運命が私たちを渥美財団へ連れてきて、又運命が私たちを軽井沢へ導き、子供たちとも知り合いました。軽井沢に行ったすべての子供たちが、2つのことを覚えています。大きな黒い犬と一緒に遊んでいた外国人のおじさんです。ヴォヴォちゃん、マルコムさん、離山、釜飯、ハチミツアイス……全て私たちの心にいつまでも残っています。今度の夏SGRAフォーラムは蓼科に代わります。みなさん、自然と温泉を楽しみながらも、狸の子たちの活動も準備してあげてください。

夕食の後、喫茶店に移動しておしゃべりを続けました。狸の子たちの追いかけてこや叫び声も続きました。ラクーン会およびラクーン二世会は9時半ころに終了しました。快くて素晴らしい夜を、皆が楽しんで過ごしました。引用言葉を3つ。

「世界市民だから、また、何処かでお会いしましょう」

-- 孟子敏

「有朋自遠方来、不亦楽乎？」

-- 孔子

「お忘れ物なさいませぬよう、ご注意下さい！」

-- 東京メトロ

(文責：王 健歡)

■ラクーン会 in 北京 2010

2010年9月14日（火曜日）の夕方6時、北京の中関村にある「悄（ニンベン）江南 South Beauty」というお店で中国ラクーン会が開かれました。この名前を見て、繊細で上海っぽい料理店ではないかと殆どの人が思ったようですが、実際、こちらは四川料理の名店だそうです。去年の中国ラクーン会もこのお店で行われました。ここは「豆の花」がお勧めの料理なのですが、今回も食べ、前回のラクーン会のことを思い出しました。

今回は緑の地球のネットワークの事務局長高見邦雄さん、渥美財団常務理事の今西淳子さん、事務局の石井慶子さん、金熙さん（95狸）、孫建軍さん（02狸）、朴貞姫さん（03狸）、劉健（08狸）の7名が集まりました。去年の中国ラクーン会は、宋剛さん（08狸）は病気で欠席でしたが、今年も翌日のSGRAフォーラムの準備で、お会いできませんでした。

緑の地球のネットワークの高見邦雄事務局長は環境保護への貢献が評価され、2001年に中国政府より友誼奨、2006年に大同市政府より大同市榮譽市民を授与されました。おいしい四川料理を食べながら、高見先生のお話を聞いて、とても勉強になりました。また、金熙さん、孫建軍さんと朴貞姫さんの三人が子ども教育のことでいろいろ面白い話をしました。

前日も、このレストランでしたので、中国ラクーン会と言うと、すぐ「South Beauty」という名前が出てきます。実際は、今回の中国ラクーン会の前に、ネットでいろいろ



ろとおいしそうなお店を探しましたが、あれこれ考えた結果、やっぱりここになりました。定番料理は必ず注文しますが、去年と違ってあるものもあります。これからもし毎年ここで中国ラクーン会をやるのなら、このお店の料理変遷史を誰かに書いていただきましょうか……。

(文責：劉 健)

■韓国ラクーン会 in ソウル (2010 年秋)

2010年9月25日、夕方の6時、ソウルの鍾路区光化門にあるモラッ (Bistro Seoul Morac) で韓国ラクーン会 (KSR) が開かれました。伝統的な韓国料理をアレンジしたお店で、去年の4月の韓国ラクーン会でも利用したお店です。最近、江北の方のお店、特に韓国料理のお店にご無沙汰で、持ち札が尽きました。次回のために開拓しておきます。

今回は渥美財団常務理事の今西淳子さん、南基正さん (KSR 会長、96 狸) 金雄熙さん (96 狸) 李香哲さん (97 狸) 洪京珍さん (99 狸) 高熙卓さん (00 狸) 李垠庚さん (07 狸) 韓京子 (KSR 幹事、05 狸) の8名が集まりました。渥美財団の奨学生選考 (韓国現地採用枠) の面接の日程に合わせたのですが、ちょうど「民族最大の祭日、秋夕 (旧暦のお盆のようなもの)」の連休中でもあり、よりたくさんの会員が集まれなく残念でした。今年は韓国採用枠の応募者も増え、書類選考があり、その後の面接でした。

新入会員も増えるので、もっとたくさんのメンバーが集まれるような会にして行くため、お互い良い案を出し合おうという話になりました。

ここ数年、お正月 (旧暦) と秋夕の連休が3日ずつ、それも週末に重なるという不幸 (?) が続いていたのですが、今回は最長9日も休むことができました。お正月と秋夕のお休みというのは、当日 (旧暦の1月1日、8月15日) の前後1日ずつです。それが今年はお正月は2月14日の日曜日だったので、その前後の土曜と月曜が休みでした。実際、月曜だけ休みが増えただけでした。しかし、秋夕は22日水曜日だったので、前後の火曜と木曜が休みでした。そのため月曜と金曜が飛び石状態であり、また、恒例の大学学生会が運営する帰省バスがその前の週の土曜に出発することになっていたため、月曜と金曜は事実上休講となっていたわけなんです。私は金曜日が「赤い日じゃないから」という理由で、休講にせ

ず授業をしたのですが、その日、大学があまりにも静かでびっくりしました。授業をしたのは私とその他外国人の先生方だけでした。なんだか、どこにもいくところがないので学校に来るしかなかった人のような感じでした。空気の読めない先生のために、授業に出てきた学生に申し訳ないのと感謝の気持ちでいっぱいになってしまいました。

秋夕の (人によっては) 黄金のような連休が終わったとたん、次の連休が話題となりニュースでも取り上げられたりしました。実は、もう当分の間ないんです。それも来年の2月2・3・4日の旧正月まで。10月3日の開天節が日曜日で、12月25日のクリスマスが土曜日、1月1日のお正月が土曜日。休日が週末と重なるという悲惨な状況が続くんです。振り替え休日制度を導入しようという話になっていますが、反対も多く難航しそうです。振り替え休日、あっても研究者にはあまり関係ない話ではあるのですが……。

話は変わりますが、韓国は今中間テスト期間です。ついさきほどエレベーターの前 (この場所は階段よりもエレベーターの利用者が多いため、非常に目につきます。学生さん! 歩きましょう!) の貼り紙に驚かされたのですが、その内容とは「今夜9時~9時半、学生会館前にて夜食配布。試験がんばってください。〇〇大学学生会」というもの。おもしろいというか、大学受験生だったという感覚がまだ身から抜けていないのか、妙な一体感、同胞愛 (?) みたいなものがあるようです。学生諸君! 先生だって試験問題出題したり、採点したりで大変なんだから、先生方にも夜食配ってちょうだい!

(文責：韓 京子)



韓国未来人力研究院 /21 世紀日本研究グループと渥美財団 /SGRA との共同プロジェクト

第 10 回日韓アジア未来フォーラム

「1300 年前の東アジア地域交流」

日 時：2011 年 2 月 19 日（土）午後 1 時 00 分～4 時 30 分

会 場：奈良県新公会堂会議室

日韓同時通訳付き

■フォーラムの趣旨

関口グローバル研究会と韓国の（財）未来人力研究院は、2010 年 2 月に韓国の慶州で第 9 回日韓アジア未来フォーラム「東アジアにおける公演文化（芸能）の発生と現在：その普遍性と独自性」を開催した。その際、東アジア共同体のビジョンは語られるようになったものの、東アジア（特に日本、韓国、中国）の文化の共通性や異質性について 3 国の研究者が一堂に会して検討する機会が少ないことが明らかになり、今後のフォーラムでは、様々な時代とジャンルから検討していこうということになった。慶州では新羅文化と奈良の文化との同質性が指摘されたが、一連の平城遷都 1300 年の祝賀イベントからもわかるように、この時代には唐の都長安を中心とした東アジア文化圏が形成され、人や物が活発に交流していた。この歴史観は、意外と現在の東アジアに暮らす人々に認識されていないようで、あらためて国際的かつ学際的な側面から当時の活発な交流を検証してみる必要があると思われる。中華思想や朝貢制度ばかりが強調されるが、各国間の勢力関係ではなく、東アジアを地域としてとらえた時に、経済や安全保障の観点、あるいは文化の伝播や興隆が違って見えてくるのではないか。昨年韓国慶州で開催されたフォーラムに続き、今回は日韓の研究者に中国や台湾の研究者も交えて議論した。

■プログラム

総合司会：金 雄熙（韓国仁荷大学校国際通商学部副教授、SGRA 研究員）

【開会の辞】今西淳子（SGRA 代表、渥美国際交流奨学財団常務理事）

【挨拶】朴 贊郁（ソウル大学政治外交学部教授、未来人力研究院前院長）

【基調講演】「古代宗教美術の三国流伝」：朴 亨国（武蔵野美術大学造形学部教授）

【発表 1】「古代東アジア双塔式伽藍の展開と構成原理」：金 尚泰（韓国伝統文化学校伝統建築学科助教授）

【発表 2】「東アジアにおける律令国家の形成と人的交流」：胡 潔（名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授）

【発表 3】「大和と朝鮮半島、隋唐の古代関係史」：李 成制（東北亜歴史財団研究委員）

【パネルディスカッション】進行：陸 載和（武蔵野美術大学造形学部）、討論者：清水重敦（奈良文化財研究所景観研究室）、林 慶澤（韓国全北大学人文科学大学）、パネリスト：上記講演者

■概要報告：「1300 年前の東アジア地域交流とエスノセントリズム」

一年ほど前の 2010 年 2 月 9 日、韓国の慶州で「東アジアにおける公演文化の発生と現在：その普遍性と独自性」というテーマで第 9 回日韓アジア未来フォーラムが開催された。今年の 2 月は、その続編として日本の慶州とも言うべき奈良で奈良時代の仏教文化の日中韓三国流伝について検討する運びとなった。第 10 回フォーラムの正式なタイトルは「1300 年前の東アジア地域交流」であった。

昨年度の慶州フォーラムで奈良から空輸してきた一升瓶の「春鹿」が目の前で消えてしまう大事件があったのは記

憶に新しい。今回のフォーラムは、武蔵野美術大学の陸戴和さんのご案内で興福寺及び国宝館を見学することから始まったが、目玉は今西酒造「春鹿」の酒蔵見学及び利き酒だったのかもしれない。これできっと遺恨を散ずることに成功したのではないかと思う。もちろん、三日連続の日本の素晴らしい仏教文化や世界遺産の見学も貴重な経験だったが（個人的には三日でこんなにたくさんの仏さんに会ったのはこれまでもなかったし、これからもないだろうと思う）、「春鹿」でちゃんとけじめをつけることができたのもよかった。



フォーラム当日、私の予想からすれば「満員御礼」に近いレベルの聴衆に驚いたし、講演内容の整合性にも感動を覚えた。いま考えてみると、本当に形式、内容、そして番外の三拍子が揃った素晴らしいフォーラムが出来たと思う。今回のフォーラムで、私はとりわけ文化交流やその解釈においてはエスノセントリズム（ethnocentrism、自民族中心主義、自文化中心主義）が付きまとうものなのかという問題について考えてみた。

奈良という地名の由来については朝鮮半島起源説があり、韓国人の間では結構受けがいいようだ。韓国語で「なら」と発音される言葉は日本語の「国」を意味する。韓国語の「なら」が日本に渡って当て字され、奈良となったというわけだ。百済（くだら）の日本語読みについても同様の文脈で説明することができる。大きいという意味の韓国語である「クン」が「なら」の前に付くと大きい国を意味するが、「くんなら」から「くだら」へと自然に読み方が変わったというのだ。当時の日本にとって百済は大きい国であったわけだ。この類のものは決して少なくない。

韓国で地域によっては奈良漬（ならづけ）という言葉が今でも通じる。日本とまったく同じことを指しているのだが、日本帝国時代の名残といって言葉の使用には慎重さを要する。日韓交流の歴史的な経緯を考えると、「なら」という言葉に込められている二重の含意はそれほど驚きに値しないものなのかもしれない。

昨年奈良を中心に開催された一連の平城京遷都 1300 年の祝賀イベントからも覗えるように、奈良時代には唐の都長安を中心とした東アジア文化圏が形成されていた。名古屋大学の胡潔さんの発表によると、仏教・律令・漢字などがこの文化交流圏の共通基盤をなしており、国家間の外交を担う「遣隋使」、「遣唐使」、「渤海使」、「新羅使」などの使者、唐の文化を学ぶために派遣された学生・学問僧達が、中国、朝鮮半島、日本の間を行き来し、外交や文化の伝播の役割を果たしていた。既に 1300 年前からこの地域には素晴らしい文化交流があったのだ。

このあたりで韓国伝統文化学校の金尚泰さんによる仏教文化に関する興味深い発表を紹介しよう。古代東アジア地域における双塔式伽藍配置の背景としては護国伽藍や密教関連の伽藍が挙げられるが、このような空間構成の原理は日本の双塔伽藍においてもその関連性を見出すことができるという内容である。7 世紀から 8 世紀の東アジア地域では仏教が盛行し、寺院では、二つの塔を金堂の前に配置する「双塔式伽藍配置」が流行したという。しかし、中国では、このような形式の伽藍配置として現存している事例はまだ確認されていない。韓国の場合は、多くの寺院がこのような配置を継承しており、奈良（西の京）の薬師寺の伽藍配置のモデルとなったという。

統一新羅時代の朝鮮半島で花を咲かせた双塔伽藍が中国とは別の独自なルートで日本に影響を及ぼしたということが指摘されているわけだ。ややもすれば 1300 年前の仏教をめぐる素晴らしい交流文化がエスノセントリズムに染められかねないところでもあった。金尚泰さんは最後まで中庸を守りきったと思われるが、エスノセントリズムの甘い誘惑から自由にいられる韓国人はどのぐらいいるだろうか。

以上の話は、仏教文化には門外漢である一韓国人として、あくまでも韓国を愛し、真の日韓交流を求める立場からの自己批判でもある。ところが、いうまでもなく、エスノセントリズムは韓国人の専有物ではあるまい。異文化交流には常に自文化中心主義の落とし穴が隠されている。日韓アジア未来フォーラムは、これまでそうだったように、これからもエスノセントリズムという共通の敵と戦いながら東アジア地域交流を積極的に進めていく場になってほしい。

（文責：金 雄熙 韓国仁荷大学国際通商学部副教授）

第5回 SGRA チャイナ・フォーラム in フフホト & in 北京

「中国の環境問題と日中民間協力」

第一部 パネルディスカッション「～地下資源開発を中心に～」 in フフホト

2010年9月13日（月）午後3時～6時 内モンゴル大学学術会議センター

第二部 講演「～北京の水問題を中心に～」 in 北京

2010年9月15日（水）午後4時～6時 北京外国語大学 日本学研究センター多目的ホール

主 催：渥美国際交流奨学財団関口グローバル研究会（SGRA）

協 力：緑の地球ネットワーク（GEN）、内モンゴル大学モンゴル学研究センター、北京外国語大学日本語学科

助成：国際交流基金北京日本文化センター

〈日中同時通訳付〉

■フォーラムの趣旨

SGRA チャイナ・フォーラムでは、日本の民間人による公益活動を、北京をはじめとする中国各地の大学等で紹介するフォーラムを毎年開催しています。5回目の今回は、NPO 法人緑の地球ネットワークの高見邦雄事務局長に再度お願いし、山西省大同における植林活動を通して見てきた中国の環境問題について考えました。

第一部〔パネルディスカッション〕 in フフホト

～地下資源開発を中心に～

フフホトフォーラムでは、日本から高見事務局長と滋賀県立大学のブレンサイン准教授を迎え、山西省と内モンゴルに共通する「地下資源開発」について、そして内モンゴルの環境問題とその解決のための日中民間協力の可能性について検討。石炭をはじめ地下資源で一步先に走ってきた山西省ではどんな問題が起きているのか、地下資源枯渇を防ぐためにどのような対策が考えられるか、環境問題を克服した日本の経験に学べることはあるのか等について、パネルディスカッション形式で検討しました。



■ 概要報告

第5回 SGRA チャイナ・フォーラム in フフホト「パネルディスカッション：中国の環境問題と日中民間協力—地下資源開発を中心に」は、2010年9月13日（月）に、中国・内モンゴル大学で開催されました。緑の地球ネットワーク（GEN）と内モンゴル大学モンゴル学研究センターが協力し、国際交流基金北京日本文化センターが協賛した

同フォーラムには、内モンゴル大学、内モンゴル農業大学、内モンゴル師範大学、内モンゴル財經学院、フフホト民族学院などの教師や生徒と、内モンゴル自治区農牧庁、内モンゴル図書館、NGO 内モンゴル草原環境保護促進会などからの関係者約 150 人が参加しました。SGRA 研究員のネメフジャルガルが司会を務め、内モンゴル大学副学長・モンゴル学研究センター主任のチメドドルジ教授が開会の挨拶をしました。チメドドルジ教授は、チャイナ・フォーラムを内モンゴル大学で開催した SGRA に謝意を表した後、内モンゴルの草原地帯における地下資源開発による環境破壊の実態および内モンゴルでの調査研究の進捗状況を紹介し、環境保護分野における海外の学者や民間人との協力の重要性を訴えました。

パネルディスカッションでは 3 人の報告が行われました。まず、緑の地球ネットワークの高見邦雄事務局長が『「得ること」と「失うこと」』というテーマで報告を行いました。高見さんは、1992 年から山西省大同市の農村で緑化活動を実施してきた経験に基づき、山西省を中心に中国が直面している環境問題、特に土壌侵食、水資源の枯渇と汚染、地下資源の乱開発による環境破壊などを紹介し、「生産はすなわち消費です。得ることは失うことです。人は新たに手に入れたもの、快適なもの、便利なものは、すぐ認識します。その反面、その背後で失われているもの、なくなっているものを認識することはありません」と指摘し、環境破壊の代価を負う「下流の人、未来の人」のために環境保護に力を入れなければならないと強調しました。

次に、内モンゴル大学民族学と社会学学院のオンドロナ副教授が『地下資源開発と内モンゴルの草原環境問題の現状分析』という報告をしました。オンドロナ先生は、地下資源開発の政策的背景を紹介した後、内モンゴル草原地帯における豊富な調査に基づき、写真やビデオを利用して、草原地帯における地下資源開発による環境破壊の現状を紹介しました。そして、政府と企業側が環境への配慮と現地住民の利益保護のために責任を負うべきであると指摘しました。

最後の報告者は滋賀県立大学のボルジギン・ブレンサイン准教授でした。ブレンサイン先生は、『黄金の仔馬がどこに消えたのか—資源開発と少数民族の存在』というテーマで、モンゴル各地で伝承されている黄金の仔馬の伝説を紹介して、開発に対するモンゴル人の伝統認識を分析し、モンゴル人の観念の中では、生態資源と地下資源は同一視された有機システムになっていると指摘しました。そして、開発利用という「正義」の裏に隠れている「遊牧時代遅れ論」や国営という「正義」の裏の社会的弱者の利益無視を批判しました。

報告後、三人の報告者と参加者による討論が行われました。パネル報告をめぐって学者、大学生、NGO 関係者などからいろいろな質問や指摘があり、参加者たちが皆、地下資源開発と環境問題、日中民間協力問題に対して高い関心を持っているのが明らかになりました。また、高見さんの長年にわたる緑化活動への努力は学生諸君に大きな感動をもたらしたようでした。最後に今西淳子 SGRA 代表が閉会の挨拶をしました。今西代表は SGRA の趣旨や活動などを紹介し、今回のフォーラムが大成功を収めたことに対して、関係者各位に謝意を表しました。フォーラム終了後、懇親会の会場に移動し、皆杯を交えながら熱烈的な討論を続けました。

(文責：ネメフジャルガル 内モンゴル大学モンゴル学研究センター社会経済研究室講師)



第一部〔講演〕 in 北京 ～北京の水問題を中心に～

チャイナ・フォーラム in 北京では、北京の水源地である山西省大同から見てきた深刻な北京の水問題とその解決のための日中協力の可能性について検討。高見事務局長のご講演の後、環境問題を克服した日本の経験から学べるものがあるか、パネルディスカッション形式で検討しました。



講演「大同からみる北京の後ろ姿」高見邦雄氏

■ 概要報告

2010年9月15日、第5回SGRAチャイナ・フォーラム in 北京が、北京外国語大学日本語研究センター3階多目的ホールで開催された。今回のテーマは「中国の環境問題と日中民間協力：北京の水問題を中心に」で、SGRA、北京外国語大学日本語学科、NPO 法人緑の地球ネットワーク、日本国際交流基金北京日本文化センターの関係者が出席し、大学生および社会人が70名近く参加した。

開会挨拶で、北京外国語大学日本語学科長の于日平教授は、SGRAと日本語学科とのチャイナ・フォーラムの共同開催は日中民間協力の一環で、学生の環境問題への関心を高めるよいチャンスだとアピールし、日本語学科の歴史について紹介した。

次に、緑の地球ネットワークの高見邦雄事務局長が「大同からみる北京の後ろ姿」をテーマに、植林現場で取った写真を示しながら、基調講演を行った。国交正常化前年の1971年にご自身の訪中の歴史をスタートした高見氏は、1992年から山西省の大同を拠点に活動を展開し、合計3200

名あまりの日本人ボランティアを現地に送り込み、大同の環境保全に尽力する一方、多くの日本人にも水の大切さを身をもって体感させた。さらに、北京の水源地の一つである大同で、首都の用水を保障するために水の使用が厳しく制限されていることを明らかにし、フロアを震撼させた。講演後、司会者を務めた筆者がSGRA 研究員として感謝の意を表し、日本語学科を代表して学生着用の夏の制服を記念に贈呈した。

今までと異なり、今回のフォーラムではパネルディスカッションを設け、中国人民大学外国語学院の張昌玉助教授と苗東連企画デザインコンサルティング会社の汪敏高級エンジニアをパネリストとして招いた。汪氏は「水：北京の発展を左右する鍵」をテーマに、北京の水環境の歴史と現状を紹介し、水こそ北京近代化のボトルネックだと主張し、北京の水環境の改善を提言した。一方、張先生は食事などの身近なことに着目し、肉の消費はとりもなおさず牛や豚が消費した植物と水の消費でもあると力説し、人間が直接に植物を摂取する、いわゆるベジタリアニズムを訴えた。質疑応答は、SGRA 会員で北京語言大学の朴貞姫教授が進行役を担当し、高見氏も加わり、3名のパネリストはフロアの方々と熱烈な討論を行った。最後にSGRA 今西淳子代表が閉会挨拶をし、SGRA チャイナ・フォーラムの趣旨を伝え、今後日中間の更なる民間協力を呼びかけ、来年北京での再会を約束した。

閉会后、関係者一行は口先だけでなく早速行動に移り、ベジタリアンの張先生の引率で精進料理を堪能した。草を食わない（大豆でできた）牛肉ステーキと水の中で成長するが泳げない（海草でできた）魚料理を楽しんだ。

（文責：宋 剛 北京外国語大学日本語学部専任講師。SGRA 会員）



第3回SGRAモンゴル・プロジェクト

ウランバートル国際シンポジウム 『日本・モンゴルの過去と現在——20世紀を中心に』

日 時：2010年9月9日～10日（木、金）

会 場：モンゴル・日本人材開発センター多目的室、セミナー室（モンゴル国ウランバートル市）

9月1～2日にウランバートルでおこなわれた国際シンポジウム「第二次世界大戦のアジアでの終結、結果と教訓」に参加した後、私は、L. ハイサンダイ所長、D. シュルファー副所長をはじめとする、モンゴル科学アカデミー国際研究所のみなさんと一緒に、関口グローバル研究会（SGRA）と同研究所が共催する国際シンポジウムの開会にむけて、最後の準備に入った。2008年6月、2009年7月の国際会議につづき、今回は、SGRAのモンゴル・プロジェクトとして、3回目の日モ共催の国際会議となる。

要旨集の編集・印刷、ポスターのデザイン、会議用の文房具の購入、懇親会場の予約などを終えて、9月7日の午後、シュルファー所長と一緒に、モンゴル国営テレビ局MNBにて取材に応じた。取材があることを直前に知らされたので、テレビ局に着いた時に少し緊張した。スタジオは、カメラが3台同時に稼動していたが、目の前に撮影のカメラマンが居るわけではなく、ディレクターが別室でコントロールしていたため、わりにリラックスした雰囲気だった。今回の会議の目的、意義、参加者の発表内容、国際研究所の諸外国の学術機関・団体との学術交流、SGRAの事業などについて紹介した。同局の翌朝の番組で、15分ほど報道された。

9月8日午前、モンゴル・日本人材開発センターにて、同センター長森川秀夫氏に挨拶した。そして、私は、同センターのKh. ガルマーバザル総括主任、及び実行委員会のメンバーで、国際研究所の職員、教育大学の教員と一緒に、会場、同時通訳設備のセッティングなどを確認した。今年5月に、私はウランバートルで資料調査をした際、森川センター長、ガルマーバザル総括主任とも会談をおこなったことがあり、今回のシンポジウムの開催にあたって、両氏にたいへんお世話になったので、ここで感謝の意を表したい。

その後、大学時代からの友人で、永暉グループ（Winsway）のモンゴル支社の社長ゾーナサン氏に招待され、スフバルタル広場となり新しくオープンした日本料理店で昼食をした。内モンゴル愛徳弁護士事務所ウランバートル事務室



長のナラーン・オラーン氏、内モンゴル貿易会社の駐在員C氏、日系投資企業 Adamas Mining のウランバートル駐在員何（He）氏らも一緒だった。永暉グループは、モンゴル国の鉱山開発に投資している中国の大手企業の一つであり、中国の北方地域では、「煤老大（mei lao da）」（石炭の兄貴）と呼ばれており、本年10月に、香港の証券取引所で上場している。ゾーナサン氏は北京大学で地球物理学を専攻していたが、のちに法律に転向し、内モンゴル大学法学院長補佐となり、3年前に大学の職務を辞めて、永暉グループモンゴル支社の社長となった。何氏も北京大学出身の先輩で、20数年前に日本に留学し、日本の企業に就職し、日本の国籍を取得した。ナラーン・オラーン氏は北京の中国政法大学の出身で、大学時代の友達である。大学卒業後、互いに仕事が忙しく、ほとんど会うチャンスがなかったが、ウランバートルで再会できるとは思いも寄らなかった。近年、モンゴル国の鉱山開発などに投資している中国からの企業が大幅に増え、トラブルもしばしば起きているため、ウランバートルには、中国の弁護士事務所が何軒もある。大学時代の懐かしい思い出、最近モンゴルでおこなったいくつかの鉱山の入札などが、昼食時の話題だった。

午後4時すぎ、空港にて、今西淳子 SGRA 代表、一橋大学名誉教授田中克彦先生、東京大学の村田雄二郎教授、名古屋大学嶋田義仁教授、静岡大学楊海英教授、岩波書店馬場公彦さん、千葉大学児玉香菜子准教授、高橋甫さん、中村まり子さんなど日本からの参加者を迎えた。空港から車でホテルに行く途中、新たに建てられた日本人向けの高層マンションなどが紹介され、今西さんが「去年と比べ、高層建築がこんなに増えたのはびっくりした。モンゴルは本当に変化している」と感想を述べた。大変動を迎えている資源大国モンゴル国の変化は、さまざまな面に反映されている。実は、私が9月1日にウランバートルに到着したとき、予定より遅れたために予約したホテルがキャンセルされてしまった。急遽、その周辺の外国人むけの三つのホテルを回ったが、いずれも満室だった。最後は、巣窟——なじみの青年ホテルに行って、やっと宿泊できた。

国際研究所と SGRA の招待で、となりのホテルで夕食をした。その際、高橋さんは、人々に知られていない元横綱朝青龍のいくつかの感動的な話を紹介し、モンゴルに来た感想を述べた。この日の深夜、ソウル経由の望月誠さんと内モンゴル師範大学のタナーさんも予定通りにウランバートルに着いた。

9月9日午前、シンポジウムに参加する海外からの研究者は、ガンダン寺、モンゴル国立中央博物館を見学した。午後、第3回ウランバートル国際シンポジウム「日本・モンゴルの過去と現在——20世紀を中心に」の開会式が、モンゴル・日本人材開発センターの多目的室でおこなわれた。シンポジウムはモンゴル科学アカデミー国際研究所、関口グローバル研究会（SGRA）、モンゴル教育大学歴史・社会科学研究院の共催、在モンゴル日本大使館、モンゴル・日本人材開発センター、イフ・ザサグ大学国際関係学院、モンゴル国立テレビ局の後援、国際交流基金、渥美国際交流奨学財団、双日国際交流財団、守屋留学生交流協会の助成であった。

開会式では、モンゴル科学アカデミー総裁 B. エンフトゥブシン氏、在モンゴル日本大使城所卓雄氏、モンゴル教育大学長 B. ジャダムバ氏、関口グローバル研究会代表今西淳子氏、在日本モンゴル大使 R. ジグジッド氏が挨拶と祝辞を述べた。その後、モンゴル科学アカデミー国際研究所長 L. ハイサンダイ教授、一橋大学田中克彦名誉教授、ロシア連邦科学アカデミー東洋学研究所モンゴル研究室主任グライヴォロンスキー教授、東京大学村田雄二郎教授、モンゴル教育大学大学院長ナランツェツェグ教授が基調報告をおこなった。夕方、ウランバートルホテルで国際研究所と教育大学共同で歓迎宴会がおこなわれた。イフ・ザサグ大学の学生が、モンゴルの伝統的な歌と舞踊、馬頭琴の演



奏を披露した。

9月10日午前の会議は、東京外国語大学二木博史教授、モンゴル国立大学のドイツからの交換教授バルクマン氏が座長をつとめ、午後の会議は、東京外国語大学岡田和行教授、モンゴル科学アカデミー国際研究所副所長シュルファー教授が座長をつとめた。

夕方、SGRAの招待で、バンヤンゴルホテルで招待宴会をおこない、在モンゴル日本大使城所卓雄氏、参事官藁谷栄氏、書記官青山大輔氏が参加した。今西さんが司会をつとめ、城所大使、モンゴル教育大学長ジャダムバ氏、国際研究所長ハイサンダイ氏等が挨拶した。モンゴル教育大学の学生が歌を披露すると、「外国からきた研究者の歌も聞きたい」という要望があった。すると、田中先生が歌い始め、村田先生、嶋田先生、馬場さん達も加わって日本の歌を歌った。さらに、田中先生、高橋さん、バルクマンさん達はワルツも披露し、宴会は大変に盛り上がった。

もともと、日本・モンゴル関係をテーマとする今年のシンポジウムは、予算等の理由で小規模なものを予定していたが、準備を進めるうちに参加希望者が多くなった。会場には90人の席を用意したのだが、来場者は予定を超え、急遽、50余りの席を増やした。結局、2日間の会議に、モンゴル、日本、ドイツ、ロシア、中国、イギリスなどの国の研究者約150人が参加し、22本の論文発表があった。シンポジウムの発表詳細については、別稿に譲りたい。

9月11日は、秋空高くさわやかな天気で、会議の参加者は、ウランバートルから百キロ余り離れている中央県の「モンゴリー・ノーツ・トブチョー」リゾートを訪れた。途中、ある大きなオボーを通った際、皆、車から降りて、オボーを祭った。「モンゴリー・ノーツ・トブチョー」リゾートで、海外からの参加者は、遊牧民のゲル（テント）に案内された。その後、今西さんが馬に乗って草原を走った。田中先生、村田先生、馬場さん、中村さんたちも馬に乗った。「馬に乗った気持ちはどうでしたか？」と、ハイサンダイ所長が聞くと、田中先生は、「僕は馬が大好きだけど、馬は僕のことが好きではないから、しょうがないんだ」とモンゴル語で巧妙に答え、みな大笑いだった。40分ほどの騎馬体験の後、ゲル式のレストランに戻って、宴会をおこなった。モンゴルの伝統的料理ホルホグを賞味しながら、会議に参加した感想、モンゴルの鉱山開発、環境問題、相撲など、さまざまなことについて話した。3時すぎってから、当日北京経由でフフホトに行く今西さん、高橋さん、中村さんが空港にむかったが、宴会はしばらく続いた。

9月12～13日、田中先生、村田先生、馬場さん、楊海英さん、タナーさん、シュルファー所長と私は、私費で、ボグド・ハーン宮殿博物館、ダムバダルジャ寺、日本人死亡者慰霊碑、モンゴル粛清者記念館、チョイジン・ラマ寺、テレルジのチンギス・ハーン記念リゾート、ツォンジン＝ボルドグのチンギス・ハーン騎馬像（13世紀の金のむちの総合施設）、ウランバートル郊外の観光地などを見学した。

13日の午後、別のプロジェクトで、私は田中先生と一緒に、Eznis社の飛行機でチョイバルサンに飛んだ。そして、14日から20日まで、モンゴル国防科学研究所の協力を得て、車で、全長2000キロの大旅行をし、ノモンハンの戦場、ボイル湖、ドルノド県にある8世紀の佛塔、ヘンテイ県のモンゴル帝国時代の遺跡、及びオンドルハンにある林彪が乗ったトライデント飛行機が墜落した現場で調査をおこなった。

(文責：ボルジギン・フスレ 昭和女子大学非常勤講師)





Sekiguchi Global Research Association

関口グローバル研究会

活動報告 (2010年4月～2011年3月)

☆ SGRA フォーラムを開催

☆ SGRA レポートを発行

☆メルマガ【SGRA かわらばん】無料購読メールを配信 (購読者 1,130名)

■ 2010年7月3日 第38回 SGRA フォーラム「Better City, Better Life: 東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル」

(会場: 東京商工会議所 蓼科フォーラム 研修室A)

総合司会: 全 振煥 (鹿島建設)

【問題提起】東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル

高偉俊 (北九州市立大学)

【基調講演】「東アジアの都市・建築・住宅におけるエネルギー使用と生活の質」

木村建一 (国際人間環境研究所)

【発表1】(インドネシア)

「熱帯地域における都市の持続性とエネルギー研究: 持続性と省エネにおける低所得層の為の高層ビル開発の影響」

Mochamad Donny Koerniawan (バンドン大学)

【発表2】(フィリピン)「メガ都市マニラにおける環境的に持続可能な交通への挑戦」

Max Maquito (フィリピン・アジア太平洋大学)

【発表3】(ベトナム)「ベトナムの都市における省エネ対策」

Pham Van Quan (ハノイ建築大学)

【発表4】(台湾)「台湾のエネルギー消費、CO2 排出、及び交通事情」

葉文昌 (島根大学)

【発表5】(タイ)「タイにおけるエネルギーを選択から義務へ」

Supreedee Rittironk (タマサート大学)

【発表6】(韓国)「エネルギー・環境の視点からみた韓国の

都市におけるある1日の日常生活及びその変化」

郭 榮珠 (土木研究所)

【発表7】(中国)「エンジニアの視点から見る地球温暖化

及び都市インフラ建設について」

王 劍宏 (日本工営中央研究所)

【パネルディスカッション】

進行: 福田展淳 (北九州市立大学)

パネリスト: 上記講演者

→ SGRA レポート No.55



■ 2010年10月16日 第39回 SGRA フォーラム「ポスト社会主義時代における宗教の復興」

(会場：東京国際フォーラムガラス棟 G510 会議室)

総合司会：カバ 加藤 メレキ (筑波大学大学院博士課程、SGRA 研究員)

【発表1】「社会主義の宗教政策とポスト社会主義の世界」

エリック・シッケタンツ (東京大学 G-COE プログラム「死生学の展開と組織化」特任研究員、SGRA 研究員)

【発表2】「ロシア連邦におけるキリスト教の興隆」

井上まどか (清泉女子大学キリスト教文化研究所客員研究員)

【発表3】「中央アジアにおけるイスラームの復活」

ティムール・ダダバエフ (筑波大学人文社会科学部研究科准教授)

【発表4】「中国のキリスト教一土着化の諸段階とキリスト教の社会的機能」

ミラ・ゾンターク (立教大学文学部キリスト教学科准教授、SGRA 研究員)

【パネルディスカッション】

進行：島蘭 進 (東京大学文学部宗教学科教授、SGRA 顧問)

パネリスト：陳 継東 (武蔵野大学人間関係学部准教授)、上記講演者

→ SGRA レポート No.57 (編集中)



■ 2011年3月6日 第40回 SGRA フォーラム「東アジアの少子高齢化問題と福祉」

(会場：東京国際フォーラムガラス棟 G409 会議室)

総合司会：李 鋼哲 (北陸大学未来創造学部教授)

【基調講演】「日本における少子・高齢化問題」

田多英範 (流通経済大学経済学部教授)

【発表1】「誰がケアするのか—東アジアにおけるケア・レジームと中国—」

李 蓮花 (東京大学人文社会系研究科客員研究員)

【発表2】「韓国における社会的企業政策は少子高齢化政策として充分といえるか？」

羅 仁淑 (早稲田大学教育学部非常勤講師)

【パネルディスカッション】

進行：平川 均 (名古屋大学経済学研究科教授)

討論1：「シンガポールの『結婚せよ産めよ増やせよ』政策について」

シム チュン キャット (日本大学・日本女子大学非常勤講師)

討論2：「まだ『人』が『口』でないフィリピン」

F. マキト (フィリピン・アジア太平洋大学研究顧問)

パネリスト：上記講演者+討論者

→ SGRA レポート No.60 (編集中)



■ 渥美奨学生 2010 年度著作・論文・特許等リスト

【1995 年度奨学生】

■高 偉俊

1. 高偉俊・楊涌文・渡辺俊行「分散型エネルギー技術の選択手法及びその利用に関する研究」,『日本建築学会環境系論文集』75 巻第 650 号, pp. 389-397, 2010.
2. Hongbo Ren, Weijun Gao, Economic and environmental evaluation of micro CHP systems with different operating modes for residential buildings in Japan, *Energy and Buildings*, Volume 42, Issue 6, 853-861, 2010.
3. Yongzhi Gao, Weijun Gao, i Xua, Yutaka Tonooka, Estimation of Non-Residential Building Energy Consumption, *American J. of Engineering and Applied Sciences*, 3(3), 529-533, 2010.
4. Weijun Gao, Hongbo Ren, An Optimization Model Based Decision Support System for Distributed Energy Systems Planning, *International Journal of Innovative Computing, Information and Control*, Vol.7, No.5, 2651-2668, 2010.
5. Hongbo Ren, Weijun Gao, A MILP model for integrated plan and evaluation of distributed energy systems, *Applied Energy*, Volume 87, Issue 3, Pages 1001-1014, 2010.

■施 建明

1. SQ. Liu, J. Shi, J. Dong, SY. Wang (2010), "A Modified Penalty Function Method for Minimization with Inequality Constraints", *International Journal of Optimization: Theory, Methods and Applications*, 2, 1-20.
2. Xiujian Zhao and Jianming Shi (2010), "Evaluation of mutual funds using multi-dimensional information", *Frontiers of Computer Science in China (Springer)*, 4, 237-253.
3. T. Sakai, M. Daimaruya, J. Shi, I. Yamazaki, M. Aizu, K. Aizawa, M. Nagamatsu, M. Iwahara, Y. Inago, H. Okubo, A. Yamasaki and M. Yajima (2010), "Development of medium duty truck with engine mount system by air spring", *Noise Control Engineering Journal (USA)*, 58, 176-186.

【1996 年度奨学生】

■トレーデ、メラニー

1. 「永享五年 八幡縁起絵巻の『ライフ』とその『アフターライフ』」,『第 34 回国際日本文学研究集會會議録 書物としての可能性—日本文学がカタチになるまで—』, pp. 171-179, 人間文化研究機構・国文学研究資料, 2010.
2. 「永享五年 八幡縁起絵巻の『生涯』とその『余生』」, 佐野みどり・新川哲雄編『中世絵画のマトリクス』, pp. 220-247, 青簡舎, 2010.

【1997 年度奨学生】

■方 美麗

(論文)

1. 「中国語の使役表現から見た日本語—状態変化的使役文を中心に—」,『日本語形態』, pp. 231-254, ひつじ書房, 2010 年 7 月.
2. 「科学的且効果的な外国語教育法・教材論—“表現教授法”の教材理論をベースに」, 「言語・外国語教育研究シンポジウム」会議論文, pp. 147-176, 輔仁大学, 2010 年 11 月.

(著書)

3. 『Spoken Hokkien』(初級福健語教材と CD), SOAS 出版, 2010.
4. 『使える中国語』中級中国語教材, お茶の水女子大学中級教室, 2010 年 4 月.

■金 外淑

(学術論文)

1. 村上正人・松野俊夫・金外淑・三浦勝浩「線維筋痛症と否定的感情」,『心身医学会誌』50(12), pp. 1157-1163, 2010.
2. 村上正人・松野俊夫・三浦勝浩・金外淑「慢性疲労患者の心身医学的特徴とその対応」,『Journal of Integrated Medicine』20(11), pp. 850-853, 2010.

3. 村上正人・松野俊夫・三浦勝浩・金外淑「心療内科領域の繊維筋痛症—心身医学的視点からみた繊維筋痛症の疾患概念と病態—」, 『神経内科』 72(5), pp.480-485, 2010.

(雑誌論文)

4. 「子どもの認知行動療法入門 生活習慣改善への支援と認知行動療法」, 『児童心理』, pp.98-105, 2010.

5. 「行動療法コロキウム」, 『行動療法研究誌』 36 (3), pp.233-234, 2010.

■片桐カノックワン、ラオハブラナキッド

1. 「海外の協働現場での日本人教師の適応過程の考察—タイの大学における適応オプション—」, 『世界日本語教育大会 2010 台湾大会論文集』 世界日本語教育大会 2010 (片桐準二、池谷清美、中山英治との共同研究), 2010.

■李 恩民

1. 「日中間の歴史和解は可能か」, 『境界研究』 No.1, pp.97-112, 2010年10月.

■ウィリアムズ、ダンカン

(Co-editor)

1. *Issei Buddhism in the Americas*. Urbana-Champaign, IL: Asian American Studies Series, University of Illinois Press, 2010. 186 pp. Author

2. "The Purple Robe Incident and the Formation of the Early Modern Sôtô Zen Institution." *Japanese Journal of Religious Studies* (Vol. 36, No. 1, Spring 2009): 27-43.

3. "Haiburiddo na Nihon to gurôbaru jidai ni okeru shûkyô [Hybrid Japan and Religion in a Global Age]." In *Henkakuki no Ajia to Shûkyô*. Kokusai Shûkyô Kenkyûjo, ed. Tokyo: Kokusai Shûkyô Kenkyûjo, 2010: 98-130.

■張 紹敏

1. Huang P., Qi, Y., Xu, YS., Liu, J., Liao, D., Zhang, SS., and Zhang, C. Serum cytokine alteration is associated with optic neuropathy in human primary open angle glaucoma. *J of Glaucoma* 19(5):324-30, 2010.

2. Huang P., Xu, Y., Wei, R., Li, H., Tang, Y., Liu, J., Zhang, SS., and Zhang C. Efficacy of Tetrandrine on lowering intraocular pressure in animal model with ocular hypertension. *J of Glaucoma* [Epub ahead of print], 2010.

3. Liu X., Yang JM., Zhang SS., Liu XY., and Liu DX. Induction of cell cycle arrest at G1 and S phases and cAMP-dependent differentiation in C6 glioma by low concentration of cycloheximide. *BMC Cancer* 10(1):684, 2010.

4. Pan Y., Berg, MJ., Gorden Videen G., Zhang SS., Noh H., Cao H., and Chang RK. Measuring two-dimensional light-scattering patterns to classify living cells label-free in a flow cytometer. *Flow Cytometry A* 79(4):284-92, 2011.

【1998年度奨学生】

■何 祖源

1. Weiwen Zou, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "One-laser-based generation/detection of Brillouin dynamic grating and its application to distributed discrimination of strain and temperature," *OSA Optics Express*, Vol. 19, No. 3, pp. 2363-2370, Jan. 2011.

2. Huilian Ma, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Reduction of backscattering induced noise by carrier suppression in waveguide-type optical ring resonator gyro," *IEEE/OSA Journal of Lightwave Technology*, Vol. 29, No. 1, pp. 85-90, Jan. 2011.

3. Yosuke Mizuno, Weiwen Zou, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Operation of Brillouin optical correlation-domain reflectometry: Theoretical analysis and experimental validation," *IEEE/OSA Journal of Lightwave Technology*, Vol.28, No. 22, pp. 3300-3306, Nov. 2010.

4. Weiwen Zou, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Single-end-access correlation-domain distributed fiber-optic sensor based on stimulated Brillouin scattering," *IEEE/OSA Journal of Lightwave Technology*, Vol. 28, Issue 18, pp. 2736 - 2742, Sept. 2010

5. Weiwen Zou, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, "Demonstration of Brillouin distributed discrimination of strain and temperature based on a polarization-maintaining optical fiber," *IEEE Photonics Technology Letters*, Vol. 22, No. 8, pp. 526-528, Apr. 2010.

■李 周浩

1. K. Morioka, S. Kovacs, J.-H. Lee, P. Korondi, "A cooperative object tracking system with fuzzy-based adaptive camera

selection”, International Journal on Smart Sensing and Intelligent Systems, Vol. 3, No. 3, pp.338-358, 2010.

2. 李周浩（松原仁，野田五十樹，松野文俊，稲見昌彦，大須賀公一編）『ロボット情報学ハンドブック』，ナノオクトニクス・エナジー出版局，pp792-797, 2010

（特許）

3. 画像投影装置、画像処理装置、画像処理方法、画像処理プログラム、及び、画像データ、特願 2010-230520、出願日 2010/10/13

■孫 艶萍

1. Y Sun, B O' Sullivan, R Walvick, A Reno, L Shi, D Baker, J Mansour, M S Albert, Using Hyperpolarized ³He MRI to Evaluate Therapeutics in Cystic Fibrosis Patients, Proceedings of the Eighteenth Annual Meeting of the International Society of Magnetic Resonance in Medicine, May, 2010.

2. Y Sun, L Shi, G Jin, A Reno, S Zhalehdoust-Sani, SJ Krinzman, J Liu, KR Lutchen, JM Madison, MS Albert, Assessing the Persistence of Ventilation Defects in Asthmatics at Baseline and Following Methacholine Challenge Using Hyperpolarized ³He MRI, Proceedings of the Eighteenth Annual Meeting of the International Society of Magnetic Resonance in Medicine, May, 2010.

【1999 年度奨学生】

■李 鋼哲

（共著）

1. 「東アジア経済統合はどこまで進んでいるのか」，北陸大学東アジア総合研究所編『東アジアの今を知る講座』第2章 pp.21-46，北陸大学東アジア総合研究所，2010年12月。

（新聞、雑誌記事）

2. 「北朝鮮のデノミ」，『北陸中日新聞』2010年4月12日「考論」。

3. 「東北アジア地域協力とコリアンパワー」，『朝鮮商工新聞』2010年8月17日（第1面）。

4. 「豆満江開発に新しい風」，『朝鮮商工新聞』2010年9月21日（第1面）。

■ブ ティ ミン チー

1. 「ベトナムにおける人間開発と人権問題」，『学際的法学的なアプローチからの人権』，pp.313-351，社会科学出版会社，2010。

■楊 接期

1. Yang, J. C., Chen, C. H., & Jeng, M. C. (2010). Integrating Video-Capture Virtual Reality Technology into a Physically Interactive Learning Environment for English Learning. Computers & Education, 55(3), 1346-1356.

2. Yang, J. C., & Chen, S. Y. (2010). Effects of Gender Differences and Spatial Abilities within a Digital Pentominoes Game. Computers & Education, 55(3), 1220-1233.

3. Yang, J. C., Chang, C. L., Lin, Y. L., & Shih, M. J. A. (2010). A Study of the POS Keyword Caption Effect on Listening Comprehension. In Proceedings of the 18th International Conference on Computers in Education (ICCE 2010). Putrajaya, Malaysia. 708-712.

4. Wu, Y. C., Yang, J. C., & Lee Y. S. (2010). Chinese Word Segmentation with Conditional Support Vector Inspired Markov Models. In Proceedings of the CIPS-SIGHAN Joint Conference on Chinese Language Processing (CLP 2010). Beijing, China. 228-233.

5. Shih, M. J. A., & Yang, J. C. (2010). A Perspective on Listening Comprehension: How ICT Enable a Chinese as a Foreign Language (CFL) Learner to Achieve Learning Metacognition. In Proceedings of the 10th IEEE International Conference on Advanced Learning Technologies (ICALT 2010). Sousse, Tunisia. 55-57.

■葉 文昌

1. Wenchang Yeh, Hsinchi Chen, and Hsinyi Chiang, “Pulse-DC Reactive Sputtering Deposition of SiNx:H film and Its Application to Passivation and Anti-reflection Film of Si Solar Cells” Proceedings of 17th International Workshop on Active-Matrix Flatpanel Displays (AMFPD), pp.235-238, 2009.

【2000 年度奨学生】

■鄭 成春

- 1.『日本と EU の国際環境協力戦略と示唆点』, 対外経済政策研究院, 2010 年 12 月.

■高 熙卓

(論文/韓国語)

- 1.「戦後日本の政治学アイデンティティ論研究—科学性、自律性、主体性をめぐる議論を中心に」, 現代日本学会編『日本研究論叢』No.31, 2010 年 6 月.
- 2.「『南京大虐殺事件』問題をめぐる記憶の政治と国際政治学的なディレマ」, 高麗大学日本研究センター編『日本研究』No.15, 2011 年 2 月.
- 3.「近代韓国における社会進化論の導入・変容に見られる政治的認識構造—国家独立と文明開化の間で」, 大韓政治学会編『大韓政治学会報』Vol.18-3, 2011 年 2 月.
(共著/日本語)
- 4.「伊藤仁斎の『天下公共の道』における公共的な生と倫理」, 片岡龍・金泰昌編『伊藤仁斎—天下公共の道を講究した文人学者』(公共する人間 1), 東京大学出版会, 2011 年 1 月.

【2001 年度奨学生】

■ボルジギン、ブレンサイン

- 1.「旅蒙商（一九三九年）」, 『世界史史料』第四巻, 岩波書店, 2010 年 11 月.
- 2.「私墾（乾隆十四年九月二日）」, 『世界史史料』第四巻, 岩波書店, 2010 年 11 月.

■範 建亭

(論文)

- 1.「中国進出企業の経営現地化と現地側の評価—日米欧企業の比較による検証—」, 『経済系』第 246 集, 関東学院大学, 2011 年 1 月.
(著書)
- 2.『中国建設産業の市場構造、市場成果と競争政策』, 上海財経大学出版社, 2010 年 12 月.

■ユ ティ ルイン

1. Polymorphisms of the formylpeptide receptor gene (FPR1) and susceptibility to stomach cancer in 1531 consecutive autopsy cases. Otani T, Ikeda S, Lwin H, Arai T, Muramatsu M, Sawabe M. Biochem Biophys Res Commun. 2011 Feb 18;405(3):356-61. Epub 2011 Jan 7.
2. Association of a cyclin-dependent kinase 5 regulatory subunit-associated protein 1-like 1 (CDKAL1) polymorphism with elevated hemoglobin A_{1c} levels and the prevalence of metabolic syndrome in Japanese men: interaction with dietary energy intake. Miyaki K, Oo T, Song Y, Lwin H, Tomita Y, Hoshino H, Suzuki N, Muramatsu M. Am J Epidemiol. 2010 Nov 1;172(9):985-91. Epub 2010 Sep 16.
3. Miyaki et al. Respond to "Gene x Lifestyle Interactions" Miyaki K, Oo T, Song Y, Lwin H, Tomita Y, Hoshino H, Suzuki N, Muramatsu M. Am J Epidemiol. 2010 Sep 16. [Epub ahead of print].

■奇 錦峰

1. Lin Mei, Qi Jin-feng, Wang Yong-hui, et al. Effect of Three Kinds of Tea Beverages on Intestinal First-pass Effect and Liver Cyp3a, Cyp2e1 Activities in Mice[J]. Chin J Clin Pharmacol Ther, 2011, 16(1): 5-12.
2. Li Xiang-ling, Qi Jin-feng, Lin Mei, et al. Effect of Aqueous Extract of Bitter Melon on Liver Cyp3a and intestinal P-glycoprotein in Mice[J]. Traditional Chinese Drug Research&Clinical Pharmacology, 2010, 21(6): 16-19.

■スリ スマンティヨ、ヨサファット テトオコ

1. Yashon O. Ouma, Ryutarō Tateishi, and J. Tetuko Sri Sumantyo, 'Urban features recognition and extraction from very-high resolution multispectral satellite imagery: a micro-macro texture determination and integration framework' for IET Image

Processing, Vol. 4, No. 4, pp. 235-254, August 2010.

2. M. Mahmudur Rahman; Josaphat Tetuko Sri Sumantyo; M. Fouad Sadek, "Microwave and optical image fusion for surface and sub-surface feature mapping in Eastern Sahara", International Journal of Remote Sensing, Volume31, pages 5465 - 5480, Issue 20 June 2010 (Taylor and Francis).

3. Yohandri, V. Wissan, I. Firmansyah, P. Rizki Akbar, J.T. Sri Sumantyo, and H. Kuze, "Development of Circularly Polarized Array Antenna for Synthetic Aperture Radar Sensor Installed on UAV," Progress in Electromagnetics Research C, Vol. 19, pp. 119-133, January 2011.

4. M.M. Rahman and J.T. Sri Sumantyo, "Mapping tropical forest cover and deforestation using synthetic aperture radar (SAR) images," Applied Geomatics, Vol. 2, pp. 113-121, 2010 (Springer).

5. Merna Baharuddin, Victor Wissan, J. T. Sri Sumantyo, and Hiroaki Kuze, "Elliptical microstrip antenna for circularly polarized synthetic aperture radar," International Journal of Electronics and Communications (Archiv fuer Elektronik und Uebertragungstechnik, AEUE), Vol. 65, No. 1, pp. 62-67, January 2011 (Elsevier).

6. J.T. Sri Sumantyo, M. Shimada, P.P. Mathieu, and H.Z. Abidin, "Long-term consecutive DInSAR for volume change estimation of land deformation," IEEE Transactions on Geoscience and Remote Sensing, March 2011 (Accepted).

【2002 年度奨学生】

■ムコパディヤーヤ、ランジャナ

1. 「社会参加と仏教」, 末木文美士他編『現代仏教の可能性』(新アジア仏教史 15 日本 V) 第 5 章, 俊成出版社, 2011 年 3 月.

■イミテ、アブリズ

1. RENAGUL Abdurahman, ABLIZ Yimit, Optical Waveguide Device and Its Gas Sensing Properties for Xylene, Instrument Technique and Sensor, 2010,3,6-8.

2. MAMUT Mariya, MAHMUT Mamtimin, MAHMUT Melikizat, YIMIT Abliz, RAHMAN Adalet, Study of Optical Waveguide Sensing Element for Nitrogen Dioxide Detection, Imaging Science and Photochemistry, 2010, 28(2) 104-110.

3. ABDUKAYUM Abdukader, SAWUT Rukeya, YIMIT Abliz, K⁺ exchanged planar optical waveguide gas sensor for detection of acetone vapor, Transducer and Microsystem Technologies, 2010,29(1):105-107.

4. Abdukader Abdukayum, Abliz Yimit, Detection of H₂S Gas by Optical Waveguide Sensor Based on Thionine Doped Polyvinyl Alcohol Film, CHINESE JOURNAL OF APPLIED CHEMISTRY, 2010, 27(08): 960-964.

5. Dilbar Ahmat, Erkin Tursun, Xawkat Abliz, Abliz Yimit, Fabrication of Composite Optical Waveguides Based on Thin Films Consisted of Iron Phosphate Nanoparticles and Their Applications as Ammonia Gas Sensor, CHINESE JOURNAL OF APPLIED CHEMISTRY, 2010, 27(08): 965-969.

6. Nuriya Ibrahim, Hayrensa Ablat, Razak Kadir, Abliz Yimit, Study on SnO₂-La₂O₃ composite film/glass optical waveguide sensor and gas sensing property, Transducer and Microsystem Technologies, 2010,29 (8) 12-14.

7. Sadatgul Mahsut, Razak Kadir, Abliz Yimit, SnO₂ Thin Film Optical Waveguide Sensor for Xylene Gas Detection, Environmental Chemistry, 2010, 29 (4) 726-728.

8. Sadatgul Mahsut, Hayrensa Ablat, Adalat Abdurahman, Abliz Yimit, Fuchsin Basic Thin Film Optical Waveguide Sensor for Sulfur Dioxide Detection, CHEMICAL SENSORS, 2010,30 (2) 47-51.

9. GULGINA Mamtimin, HAYRENSA Ablat, ABLIZ Yimit, In₂O₃ Thin Film/ Tin-diffused Glass Optical Waveguide Sensor and Its Gas Sensitive Property, Opto- Electronic Engineering, 2011,38(1)107-111.

10. Gulgina Mamtimin, Hayrensa Ablat, Abliz Yimit, Progresses on Determination of Dioxin Precursor-chlorinated benzene compounds, ENVIRONMENTAL ENGINEERING, 2010,28:268-271.

11. Miriguli Mohemaiti, Abliz Yimit, Yunusjan Turahun, Study on Zinc oxide thin film/Tin-diffused Optical Waveguide Sensor for Chlorobenzene Gas Detection, Chinese Journal of Analytical Chemistry, 2011,39(1)120-124.

【2003 年度奨学生】

■フスレ

1. 「第二次世界大戦の終結におけるモンゴル人民共和国の中国に対する援助」, 『第二次世界大戦のアジアでの終結、結果と教訓』, pp.96-10, ウランバートル (モンゴル語), 2010.

- 2.『中国共産党・国民党の対内モンゴル政策（一九四五～四九年）—民族主義運動と国家建設との相克』, 風響社, 2011年2月.
- 3.「明治時代における日本人の外モンゴル調査」, 『学苑』 845号, pp.112-121, 昭和女子大学近代文化研究所, 2011年3月.
4. “Japanese Visited Outer Mongolia in Early 20th Century”, The Third International Symposium in Ulaanbaatar “Mongolia – Japan in the Past and the Present: Focusing on the 20 th Century”, 2010.9.9-10.

■林 少陽

- 1.「批判的現代主義文學或現代主義的現實主義：以劉以鬯的文學批評為中心」, 梁秉鈞・譚國根等編『劉以鬯與香港現代主義』, pp. 120-132, 香港公開大學出版社, 2010年7月.
- 2.「“勢”或“時勢”：一個重審現代與時間觀關係的概念」, 『開放時代』 2010年8月號, pp. 21-43, 廣州市中國社會科學院, 2010.
- 3.「租界と上海文学の百年」, 『すばる』 2010年9月号, pp. 175-186, 集英社, 2010.
- 4.「早期北島の詩と「歴史」：思想史・文学史的視点において」, 『中国：社会と文化』 Vol.25 (2010年9月号), pp. 239-264, 中国社会文化學會, 2010.
- 5.「西脇順三郎の詩論：日本文脈における現代思想から」, 『現代詩手帖』 2011年2月号, pp.72-79, 思潮社, 2011.
6. “Romanticism History and Aestheticized Politics: Yasuda Yojuro and the Discourse of ‘Overcoming the Modern’ in Wartime Japan” in *Studies of Intellectual History* 13 (March 2011) 173-214. (Journal published by the University of Tokyo).

■朴 貞姫

- 1.「日中起点表現におけるV Pの意味的制約—認知意味論的視点から」, 『日本語動詞及び関連研究』（日本語学研究シリーズ）, 外研社, 2010年1月.
- 2.「中韓（朝）存在構文における結果位置表現の対照」, 『日本言語文化研究』（中朝韓日文化比較研究シリーズ）, 延辺大学出版社, 2010年6月.

■ティシ、マリアエレナ

1. “Il giapponese attraverso la letteratura per l’ infanzia - Esperienze di insegnamento nelle Università italiane”, *Atti del Convegno Internazionale ‘Nihon JP’*, Cesena, 4 giugno 2010, CLUEB, Bologna, pp.193-201.

■臧 俐

(論文)

- 1.「1990年代以降の学校教育改革の一考察—審議会答申等の分析を中心に」, 『東海大学短期大学部紀要』 第44号, pp.9-14, 東海大学出版会, 2011年3月.

(教科書)

2. 共著『子どもと教師のための教育原理』, pp.78-85, 保育出版社, 2010年4月.
3. 改訂版・共著『現代日本の教育を考える—理念と現実—』, pp.109-116, (株)北樹出版, 2010年4月.

【2004年度奨学生】

■アンボン、ベリル・ニヤメチェ

1. Rawat R, Cohen TV, Ampong B, Francia D, Pons A, Hoffman EP, Nagaraju K. Inflammasome Up-Regulation and Activation in Dysferlin-Deficient Skeletal Muscle. *American Journal Of Pathology*, 2010; DOI: 10.2353/ajpath.2010.090058.

【2005年度奨学生】

■包 聯群

- 1.「ドルブットモンゴル族コミュニティー言語」, 徐大明編『社会言語学実験教程』, pp.106-111, 北京大学出版社, 2010年6月. (著書・共著)
- 2.『言語接触と言語変異—中国黒龍江省ドルブットモンゴル族コミュニティー言語を事例として』 p. 460, 現代図書, 2011年2月.
3. 徐大明著・包聯群訳「中国社会言語学の現状と展望」, 原聖編『言語的多様性という視座』（ことばと社会 別冊3）, pp.147-159, 三元社, 2010年10月.

■韓 京子

1. 「近松の浄瑠璃にあらわれた幕府批判」, 『日本研究』2010年6月, 韓国外国語大学日本研究所, 2010年6月.
2. 「戦時下の文楽に関する考察」, 『日本思想』2010年6月, 韓国日本思想史学会, 2010年6月.
3. 「近松の浄瑠璃にあらわれた日本優越意識」, 『国際日本学』2010年9月, pp.151-163, 法政大学国際日本学研究中心, 2010年9月.

■藍 弘岳

1. 「『武国』に抵抗する江戸思想—伊藤仁斎の「文」と「王道」言説をめぐって—」, 片岡龍・金泰昌編『伊藤仁斎—天下公共の道を講究した文文学者』(公共する人間1), 東京大学出版会, 2011.

■王 雪萍

(論文)

1. 桜本光・吉岡完治・和気洋子・巖網林・加茂具樹・鄭雨宗・王雪萍・吉武惇二・平湯直子「中国瀋陽市における小規模植林CDMの概要」, 『三田商学研究』第53巻第2号(2010年6月号), pp.137-148, 慶應義塾大学商学部, 2010.
 2. 「中華人民共和国初期の留学生・華僑帰国促進政策—中国の対日・対米二国間交渉過程分析を通じて」, 『中国21』(愛知大学現代中国学会) Vol.33, pp.155-178, 2010年7月.
 3. 苗丹国・王雪萍「1978年以来中国人留学日本状況研究」(中国語), 廖赤陽主編李恩民・王雪萍副主編『大潮涌動: 改革開放与留学日本』, pp.206-231, 社会科学文献出版社(中国), 2010年8月.
 4. 「改革開放後国家公派留学政策的轉型」(中国語), 廖赤陽主編李恩民・王雪萍副主編『大潮涌動: 改革開放与留学日本』, pp.32-48, 社会科学文献出版社(中国), 2010年8月.
 5. 「中国の歴史教育と対外観(1949—2005)—『教学大綱』と歴史教科書を中心に」, 添谷芳秀編著『現代中国外交の六十年—変化と持続』(慶應義塾大学東アジア研究所現代中国研究シリーズ), pp.51-69, 慶應義塾大学出版会, 2011年3月.
- (著書)
6. 廖赤陽主編李恩民・王雪萍副主編『大潮涌動: 改革開放与留学日本』(中国語), 社会科学文献出版社(中国), 2010年8月.

■王 健欽

1. Bosch-Bayard J, Riera-Diaz J, Biscay-Lirio R, Wong KFK, Galka A, Yamashita O, Sadato N, Kawashima R, Aubert-Vazquez E, Rodriguez-Rojas R, Valdes-Sosa P, Miwakeichi F, Ozaki T (2010) "Spatio-temporal correlations from fMRI time series based on the NN-ARx model", *Journal of Integrative Neuroscience* 9(4) pp. 381-406.

■趙 長祥

1. 王琪、趙長祥等 (2010), 徐祥民主編, 海水利用及产业化政策研究, 海洋法律、社会和管理. pp. 238-301, 海洋出版社. (中文)
2. Zhao Changxiang; Tong Chunfen; Wang Qi(2010) Heaven Can't Wait: Establishing Integrated Coastal Zone Management System Based on Ecosystem Theory over Shandong Peninsula, *Proceedings of 2010 International Public Management Conference(6th)*, pp.229-236. UESTC Press. (In English)
3. 「転型期における中国家電企業の成長モデル分析: ハイアール集団 (Haier Group) とハイセンス集団 (Hisense Group)」, 富士ゼロックス小林節太郎記念ファンド, 2010. (日本語)

【2006年度奨学生】

■シム チュンキャット

1. 「高校教育における日本とシンガポールのメリトクラシー」, 山内乾史・原清治編著『論集: 日本の学力問題—学力論の変遷』第23章, 日本図書センター, 2010年5月.

【2007年度奨学生】

■金 玟淑

1. 中村琢巳・金玟淑・益田兼房「京都市内の国宝・重要文化財建造物のGISデータベース作成と復旧工事に着目した災害脆弱性評価」, 『歴史都市防災論文集』Vol.4, pp.37-44, 立命館大学歴史都市防災研究センター, 2010年7月.
2. 金玟淑・益田兼房・後藤洋三「ダフニ修道院とオリンピア遺跡における災害復旧工事の理念と手法」, 『歴史都市防災論文集』

Vol.4, pp.241-248, 立命館大学歴史都市防災研究センター, 2010年7月.

3. 杉本歌子・金玟淑・益田兼房「杉本家における防災の備え」, 『歴史都市防災論文集』Vol.4, pp.325-332, 立命館大学歴史都市防災研究センター, 2010年7月.

4. Takanori Yonezawa, Takeshi Nakagawa and Minsuk Kim, A Study for the Geographic Condition of Shrines in Tsushima, Proceedings of the 8th ISAIA, Nov. 2010, pp.414-418.

5. Minsuk Kim, Heritage Values of Disaster-affected Cultural Properties in Japan and Korea, Proceedings of the 8th ISAIA, Nov. 2010, pp.571-576.

6. Reiko Kubota, Minsuk Kim, A Study on the issue of UNESCO World Cultural Heritage management in Japan and Korea, Proceedings of the 8th ISAIA, Nov. 2010, pp.577-582.

7. 「文化財建造物の災害脆弱性と被災文化財の価値評価」, 『韓国建築歴史学会 2010年度秋季学術発表大会論文集』, pp. 229-232, 韓国建築歴史学会, 2010年11月.

■李 垠庚

1. 「近代日本の女性キリスト者と生活—羽仁もと子（1873～1957）の言説を中心として」, 『日本学研究』30, 2010年5月.

2. 「戦後日本女性の対外認識—日本YWCAの『女性新聞』1946～1950）の記事を中心として」, 『日本歴史研究』31, 2010年6月.

3. 「戦後日本男性たちの女性解放認識—占領期の『婦人公論』の言説を中心として」, 『日本研究』15, 2011年2月.

【2008年度奨学生】

■馮 凱

1. FENG, K., and KANEKO, S., 2010, "Parametric Studies on Static Performance and Nonlinear Instability of Bump-Type Foil Bearings", Journal of System Design and Dynamics, JSME, Vol.4, No.6, pp.871-883.

2. FENG, K., and KANEKO, S., 2010, "Analytical Model of Bump-Type Foil Bearings Using A Link-Spring Structure and A Finite Element Shell Model," ASME Journal of Tribology, 132(2), 021706 (11 pages).

3. 馮凱・金子成彦「バンプ型フォイル軸受の静特性と安定性に対するフォイル設計変数の影響」, 『日本機械学会論文集C編』76巻, pp.1249-1257, 2010.

■洪 ユンシン

1. 「韓国における沖縄学の現在—ユウグ（ゆうぐう）とリュウキョウ（りゅうきゅう）の間」, 富山一郎・森宣雄編著『現代沖縄の歴史経験—希望、あるいは未決性について』（日本学叢書3）, pp87-129, 青弓社, 2010.

2. 「括弧付きの言葉たちへ—宮古島、その「異質」の沖縄戦からの問いかけ」, 大越愛子・井桁碧編著『現代フェミニズムのエッセイクス』（戦後・暴力・ジェンダー3）第7章, pp148-163, 青弓社, 2010.

【2009年度奨学生】

■イエ チョウ トウ

(Journal Paper)

1. Ye Kyaw Thu, Sai Aung Win Maung and Yoshiyori URANO, "Direct Keyboard Mapping (DKM) Layout for Myanmar Fingerspelling Text Input (Study with Developed Fingerspelling Font "mmfingerspelling.ttf")", GITS/GITI Research Bulletin 2009-2010, Waseda University, pp. 127-135 (published on July 31, 2010).

2. Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "PP_Clickwheel: Positional Prediction Khmer Text Input Interface with Clickwheel for Small Mobile Devices", The Journal of the Institute of Image Electronics Engineers of Japan (IEEEJ), Vol.39, No.5, 2010, pp. 654-662 (published on September, 2010).

(International Conference)

3. Ye Kyaw Thu, Sai Aung Win Maung and Yoshiyori URANO, "Direct Keyboard Mapping (DKM) for Myanmar Fingerspelling Text Input", Proceedings of the IADIS International Conferences, Interfaces and Human Computer Interaction 2010 and Game and Entertainment Technologies 2010, July 28-30, 2010, Freiburg, Germany, pp. 267-275.

(Doctoral Student Conference)

4. Ye Kyaw Thu, "Development of Fingerspelling Font for Myanmar Deaf Education", Proceedings of the 11th APRU Doctoral

Students Conference, July 12~16, 2010, Jakarta, Indonesia, (CD-ROM).

(Article)

5. Ye Kyaw Thu, "Prototyping with "Pictures and Mobile Devices" (PicMobi): A Rapid Prototyping Technique for Mobile User Interfaces", The Transactions of the Asiatic Society of Japan, Fifth series, volume 2, 2010, pp. 129-136.

■朱 琳

1. 「二つの中国認識—吉野作造と内藤湖南」, 『吉野作造研究』7 (第2回「吉野作造研究賞」優秀賞受賞), pp. 15-29, 吉野作造記念館, 2010年11月.
2. 「梁啓超の『文明』認識およびその変遷」, 『東アジア文化交渉研究』4, pp. 193-212, 関西大学文化交渉学教育研究拠点, 2011年3月.
3. 「内藤湖南の中国絵画論」, 『湖南』31, pp. 22-30, 内藤湖南先生顕彰会, 2011年3月.
4. 「中国史像と政治構想—内藤湖南の場合」(一)～(三), 『国家学会雑誌』第123巻9・10号、第123巻11・12号、第124巻1・2号, 国家学会. ※ 続く

【2010年度奨学生】

■チャイトンディー・プラチャッポン

1. 「後代パーリ仏教の世界に与えた Lokappāḍḍipakasāra の影響—Cakkavāḍḍīpanī, Lokasaṅḍḍhānajatatanagaṅḍḍhī における Lokappāḍḍipakasāra の引用を中心として—」, 『印度學佛教學研究』第59巻2号, pp. 173-176, 日本印度学仏教学会, 2011年3月.

■崔 禎恩

1. 崔禎恩・北田正弘 「高麗遊児書像紋鏡の金属組織と不純物」, 『日本金属学会誌』第74巻第6号, pp.365-369, 日本金属学会, 2010.

■キャアコップチャイ・スィラサッナン

1. 「『だろ』の意味・用法—小説における分析」, 『日本語／日本語教育研究』第1号, pp.157-176, 日本語／日本語教育研究会, 2010年5月.

■李 賢凡

1. Fabrication of Al Matrix Composite Reinforced with Submicrometer-sized Al₂O₃ Particles Formed by Combustion Reaction between HEMM Al and V₂O₅ Composite Particles during Sintering K.D. Woo, J.H. Kim, E.P. Kwon, M.S. Moon, H.B. Lee, T. Sato, Z.G. Liu Met. Mater. Int., Vol. 16, No 2 (2010) 213-218.
2. Fabrication of (Al₂O₃-Al₃Nb)/Al Composite Materials by In-Situ Reaction Using MA Processed Al/Nb₂O₅ Powder H.B. Lee, H. Tezuka, E. Kobayashi, T. Sato, K.D. Woo, Materials Science Forum, Vols.654-656, (2010), 2931-2934.
3. Fabrication of Biocompatible β-Ti-Nb-Sn Alloy by Pulsed Current Activated Sintering Using High Energy Ball Milled Powder A.N. Omran, K.D. Woo, E.P. Kwon, N.A. Barakat, H.B. Lee, S.W. Kim, D.L. Zhang Science of Advanced Materials Vol. 1 (2009) 205-211.

■李 軍

1. 「中国における漢字教育の特質を探る—学習者の意識調査と『字理識字』指導法に即して」, 『解釈』第56巻 2010年5・6月号, pp. 18-26, 解釈学会, 2010.
2. 「『漢字樹』を用いた新しい漢字指導の試み—日中漢字文化の特質に着目して」, 『早稲田教育評論』第25巻, pp. 127-145, 早稲田大学教育総合研究所, 2011年3月.
3. 「日中漢字指導法の比較研究—形声文字指導を中心に—」, 『漢字・漢語・漢文の教育と指導』(早稲田教育叢書 第30巻), pp. 54-74, 学文社, 2011年3月.
4. 『大東世話』「捷悟」篇注釈稿(共著)(2011), 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第21号, pp.26-27, 早稲田大学大学院教育学研究科, 2011年3月.

■盧 亮

(Publications)

1. L. Lu, T. Hattori, N. Hayashizaki, CW operation on APF-IH linac as a heavy ion implanter, Nuclear Instruments and Methods in Physics Research A, 622 (2010) 485491.
2. L. Lu, T. Hattori, N. Hayashizaki, DESIGN AND SIMULATION OF A NEW HYBRID SINGLE CAVITY TYPE LINAC INSTORED TWO TYPE ACCELERATION STRUCTURE, Submitted to Nuclear Instruments and Methods in Physics Research A.
3. L. Lu, T. Hattori, N. Hayashizaki, DESIGN AND SIMULATION OF C6+ HSC LINAC FOR CANCER THERAPY WITH DPIS, Submitted to Review of Scientific Instruments.
(International Conferences (Poster))
4. L. Lu, T. Hattori, N. Hayashizaki, DESIGN AND SIMULATION OF C6+ HYBRID SINGLE CAVITY LINAC FOR CANCER THERAPY, The First International Particle Accelerator Conference, Kyoto, Japan, May 24-28 2010, IPAC' 10 MOPD045, P786-788.
5. T. Ishibashi, N. Hayashizaki, L. Lu T. Hattori, ACCELERATION TEST of TWO-BEAM TYPE IH-RFQ LINAC, The First International Particle Accelerator Conference, Kyoto, Japan, May 24-28 2010, IPAC' 10 THPEC057.
(Poster)
6. L. LU, T. Hattori, T. Hayashizaki, Design and Fabrication of C6+ HSC Linac for Cancer Therapy with DPIS, 6th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan And 33th Linear Accelerator Meeting in Japan, THPS038, Himeji, Hyoko, Sep. 4 ~ 6 2010.
(特許)
7. 高周波空洞 (出願番号: 特願 2010-271117), 発明者: 服部俊幸 (東京工業大学)・Lu Liang (東京工業大学)・林崎規託 (東京工業大学)・山内英明 (タイム株式会社).

■マギッド, イヴゲニ

1. Evgeni Magid, Takashi Tsubouchi. Static Balance for Rescue Robot Navigation : Discretizing Rotational Motion within Random Step Environment. Lecture Notes In Artificial Intelligence, Vol. 6472, Proceedings of International Conference on Simulation, Modeling, and Programming for Autonomous Robot (SIMPAN-2010), Darmstadt, Germany, November 2010, pp. 423-435.
2. Evgeni Magid, Takashi Tsubouchi, Eiji Koyanagi, Tomoaki Yoshida. Static Balance for Rescue Robot Navigation: Losing Balance on Purpose within Random Step Environment Proceedings of 2010 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, Taipei, Taiwan, October 2010, pp.349-356. (Finalist of the award "IROS2010 RoboCup Best Paper Award")
3. Evgeni Magid, Takashi Tsubouchi. Defining a Search Tree for Rescue Robot Navigation in Random Step Environment: Translation Step. JSME Robotics and Mechatronics Conference, Asahikawa, Japan, June 2010.
4. Evgeni Magid, Takashi Tsubouchi. Static Balance for Rescue Robot Navigation: Translation Motion Discretization Issue within Random Step Environment, Proceedings of International Conference on Informatics in Control, Automation and Robotics (ICINCO2010), pp. 415-422, 2010.

■ヴァイグル, マティアス

1. "Japanese curriculum vs. Chinese curriculum: Acupuncture Education in the Edo period" North American Journal of Oriental Medicine, Vol.17, No.49, July 2010, pp.8-12.

■王 昕

1. "2-D spatiotemporal visualization system of expired gaseous ethanol after oral administration for real-time illustrated analysis of alcohol metabolism" .Xin WANG, Eri ANDO, Daishi TAKAHASHI, Takahiro ARAKAWA, Hiroyuki KUDO, Hirokazu SAITO and Kohji MITSUBAYASHI, Talanta, 82 (2010) 892-898.
2. "Real-time chemiluminescence visualization system of spacially-distributed exhausted ethanol breath on enzyme immobilized mesh substrate" ,Takahiro ARAKAWA, Xin WANG, Eri ANDO, Hiroyuki ENDO, Daishi TAKAHASHI, Hiroyuki KUDO, Hirokazu SAITO, Kohji MITSUBAYASHI, Luminescence, 25, (2010) 185-187.
3. "Fiber-optic bio-sniffer (biochemical gas sensor) for high-selective monitoring of ethanol vapor using 335nm UV-LED" ,Hiroyuki KUDO, Masayuki SAWAI, Yuki SUZUKI, Xin WANG, Tomoko GESSEI, Daishi TAKAHASHI, Takahiro ARAKAWA, Kohji MITSUBAYASHI, Sensors and Actuators B 147 (2010) 676-680.

■尹 ジンヒ

1. 「韓国の成人未婚女性の親子関係と自立困難の経験—母親・父親・娘のマッチング・データの分析から」, 『PROCEEDING 12』 11-9, 2010.

【2011 年度奨学生】

■鄭 淳一

1. 「『貞観 11 年 (869) 新羅海賊』の来日航路に関する小考」, 『東アジアのなかの韓日関係史』上 JNC, 2010 年 5 月. (韓国語)
2. 「新羅海賊事件からみた交流と共存—大宰府管内居住新羅人の動向を手がかりとして—」, 『立命館大学コリア研究センター次世代研究者フォーラム論文集』第 3 号, 立命館大学コリア研究センター, 2010 年 7 月. (日本語)
3. 「貞観年間における弩師配置と新羅問題」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 56 輯第 4 分冊, 早稲田大学大学院文学研究科, 2011 年 2 月. (日本語)
4. 「寛平新羅海賊考」, 『史観』第 164 冊, 早稲田大学史学会, 2011 年 3 月. (日本語)

■李 彦銘

(雑誌論文・査読有)

1. 「一九七〇年代初頭における日本経済界の中国傾斜とその背景」, 『国際政治』163 号, pp. 154-168, 2011.
2. 「小泉政権期における日本経済界の対中認識」, 『法学政治学論究』88 号, pp. 111-138, 2011.

■彭 浩

1. 「享保期の唐船打ち払いと幕藩制国家」, 『史学雑誌』119 - 8, 2010 年 8 月.
2. 「信牌制度の基礎研究—信牌方およびその職務」, 藤田覚編『18 世紀日本の政治と外交』, 山川出版社, 2010 年 10 月.

■朴 文英

1. High-Density Lipoprotein Facilitates In Vivo Delivery of α -Tocopherol-Conjugated Short-Interfering RNA to the Brain. Uno Y, Piao W, Miyata K, Nishina K, Mizusawa H, Yokota T. Hum Gene Ther. 2011 Mar 21. [Epub ahead of print]
2. Intraperitoneal AAV9-shRNA inhibits target expression in neonatal skeletal and cardiac muscles. Mayra A, Tomimitsu H, Kubodera T, Kobayashi M, Piao W, Sunaga F, Hirai Y, Shimada T, Mizusawa H, Yokota T. Biochem Biophys Res Commun. 2011 Feb 11;405(2):204-9. Epub 2011 Jan 8.

■謝 惠貞

1. 「巫永福『眠い春杏』と横光利一『時間』—新感覚派模写から『意識』の発見へ」, 『日本台湾学会報』第 12 号, 2010 年 5 月.
2. 「中国新感覚派の誕生—劉呐鷗による横光利一作品の翻訳と模作創造」, 『東方学』第 121 輯, 2011 年 1 月.

以上

◇ 設立の趣旨について

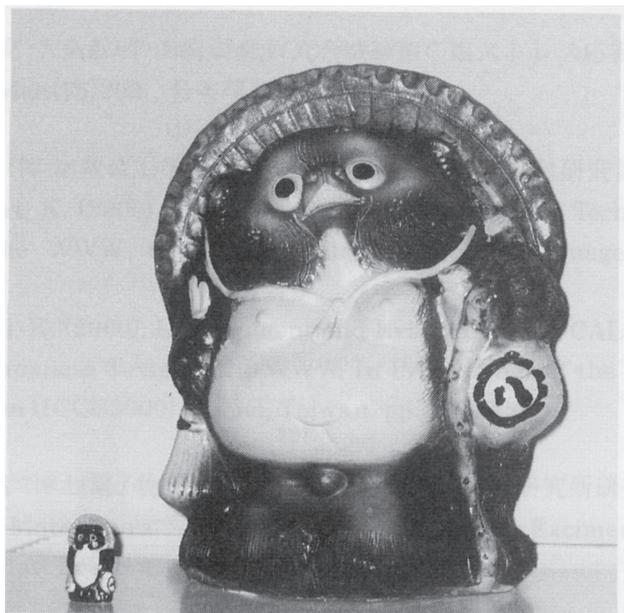
近年の交通・通信手段の発達により、海外旅行者の数はめざましく増加し、また、世界中の出来事が即座に伝えられるようになりました。このような時代に生きる私達は、もはや国家という単位ではなく、国際社会の一員として物事をとらえていかなければならないのではないのでしょうか。しかし、現在経済大国となった日本は、国際的な活動をもっと積極的に押し進め、世界に対してより大きな役割を果たすことができるのではないかと指摘されています。

渥美国際交流奨学財団は、1993年10月14日に物故いたしました渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志により、このような状況にあります日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて設立されました。当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に対し、奨学援助をいたします。日本にやって来た留学生が、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができましようお手伝いさせていただきたいと思います。

渥美氏は、アジア、西太平洋建設業協会国際連盟（IFAWPCA）会長、世界建設業連盟（CICA）会長、及び社団法人CISV日本協会会長を長年にわたって勤め、国際交流に尽くしてまいりました。CISV（国際こども村）とは、「世界の平和を築くためには子供の時から機会を与え、国籍・人種・言語を越えて同じ人間であることを肌で実感させることが何より大切」という理想のもとに1951年アメリカで始められた平和運動で、毎年世界各地で子供達を集めてキャンプを行なっています。

また、渥美健夫・伊都子夫妻は、ニューヨークのコロンビア大学に日本美術史の冠講座を寄付いたしました。これによりコロンビア大学では、日本美術史の教授職が常置されることになりました。

渥美国際交流奨学財団は、渥美氏の国際交流の促進への信念を引き継ぎ、一層の発展をめざして、活動してまいりたいと思います。若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道がひらかれてゆくことを願っております。



◇ 2010 年度業務日誌

- 4月 2日 4月例会（於：日中友好会館内 中華レストラン『豫園』）
- 28日 第12回マニラ共有型成長セミナー アジア太平洋大学 APEC Communications ビル 301 号室
「共有型成長と環境：フィリピン都市道路交通を事例として」
- 5月 6日 5月例会：個人面談（11日まで）
- 24日 2009年度会計監査
- 6月 1日 2009年度年報発行
- 2日 第33回理事会・評議員会（2009年度事業報告と決算報告）・親睦会（6月例会）
- 7月 1日 募集要項配布（関東地方の大学に通知、ホームページに掲載）
- 2日 蓼科リクリエーション旅行（4日まで）
- 3日 第38回 SGRA フォーラム in 蓼科
「Better City, Better Life：東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル」
（於：東京商工会議所蓼科フォーラム） SGRA レポート # 55
- 21日 7月例会：東京国際空港 D 滑走路新設工事現場見学会
- 8月31日 9月例会：個人面談（6日まで）
- 9月 1日 2011年度奨学生応募受付開始
- 9～10日 第3回ウランバートル国際シンポジウム「日本・モンゴルの過去と現在——20世紀を中心に」
（於：モンゴル・ウランバートル モンゴル・日本人材開発センター）
- 13日 第5回 SGRA チャイナフォーラム in フフホト 内モンゴル大学学術研究センター
「中国の環境問題と日中民間協力～地下資源開発を中心に～」
- 15日 第5回 SGRA チャイナ・フォーラム in 北京
北京外国語大学 日本学研究センター多目的ホール
「中国の環境問題と日中民間協力～北京の水問題を中心に～」 SGRA レポート # 56
- 21日 臨時理事会・評議員会（公益財団法人移行認定申請関係）
- 30日 2011年度奨学生応募締め切り（応募者総数 130名）
- 10月 4日 10月例会：食事会（於：柿安三尺三寸箸 ルミネ新宿店）
- 9日 2011年度奨学生書類審査
- 16日 第39回 SGRA フォーラム「ポスト社会主義時代における宗教の復興」
（於：東京国際フォーラム） SGRA レポート # 57（編集集中）
- 21日 2011年度奨学生候補者予備面接（27日まで）
- 11月 5日 渥美奨学生の集い 王敏先生を迎えして「日本と中国 相互誤解の構造」
（於：鹿島新館：渥美国際交流奨学財団ホール）
- 27日 2011年度奨学生最終選考・面接
- 29日 12月例会：個人面談（7日まで）
- 12月17日 SGRA 第13回日比共有型成長セミナー「農村と都会における貧困コミュニティー」
（於：フィリピン大学）
- 1月15日 1月例会：新年会
- 2月 1日 2月例会：個人面談（8日まで）
- 19日 第10回日韓アジア未来フォーラム
「1300年前の東アジア地域交流」（於：日本・奈良県新公会堂） SGRA レポート # 59（編集集中）
- 3月 5日 3月例会：2010奨学生研究報告会
- 6日 第40回 SGRA フォーラム「東アジアの少子高齢化問題と福祉」
（於：東京国際フォーラム） SGRA レポート # 60（編集集中）
- 16日 第34回理事会・評議員会（2011年度事業計画と収支予算）
- 23日 2010年度奨学生最終食事会（於：京王プラザホテル スーパービュフェ「グラスコート」）

◇ 2010 年度収支決算明細書

(単位：円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入		事業費	
基本財産配当金	24,000,000	公1 奨学事業	37,551,240
基本財産債券利息	12,055,418	公2 国際交流事業	12,415,034
基本財産売却益等	14,190,453		
特定資産運用収入	150,000	管理費	3,418,673
助成・委託補助金等収入	1,826,500	次期繰越収支差額	88,662,295
寄附金収入			(内6,000万円は奨学資金積立金)
寄附金(奨学事業指定)	16,520,000		
寄付金(交流事業指定)	2,611,438		
雑収入			
運用財産受取利息	8,329		
その他雑収入	16,500		
前期繰越収支差額	70,668,604		
収入合計	142,047,242	支出合計	142,047,242

◇ 貸借対照表 (2011年3月31日現在)

(単位：円)

I 資産の部		II 負債の部	
1. 流動資産		1. 流動負債	
(1) 現金	1,269	1) 預り金	26,940
(2) 普通預金	27,329,066	流動負債合計	26,940
(3) 郵便預金	1,358,900		
流動資産合計	28,689,235	III 正味財産の部	
2. 固定資産		1. 指定正味財産	
(1) 基本財産		1) 基本財産	1,432,000,000
1) 投資有価証券	1,126,728,958	2. 一般正味財産	88,662,295
2) 定期預金	305,271,042	正味財産合計	1,520,662,295
基本財産計	1,432,000,000		
(2) 特定資産			
1) 渥美奨学基金定期預金	60,000,000		
固定資産合計	1,492,000,000		
資産合計	1,520,689,235	負債及び正味財産合計	1,520,689,235

◇財団人名簿

(2011年5月現在)

★評議員

渥美 直紀	鹿島建設株式会社代表取締役副社長
明石 康	財団法人国際文化会館理事長
渥美 雅也	財団法人東京水産振興会常務理事
蟻川 芳子	日本女子大学名誉教授
岩崎 統子	社団法人C I S V日本協会副会長
加藤 秀樹	構想日本代表、行政刷新会議事務局長
佐藤 直子	社団法人プロテニス協会理事
田村 次朗	慶應義塾大学法学部教授
遠山 友寛	T M I 総合法律事務所パートナー
永山 治	中外製薬株式会社代表取締役社長
堀田 健介	グリーンヒル・ジャパン取締役会長
水谷 弘	専修大学名誉教授
宮崎 裕子	長島・大野・常松法律事務所パートナー
八城 政基	元株式会社新生銀行取締役社長
山本 尚子	財団法人伊藤謝恩育英財団常務理事

★理事

渥美 伊都子	理事長（代表理事）
今西 淳子	常務理事（業務執行理事）
高 偉俊	北九州市立大学国際環境工学部教授
片岡 達治	元癌研究会癌化学療法センター主任研究員
金 外淑	兵庫県立大学看護学部心理学系教授
嶋津 忠廣	事務局長
角田 英一	財団法人アジア21世紀奨学財団理事長
平川 均	名古屋大学大学院経済学研究科教授
李 恩民	桜美林大学リベラルアーツ学群教授

★監事

秋山 豪	鹿島建設株式会社顧問
石井 茂雄	石井公認会計士事務所所長

★選考委員

委員長	畑村 洋太郎	東京大学名誉教授、工学院大学グローバルエンジニアリング学部教授（産業機械工学）
	井上 博允	東京大学名誉教授、産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センター顧問（情報工学）
	片岡 達治	（理事）（薬学）
	佐野 みどり	学習院大学文学部教授（美術史）
	田村 次朗	（評議員）（法学）
	平川 均	（理事）（経済学）

★事務局

事務局長 嶋津 忠廣
事務局 谷原 正
石井 慶子

◇奨学生名簿

【1995年度奨学生】

Bambling, Michele バンプリング、ミッシェル：博士（美術史）コロンビア大学（慶應義塾大学）：Zayed 大学教授（在アブダビ）
Gao Lingna 高 玲娜：博士（社会学）一橋大学：（在横須賀）
Gao Weijun 高 偉俊：博士（建設工学）早稲田大学：北九州市立大学国際環境工学部教授、西安交通大学兼職教授（在北九州）
Jin Xi 金 熙：博士（物理情報学）東京工業大学：Sheerwood 科技发展有限公司社長（在北京）
Kwack Jae-Woo 郭 在祐：博士（美術史）学習院大学：日本大学文理学部、学習院大学文学部非常勤講師
Maquito, Ferdinand マキト、フェルディナンド：博士（経済学）東京大学：アジア太平洋大学研究顧問
Park Chul-Ju 朴 哲主：博士（商学）慶應義塾大学：三育大学経営学部副教授（在ソウル）
Park Jung-Ran 朴 貞蘭：博士（社会福祉学）日本女子大学：仁済大学社会福祉科副教授（在釜山）
Shi Jianming 施 建明：博士（数理工学・社会工学）筑波大学：室蘭工業大学情報工学科准教授（在室蘭）
Yao Hui 葉 会：早稲田大学（日本文学）：法政大学国際文化情報学部非常勤講師
Youn Seok-Hee 尹 錫姫：博士（商学）専修大学：仁徳大学観光学部非常勤講師（在ソウル）
阪神大震災被災特別奨学生
Chen Xiao 陳 曉：神戸大学（医学）
Horng Der-juinn 洪 徳俊：博士（経営学）神戸大学：国立中央大学企業管理系副教授（在台湾桃園）
Wang Libin 王 立彬：神戸大学（自然科学）：（株）東洋インキ製造

【1996年度奨学生】

Chantachote, Viravat チャンタチャテ ビラバット：博士（法学）慶應義塾大学：タマサート大学法学部准教授、教務部長（在バンコク）
Gulenc, Selim Yucel グランチ、セリム：東京大学（政治学）：宗教法人京都ムスリム協会理事、イスラーム文化センター代表（在京都）
Khin Maung Htwe キン マウン トウエ：博士（応用物理）早稲田大学：Ocean Resource Production Co., LTD. 社長（在ヤンゴン）
Kim Woong-Hee 金 雄熙：博士（国際政治経済学）筑波大学：仁荷大学校国際通商学部副教授（在仁川）
Lee Nae-Chan Huey 李 來賛：博士（管理工学）慶應義塾大学：漢城大学経済学部副教授（在ソウル）
Nam Ki-Jeong 南 基正：博士（国際関係論）東京大学：ソウル大学日本研究所 HK 教授（在ソウル）
Park Keun-Hong 朴 根弘：博士（生命理工学）東京工業大学
Qiao Xin 喬 辛：博士（無機材料工学）東京工業大学：（在ボストン）
Trede, Melanie Maria トレーデ、メラニー：博士（日本美術史）ハイデルベルク大学（学習院大学）：ハイデルベルグ大学東洋美術史研究所（在ハイデルベルグ）
Zhao Qing 趙 青：お茶の水女子大学（比較文化）：（在東京）
Zhu Tingyao 朱 庭耀：博士（船舶海洋工学）東京大学：（財）日本海事協会技術研究所首席研究員 / ハルビン工科大学客

員教授

【1997年度奨学生】

- De Maio, Silvana デマイオ、シルバーナ：博士（日本語学）東京工業大学：ナポリ大学オリエンターレ専任講師（在ナポリ）
 Fang Meili 方 美麗：博士（言語学）お茶の水女子大学：お茶の水女子大学外国人教員
 Isananto, Winursito イサナント、ウィヌルシト：博士（応用化学）慶應義塾大学：インドネシア通産省皮革産業開発研究所研究員（在ジョクジャカルタ）
 Kim Woe-Sook 金 外淑：博士（健康科学）早稲田大学：兵庫県立大学看護学部心理学系教授（在神戸）
 Katagiri, Laohaburanakit Kanokwan (Noi) 片桐カノックワン、ラオハブラナキット（ノイ）：博士（言語学、日本語教育）筑波大学：チュラロンコン大学文学部日本語講座助教授（在バンコク）
 Lee Hyang-Chul 李 香哲：博士（経済学）一橋大学：光云大学日本学科教授（在ソウル）
 Li Enmin 李 恩民：博士（社会学）一橋大学：桜美林大学リベラルアーツ学群教授
 Nizamidin Jappar ニザミディン ジャップル：博士（応用化学）東京大学：キモト・テック（在米ジョージア）
 Wang Yuepeng 王 岳鵬：博士（医学）東京大学：タフツ大学医学部タフツ医療センター分子心臓病研究所研究員（在ボストン）
 Williams, Duncan ウィリアムズ、ダンカン：博士（宗教学）ハーバード大学（上智大学）：南カルフォルニア大学宗教学部長（在ロサンゼルス）
 Zhang Shao-min 張 紹敏：博士（医学）東京大学：ペンシルベニア州立大学医学部神経と行動学科助理教授（在米ハーシー）

【1998年度奨学生】

- Adiole, Emmanuel アディオレ、エマニュエル：博士（政治学）東京大学：ナイジェリア・エネルギー環境研究所主任研究員（在ナイジェリア）
 Cao Bo 曹 波：博士（建設工学）早稲田大学：株式会社北京NTTデータジャパン
 He Zuyuan 何 祖源：博士（先端学際工学 / 光電子工学）東京大学：東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻特任教授
 Hu Jie 胡 潔：博士（文学）お茶の水女子大学：名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授（在名古屋）
 Kim Jaesung 金 宰晟：東京大学（仏教学）：仏教大学院大学（在ソウル）
 La Insook 羅 仁淑：博士（経済学）早稲田大学修了、流通経済大学：国土舘大学政経学部非常勤講師
 Lee Joo-Ho 李 周浩：博士（電子工学）東京大学：立命舘大学情報理工学部情報コミュニケーション学科准教授（在滋賀）
 Mailisha マイリーサ：博士（社会学）一橋大学：立教大学非常勤講師
 Sun Yanping 孫 艶萍：博士（医学）東京大学：ハーバード大学ブリッグム病院放射線科准教授（在ボストン）
 Wu Hongmin 呉 弘敏：博士（精密工学）東京工業大学：フクダ電子（株）
 Xu Xiaoyuan 許 曉原：博士（農学生命科学）東京大学：コロンビア大学ナオミベリーセンター研究員（在ニューヨーク）

【1999年度奨学生】

- Coimbra, Maria Raquel Moura コインブラ、マリア・ハケウ・モウラ：博士（資源育成学）東京水産大学：ペルナンブコ州立大学農水学部応用遺伝子研究室助教授（在ブラジル）
 Hong Kyung-Jin 洪 京珍：博士（化学環境工学）東京工業大学：韓国環境省環境部環境政策室化学物質安全課（在ソウル）
 Hou Yankun 侯 延琨：博士（物理電子化学 / 薬学）東京工業大学：ノムラ・インターナショナル（在香港）
 Ju Yan 具 延：博士（農学）筑波大学：メッツォペーパージャパン（株）
 Li Gangzhe 李 鋼哲：立教大学（経営学 / 経済学）：北陸大学未来創造学部教授（在金沢）
 Mushikasinthorn Prachya ムシカシントーン、プラチャー：博士（資源育成学）東京水産大学：カセサート大学水産学部

助教授 (在バンコク)

Vu Thi Minh Chi ブ ティ ミン チー:博士 (地域研究) 一橋大学:ベトナム社会科学院人間科学研究所研究員 (在ハノイ)

Wang Dan 王 旦:博士 (音楽) 東京藝術大学:バイオリニスト/昭光物産 (株)

Yang Jie Chi 楊 接期:博士 (教育工学) 東京工業大学:国立中央大学網路学習科技研究所教授 (在台湾桃園)

Yeh Wen-chang 葉 文昌:博士 (電子物理工学) 東京工業大学:島根大学総合理工学部電子制御システム工学科准教授 (在松江)

Zhou Haiyan 周 海燕:博士 (医学) 東京医科歯科大学:たてやまクリニック院長 (在富山県)

【2000年度奨学生】

Jin Zhengwu 金 政武:博士 (物質科学) 東京工業大学:東芝 (株)

Jung Jae Ho 鄭 在皓:博士 (物質科学) 慶應義塾大学:三星電子 LCD 総括 LCD 開発室 (在韓 CheonAnn)

Jung Sung Chun 鄭 成春:博士 (経済学) 一橋大学:対外経済政策研究院 (KIEP) 日本チーム長、一橋大学大学院経済学研究科客員研究員 (在東京)

Ko Hee Tak 高 熙卓:博士 (総合文化) 東京大学:延世大学政治外交学科研究教授 (在ソウル)

Lim Chuan-Tiong 林 泉忠:博士 (国際政治学) 東京大学:ハーバード大学客員研究員 (在ボストン)、琉球大学法文学部准教授

Molnar Margit モルナール、マルギット:博士 (経済学) 慶應義塾大学:OECD 研究員 (在パリ)

Naiwala Pathirannehelage Chandrasiri ナイワラ パティランネヘラゲ チャンドラシリ:博士 (電子情報) 東京大学:トヨタ IT 研究センター研究員

Ren Yong 任 永:博士 (医学) 群馬大学:ニューヨーク州立大学医学部研究員 (在米バッファロー)

Suzuki Sato Hiromi スズキ サトウ、ヒロミ:慶應義塾大学 (経済学): (在東京)

Wu Yuping 武 玉萍:博士 (医学) 千葉大学:理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター (CD) (在神戸)

Xu Xiangdong 徐 向東:博士 (社会学) 立教大学:(株) 中国市場戦略研究所代表取締役

Zeng Zhinong 曾 支農:博士 (アジア文化) 東京大学:(在武漢)

【2001年度奨学生】

Borjigin, Burensain ボルジギン、ブレンサイン:博士 (東洋史) 早稲田大学:滋賀県立大学人間文化学部准教授 (在彦根市)

Fan Jianting 範 建亭:博士 (経済学) 一橋大学:上海財経大学国際工商管理大学院助教授 (在上海)

Jeon Jin Hwan 全 振煥:博士 (建築材料) 東京工業大学:鹿島建設 (株) 技術研究所主任研究員

Jiang Huiling 蔣 恵玲:博士 (電子情報工学) 横浜国立大学:(株) NTT ドコモ・総合研究所 研究主任

Jin Xianghai 金 香海:博士 (政治学) 中央大学:延辺大学アジア研究センター教授兼副センター長 (在延吉)

Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ:博士 (システム工学) 東京都立科学技術大学:パナソニック・ヨーロッパ社 (在フランクフルト)

Lee Hyun-Young 李 炫瑛:博士 (比較文化) お茶の水女子大学:建国大学校師範大学日本語教育科助教授 (在ソウル)

Lee Young-Suk 李 英淑:博士 (教育学) 筑波大学:釜山大学校師範大学数学教育科非常勤講師 (在釜山)

Liang Xingguo 梁 興国:博士 (化学生命工学) 東京大学:名古屋大学物質制御工学専攻准教授 (在名古屋)

Lwin U Htay ユ ティ ルイン:博士 (社会医学及び公衆衛生学) 東京医科歯科大学:東京医科歯科大学難治疾患研究所共同研究員

Qi Jin Feng 奇 錦峰:博士 (薬理学) 東京医科歯科大学:広州中医薬大学中薬学院教授 (在広州)

Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko スリ スマンティヨ、ヨサファット テトオコ:博士 (人工システム科学) 千葉大学:千葉大学環境リモートセンシング研究センター准教授

【2002 年度奨学生】

- Baek Insoo 白 寅秀：博士（商学）早稲田大学：（在ソウル）
- Chen Tzu-Ching 陳 姿菁：博士（国際日本学）お茶の水女子大学：開南大学日語学系助理教授、台湾大学兼任助理教授（在台北）
- Jo Gyuhan 曹 奎煥：博士（地質学）早稲田大学：JX 新日鉱日石開発（株）（在マレーシア）
- Hu Biangqun 胡 炳群：博士（システム工学）日本工業大学：日豊興業株式会社（在名古屋 / 広州）
- Iko Pramudiono イコ プラムディオノ：博士（電子情報工学）東京大学：インドネシア三井物産（在ジャカルタ）
- Mandah, Ariunsaihan マンダフ、アリウンサイハン：博士（地域社会学）一橋大学：（在米カンザス）
- Mukhopadhyaya, Ranjana ムコパディヤーヤ、ランジャンナ：博士（宗教学宗教学史）東京大学：デリー大学・東アジア研究科准教授（在デリー）
- Park Young-June 朴 栄濬：博士（国際社会科学）東京大学：国防大学校安全保障大学院副教授、ハーバード大学 Weatherhead Center U. S. - Japan Program 訪問研究員（在ボストン）
- Sun Jianjun 孫 建軍：博士（日本語学）国際基督教大学：北京大学外国語学院日本語文化学部助教授（在北京）
- Wang Xi 王 溪：博士（電子情報工学）東京大学
- Yimit, Abliz イミテ、アブリズ：博士（人工環境システム）横浜国立大学：新疆大学化学化工学院教授（在ウルムチ）
- Yu Xiaofei 于 曉飛：博士（社会文化科学）千葉大学：日本大学法学部准教授

【2003 年度奨学生】

- Chae Sang Heon 蔡 相憲：博士（生物生産学）東京農工大学：天安蓮庵大学産学協力担当教授（在韩国天安）
- Chang Kuere 張 桂娥：博士（学校教育学—言語文化）東京学芸大学：東呉大学日本語文学系助理教授（在台北）
- Husel フスレ：博士（地域文化）東京外国語大学：昭和女子大学総合教育センター非常勤講師
- Kim Hyeon Wook 金 賢旭：博士（総合文化—表象文化）東京大学：韓国外国語大学・檀国大学非常勤講師（在ソウル）
- Kwak Jiwoong 郭 智雄：博士（経営学）立教大学：九州産業大学商学部商学科准教授、ノーステキサス大学交換教授（在テキサス）
- Lin Shaoyang 林 少陽：博士（総合文化—言語情報科学）東京大学：香港城市大学中文翻訳及言語学科（在香港）
- Lu Yuefeng 陸 躍鋒：東京海洋大学（海洋情報システム）：Merit Intelligence Development Centre, Director（在トロント）
- Piao Zhenji 朴 貞姫：博士（応用言語学）明海大学：北京語言大学外国語学院日本語学部教授、北陸大学交換教授（在金沢）
- Tisi, Maria Elena ティシ、マリアエレナ：博士（児童文学）白百合女子大学：ボローニャ大学、ペルージャ外国人大学非常勤講師（在ボローニャ）
- Yamaguchi, Ana Elisa ヤマガチ、アナエリーザ：一橋大学（社会学）：上智大学外国語学部助教
- Yun Hui-suk ユン ヒスク：博士（材料学）東京大学：韓国機械研究院付属材料研究所（KIMS）（在韓慶南道昌原）
- Zang Li 臧 俐：博士（学校教育学—教育方法論）東京学芸大学：東海大学短期大学部准教授

【2004 年度奨学生】

- Ampong, Beryl Nyamekye アンボン、ベリル・ニャメチェ：博士（薬理学）東京医科大学：Children's National Medical Center（在ワシントン D.C.）
- Chin, Angelina Yan yan チン、アンジェリーナ：博士（ジェンダー研究）カリフォルニア大学サンタクルーズ校（お茶の水女子大学）：Pomona College 准教授（在カリフォルニア）
- Khomenko, Olga ホメンコ、オリガ：博士（地域文化研究）東京大学：（在キエフ）
- Lee Jea Woo 李 済宇：博士（地盤地震工学）早稲田大学：Worley Parsons（在メルボルン）
- Lee Sung Young 李 承英：博士（言語学）筑波大学：光云大学日本学科（在ソウル）

Meng Zimin 孟 子敏：博士（言語学）筑波大学：松山大学人文学部教授
 Mullagildin, Rishat ムラギルディン、リシャット：慶応義塾大学（環境デザイン）：RAUM Architects 社長（在ロシア、ウファ）
 Napoleon ナポレオン：博士（機械制御システム）東京工業大学：日産自動車（株）総合研究所
 Sonntag, Mira ゾンターク、ミラ：博士（宗教史学）東京大学：立教大学文学部キリスト教学科准教授
 Tsai Ying-hsin 蔡 英欣：博士（法学）東京大学：国立台湾大学法学部助理教授（在台北）
 Yang Myung Ok 梁 明玉：博士（人間発達科学）お茶の水女子大学：お茶の水女子大学大学院人間創成科学研究科研究員
 Ye Sheng 叶 盛：博士（先端学際工学）東京大学：東莞九域星医薬科技有限公司（在香港）

【2005 年度奨学生】

Bao Lian Qun 包 聯群：博士（言語情報学）東京大学：東京大学大学院総合文化研究科学術研究員、首都大学東京非常勤講師、中国言語戦略研究センター（南京大学）客員研究員
 Han Junqiao 韓 珺巧：博士（建築学）早稲田大学：国立ローレンス・パークレー研究所研究員（在カリフォルニア）
 Han Kyoung Ja 韓 京子：博士（日本文化研究）東京大学：慶熙大学校日本語学科助教授（在ソウル）
 Jiang Susu 江 蘇蘇：博士（物理情報工学）横浜国立大学：東芝セミコンダクター社
 Kim Bumsu 金 範洙：博士（社会系教育—歴史）東京学芸大学：横浜国立大学・東京学芸大学・和洋女子大学・茨城キリスト教大学・日本社会事業大学非常勤講師。（韓国）国立公州大学校客員教授・ソウル教育大学校招聘教授。（社）国際交流振興協会長（JAI）
 Kim Yeonkyeong 金 娟鏡：東京学芸大学（心理学）：帝京平成大学現代ライフ学部、近畿大学九州短期大学非常勤講師、YMCA 健康福祉専門学校講師
 Lan Hong Yueh 藍 弘岳：博士（地域文化研究）東京大学：国立交通大学社会と文化研究所助教授（在台北）
 Tenegra, Brenda Resurecion Tiu テネグラ、ブレンダ レスレション ティウ：博士（人間発達科学）お茶の水女子大学：ノッティンガム大学社会学社会政策学部特任講師（在英ノッティンガム）
 Vo Chi Cong ヴォー チー コン：東京工業大学（数理・計算科学）：（株）トリニティセキュリティシステムズ
 Wang Xueping 王 雪萍：博士（政策メディア）慶応義塾大学：東京大学教養学部講師（専任）
 Wong Kin Foon Kevin 王 健歡：博士（統計科学）総合研究大学院：ハーバード大学医学部 MGH 病院研究員（在ボストン）
 Zhao Changxiang 趙 長祥：博士（商学）一橋大学：（在上海）

【2006 年度奨学生】

Chu Xuan Gao チュ・スワン・ザオ：東京外国語大学（文化人類学）：ベトナム社会科学院文化研究所研究員（在ハノイ）
 Hu Xiuying 胡 秀英：博士（看護教育学）千葉大学：四川大学華西看護学部華西病院准教授（在成都）
 Hyun Seungsoo 玄 承洙：博士（地域文化）東京大学：漢陽大学 HK 教授（在ソウル）
 Li Chengri 李 成日：博士（政治学）慶応義塾大学：東西大学校国際学部国際関係学講師（在釜山）
 Liang Yun-hsien 梁 蘊嫻：博士（比較文化）東京大学：淡江大学日本語文学系非常勤講師（在台北）
 Mohottala, Shirmila モホッタラ、シャミラ：博士（情報理工学）東京大学：（株）オリンパス社
 Pantcheva, Elena Latchezarova パンチェワ、エレナ：博士（日本研究）千葉大学：日永インターナショナル（株）
 Seo Kyoung Sook 徐 景淑：慶応義塾大学（美学美術史）：（在ソウル）
 Sim Choon Kiat シム チュン キャット：博士（教育学）東京大学：日本大学、日本女子大学、埼玉大学非常勤講師
 Sun Junyue 孫 軍悦：博士（言語情報科学）東京大学：東京大学教養学部講師
 Weerasinghe, Nalin ウィーラシンハ、ナリン：博士（電子工学）電気通信大学：シュルンベルジェ（株）電子エンジニア
 Woo Seonghoon 禹 成勲：博士（建築学）東京大学：（在仁川）

【2007年度奨学生】

- Chan Chai-fong 詹 彩鳳：東京大学（地域文化研究）：（在台北）
- Deng Fei 鄧 飛：博士（先端エネルギー学）東京大学：デラウェア大学特別研究員（在米デラウェア）
- Gangbagana ガンバガナ：博士（地域文化研究）東京外国語大学：国際教養大学非常勤講師
- Kim Minsuk 金 玟淑：博士（建築学）早稲田大学：立命館大学歴史都市防災研究センター PD 研究員（在京都）
- Lee Eungyong 李 垠庚：博士（地域文化研究）東京大学：ソウル大学日本研究所 HK 研究教授（在ソウル）
- Mijiti, Abuduxukuer メジテ、アブドシュクル：博士（外科学）東京医科大学：新疆ウイグル自治区カシュガル地区第一人民病院腫瘍センターセンター長（在ウイグル）
- Park Sohyun 朴 昭炫：博士（文化資源学）東京大学：韓国文化観光研究院文化芸術政策担当責任研究員（在ソウル）
- Porrás Rojas Oscar ポラス、ロハス オスカル：博士（応用環境システム学）東京海洋大学：コスタリカ大学太平洋岸校副学長（在コスタリカ、プンタレナス）
- Quan Mingai 権 明愛：博士（社会福祉学）日本社会事業大学：十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科
- Wang Jian Hong 王 劍宏：博士（建設工学）早稲田大学：（株）日本工営中央研究所研究員
- Yan Hainian 顔 海念：博士（国際保健学）東京大学：（株）中外製薬安全性データマネジメント部
- Yaroslav, Shulatov ヤロスラブ、シュラトフ：博士（政治学）慶応義塾大学：東京大学大学院総合文化研究科日本学術振興会外国人特別研究員

【2008年度奨学生】

- Feng Kai 馮 凱：博士（機械工学）東京大学：東京工業大学精密工学研究所助教
- Hong Yunshin 洪 ユンシン：早稲田大学（国際関係学）：早稲田大学国際言語文化研究所客員研究員、青山学院大学非常勤講師
- Shiohara Vroni Friederike 塩原フローニ・フリデリケ：博士（文化財保存学）東京芸術大学：（株）資生堂
- Liu Jian 劉 健：博士（日本語文化）北京大學（早稲田大学）：首都師範大学専任講師（在北京）
- Lkhamsuren, Lkhagvasuren ハムスレン、ハグワスレン：早稲田大学（国際関係学）：早稲田大学モンゴル研究所客員研究員
- Nemekhjargal ネメフジャルガル：博士（経済学）亜細亜大学：内モンゴル大学モンゴル学研究センター（在フフホト）
- Phuong, Kimchhayarasy プアン、キムチャイヤラシー：博士（物性工学）宇都宮大学：（在カンボジア）
- Song Gang 宋 剛：博士（地域文化）桜美林大学：北京外国語大学日本語学部専任講師（在北京）
- Vorno, Heli-Liis ヴェルノ、ヘリ リース：学習院大学（哲学）：学習院大学文学部哲学科非常勤講師
- Wang Wei 王 偉：博士（人工システム）千葉大学：信控学院教授（在南京）
- Xiu Zhen 修 震：博士（機械制御システム）東京工業大学：セコム株式会社 I S 研究所
- Yuk Jaehwa 陸 載和：武蔵野美術大学（造形芸術）：武蔵野美術大学非常勤講師
- Zhang Jian 張 建：博士（教育学）東京大学：（株）ハウスメイト企業開発本部

【2009年度奨学生】

- Choi Eunseok 崔 恩碩：博士（日本史学）国民大学（東京大学）：韓国海洋水産開発院研究員（在ソウル）
- Darwish, Housam ダルウィッシュ、ホサム：博士（地域文化研究）東京外国語大学：日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所
- Kaba Melek カバ 加藤 メレキ：筑波大学（文芸・言語）
- Kim Youngsoon 金 英順：立教大学（日本文学）
- Kwak Youngjoo 郭 榮珠：博士（地球生命圏科学）千葉大学：（独）土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センタ

一 (ICHARM) 専門研究員

- Kwon Nam-hee 権 南希：東京大学（国際法）：関西大学政策創造学部助教
 Rinchin リンチン：博士（地域文化研究）東京外国語大学：内モンゴル大学モンゴル学研究センター（在フフホト）
 Schicketanz, Erik Christopher シッケタンツ, エリック：東京大学（宗教学宗教史学）：東京大学大学院人文社会系研究科特別研究員
 Shermatov Ulugbek シェルマトフ・ウルグベック：博士（民法学）明治大学：ウズベキスタン 最高裁判所上席法務官（在タシケント）
 Son Jounga 孫 貞阿：博士（森林科学）東京大学：国立山林科学院森林病虫害研究科（在ソウル）
 Veldkamp, Elmer フェルトカンブ, エルメル：博士（文化人類学）東京大学：ライデン大学日本学研究所専任講師（在ライデン）
 Ye Kyaw thu イェ チョウ トウ：早稲田大学（国際情報通信学）：早稲田大学国際情報通信研究センター助手
 Zhu Lin 朱 琳：博士（アジア政治思想史）東京大学：東京大学大学院法学政治学研究科特別研究員

【2010 年度奨学生】

- Chaitongdi Phrachatpong チャイトンディー・プラチャッポン：東洋大学（仏教学）
 Choi Jung Eun 崔 禎恩：博士（文化財保存学）東京藝術大学：韓国国立民俗博物館研究員（在ソウル）
 Kiatkobchai Siratsanan キヤアコプチャイ・スィラッサナン：学習院大学（日本語日本文学）
 Kim Kyongtae 金 キョンテ：高麗大学（東京大学）（歴史学）
 Lee Hyun Bom 李 賢凡：博士（材料工学）東京工業大学：東京工業大学ポスドク研究員
 Li Jun 李 軍：早稲田大学（国語教育学）：早稲田大学教育・総合科学学術院助手
 Lu Liang 盧 亮：博士（原子核工学）東京工業大学：理化学研究所外国人特別研究員
 Magid, Evgeni マギッド イヴゲニ：筑波大学（知能機能システム）
 Mya Dwi Rostika ミヤ・ドゥイ・ロスティカ：国土舘大学（政治学）
 Vigouroux, Mathias Dominique Yves ヴィグル, マティアス：二松学舎大学（中国学）：北里研究所東洋医学総合研究所医学史研究所無給研究員、二松学舎大学非常勤助手
 Wang Xin 王 昕：博士（先端医療開発学）東京医科歯科大学：東京都立産業技術研究センター研究員
 Yoon Jin-Hee 尹 ジンヒ：お茶の水女子大学（ジェンダー学際研究）

【2011 年度奨学生】

- Chong Soonil 鄭 淳一：早稲田大学（アジア地域文化学）
 Ho Van Ngoc ホー ヴァン ゴック：千葉大学（建築都市科学）
 Kang Moonhee 姜 文熙：日本社会事業大学（社会福祉学）
 Kim Eun Hye 金 銀恵：ソウル大学／東京大学（都市社会学）
 Kim Suunbe 金 崇培：延世大学／慶應義塾大学（国際政治学）
 Lee Hyojeong 李 孝庭：国際基督教大学（比較文化）
 Li Yanming 李 彦銘：慶應義塾大学（政治学）
 Naheya ナヒヤ：東京大学（地域文化）
 Park Joonui 朴 准儀：ボストン大学／東京大学（国際政治経済）
 Peng Hao 彭 浩：東京大学（日本文化研究）
 Piao Wenying 朴 文英：東京医科歯科大学（脳神経病態学）
 Sie Huei-zhen 謝 惠貞：東京大学（アジア文化研究）

◇ 2012 年度渥美奨学生募集概要

渥美国際交流財団は、日本の関東地方の大学院博士課程に在籍する留学生を対象に、2012 年度渥美奨学生を下記の通り募集します。

(1) 応募資格（奨学期間に下記のすべてに該当すること）

1. 日本以外の国籍を有し、関東地方の大学院博士課程に在籍し、当財団の奨学金支給期間に博士号を取得する見込みのある方。正規在籍年限を超えたために、或いは、他国の大学院より博士号を取得するために、研究員等として日本の大学院に在籍する方も含む。
2. 自分の所属する大学院研究科(研究室)および自分の居住地が、関東地方(東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県・栃木県・群馬県)にある方。
3. 日本語が堪能な方（応募書類と面接は全て日本語だけです）。
4. 国際理解と親善に関心をもち、当財団の交流活動に積極的に参加する意思のある方。
5. 渥美奨学金の受給期間、正規の職（常勤職）に就く予定のない方、他の奨学金や留学生対象の研究助成金を受ける予定のない方（当財団は重複受給を認めていません）。

(2) 交流活動

1. 当財団は、毎月の例会で学業や生活について報告していただいた上で、奨学金を支給します。
2. 毎年数回奨学生や元奨学生と当財団の理事・評議員ならびに選考委員を招き親睦会を催します。年度末には当該年度奨学生の研究報告会を催します。
3. 毎年7月に2泊3日のリクリエーション旅行に招待します。
4. 海外学会参加者奨学金：渥美奨学生で博士号を取得した方には、海外で開催される学会等に一回参加するための旅費・宿泊費および参加費を支給します。ただし、海外にいる方は日本への旅費にあてることができる。

(3) 奨学金の詳細

1. 奨学金は月額 20 万円です。2012 年度は約 10 名採用します。
2. 奨学金の支給は 1 年間です。継続は認められません。

(4) 応募方法

1. 奨学金希望者は、2011 年 7 月 1 日以後、各大学院の留学生担当課または当財団事務局まで、応募要項と申込書をご請求ください。また、同日以後、当財団ホームページ (<http://www.aisf.or.jp>) からダウンロードできます。
2. 2012 年度申込は、2011 年 9 月 1 日から 9 月 30 日まで、郵便にて受け付けます。

(5) 選考の方法

事務局における書類審査と予備面接の後、選考委員による書類選考と面接により審査します。選考の結果は 12 月上旬に通知します。

2010年度の活動にご協力いただいた皆様 ～ありがとうございました～

●奨学事業指定寄付

団体

(株)アクト・テクニカルサポート
中央工業(株)
(株)イリア
鹿島リース(株)
大興物産(株)
(株)八重洲ブックセンター

ケミカルグラウト(株)
大和証券キャピタル・マーケット(株)
鹿島道路(株)
鹿島建物総合管理(株)
(株)都市環境エンジニアリング
横浜実業(株)

中外製薬(株)
イースト不動産(株)
鹿島建設(株)
かたばみ興業(株)
東亜産業(株)

個人

渥美 伊都子 谷原 正
金 賢旭 高 熙卓

八城 政基
ハムスレン、ハグワスレン

朴 哲主

●交流事業（S G R A）指定寄附

団体

鹿島平和研究所
(株)小堀鐸二研究所
(株)虎屋

(財)鹿島育英会
プラス(株)

鹿島建物総合管理(株)
大興物産(株)

個人

足立 憲彦 赤池 豊
浅野 千秋 渥美 伊都子
原 嘉男 畑村 洋太郎
胡 炳群 胡 潔
石井 慶子 石井 茂雄
片岡 達治 河村 一雄
栗原 俊記 黒住 真
松岡 誠司 三澤 正勝
永山 治 中上 英俊
野村 継男 岡本 和久
朴 貞姫 佐野 みどり
鈴木 進一 鈴木 由美子
田村 啓二 東城 清秀
都竹 武年雄 上野 宏
呉 弘敏 武 玉萍
シュラトフ・ヤロスラブ 八城 政基

明石 康
曹 波
開 康寛
藤田 隆則
岩間 陽一郎
金 外淑
李 恩民
宮川 守久
中村 順次
奥村 裕一
佐藤 直子
高橋 甫
外岡 豊
上野 由美子
修 震
葉 文昌

秋葉悦子
鄭 仁豪
廣瀬 幸夫
福田 収一
岩崎 統子
木村 健一
李 鋼哲
水谷 弘
中西 徹
大澤 雄一
施 建明
高橋 司
遠山 幸三
王 劍宏
山田 俊作
朱 庭耀

青木 生子
方美 麗
星埜 弘明
今西 淳子
金 政武
岸本 泰廣
林 少陽
森本 洋史
中曾根 康弘
大塚 寿
嶋津 忠廣
竹本 孝
辻 悦子
王 立彬
山縣 睦

蟻川 芳子
高 偉俊
堀田 健介
井上 博允
具 延
小松 親次郎
前川 昭一
長岡 實
並木 寿光
大内 聖子
鈴木 茂
竹内 忍
角田 英一
王 雪萍
顔 海念

●財団記念祝賀会実行委員会寄付

詹 彩鳳 張 桂娥
韓 京子 何 祖源
金 政武 鄭 成春
郭 智雄 郭 栄珠
李 鋼哲 梁 興国
A. メジテ R. ムラギルディン
施 建明 シム C キャット
王 雪萍 修 震
陸 戴和 韓国ラクーン会

陳 姿菁
胡 潔
カバ メレキ
羅 仁淑
林 少陽
南 基正
孫 貞阿
顔 海念

馮 凱
フスレ
金 範洙
李 濟宇
劉 健
権 明愛
T. マリア エレナ
葉 会

ガンバガナ
全 振煥
金 玫淑
李 來賛
マイリーサ
E. シッケタンツ
王 劍宏
葉 文昌

高 偉俊
江 蘇蘇
金 英順
李 恩民
F. マキト
S. ウルグベック
王 立彬
干 曉飛

公益財団法人 渥美国際交流財団

Atsumi International Foundation

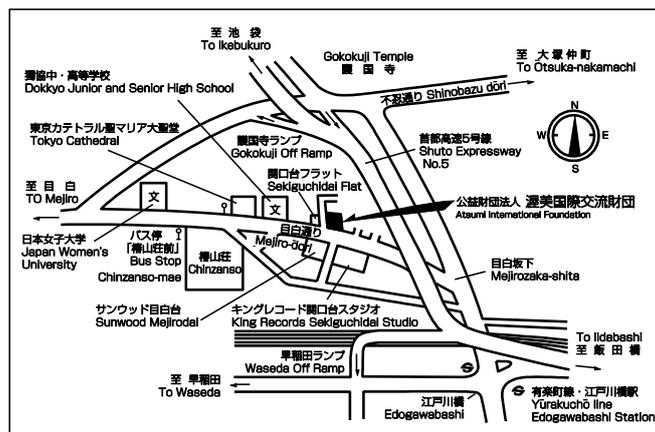
〒112-0014 東京都文京区関口3丁目5番8号

3-5-8 Sekiguchi Bunkyo-ku Tokyo 112-0014 Japan

Phone:03-3943-7612 Fax:03-3943-1512

<http://www.aisf.or.jp>

E-mail:aisf-office@aisf.or.jp



★JR山の手線目白駅より、都バス61番 新宿駅西口行、「椿山荘前」下車・徒歩3分
Take The 61 bus from Mejiro Station (JR Yamanote line) and get off at the "Chinzansomae" stop. 3 min. walk.

★営団地下鉄有楽町線「江戸川橋」(出口A1)下車・徒歩10分

Get off at Edogawabashi station from the Yurakucho subway line. (A1 exit 10 min.walk)

